

250号  
あこら新宿編



戦後フェミニズム雑誌の流れをみる

# あこらとヒロス

あこら二十五周年記念集会から 舟本恵美／斎藤千代／福田光子

あごら25周年

差別の根元に迫ってこそ 斎藤千代 1

二十五周年記念集会から

あごらとエロス —— 戦後フェミニズム雑誌の流れをみる

舟本恵美／斎藤千代／福田光子 2

私と「あごら」——あごら二十五周年に寄せて——上野千鶴子ほか 69

TOPICS 統一地方選で女性大躍進／児童買春禁止法成立 ほか 86

集会から 歴史は誰のものか／99私と憲法のひろば 90

沖縄から 新たな基地にNO！／米軍用地特措法再改悪が危ない ほか 92

おめでどう！ 小川みさ子さん 『女ひとり地方議会に春一番』出版記念パーティ 95

気になる英語 トランス・ベスタイム 奥川 睦 96

2000年世界女性会議はどうなる——国連女性の地位委員会を傍聴して(3) 小川俣子 98

女性に対する暴力——クマラスワミ報告書の紹介(第九回) 前田 朗 106

語りかけたあなたへ22 書見台 大里知子 116

あごら試写室 近親相姦を鋭く告発 セレブレーション——制作ドグメ#1(デンマーク映画) 118

あごら読書室 1945年のクリスマス ペアテ・シロタ・ゴードン著 120

あごらのCDができました One for all. all for one! 122

あごらのあごら 126

## 差別の根元に迫ってこそ

表紙をごらんになって、オヤ？と思われた方も多かったと思います。そうです。二十五周年は二年前。その時お寄せ頂いた言葉を、やっとお目にかけることを、深くお詫びします。

毎日のように気にしながら、「急いで訴えなければならぬこと」の連続でした。

均等法、買春、年金、自費史観、新ガイドライン……。それらに警報を発そうとしないマスメディア。

——小さな『あごら』が声をあげたところで、蟻螂の斧にすぎないことを百も承知で、それでも声をあげ続け、集会・デモに明け暮れた二年でした。しかし、『新安保』は成立。日の丸・君が代、憲法調査会、盗聴法——。大波は怒濤となって迫っています。

『あごら』はもつと女性問題専門誌に、でなければ必要ない、という声をよく耳にしますが、ジェンダー、エンパワメントと唱えれば時代の先端を行くような流れに、私は大きな疑問を抱いています。

『あごら』の出発点は、女が生きにくい構造を考え、それに迫ることにありました。女性の地位は、この四半世紀に、信じられないほど改善されましたが、差別を生んだ構造は、ますます確固としたものになろうとしています。声を出し続けた女性、人口の過半数を占める女性の声は、少しずつ聞き届けられてきましたが、五十四年も耐え続けたマイノリティ、沖縄の状況は、本土のメディアにはほとんど報道されず、その危機は『新安保』で、さらに生命の危機に迫るものになりました。

もちろん、女性差別はまだまだ山積しています。しかし、いのちに関わる問題、最も根元的な問題は、いま一刻の猶予も許されません。この四半世紀、力をたくわえ続けてきた女たちは、今こそ、その力で、『沖縄』に象徴される『構造』に立ち向かいます。

〈あごら〉も力を尽くします。力もお金もない〈あごら〉ですが、だからこそ、どんな抑圧を受けようとも、問題の本質に真向かいたい。私たちは失う何ものも、怖れる何ものもありません。（斎藤千代）

あぐら25周年記念集会から

# あぐらとエロス――

## 戦後フェミニズム雑誌の流れをみる

一九九七年八月三日午後 四谷区民センター

司会（今野 望）お待たせしました。では、さっそくシンポジウムを始めます。最初に斎藤千代さんにごあいさつをお願いします。

斎藤 こんにちは、今日は全国各地からお集まりいただき、ありがとうございます。

何も準備しないのが、いつも〈あぐら〉のいいところでもあり、悪いところでもあるんですね（笑）。北京会議のときも泥縄でワークショップをやったんですが、いつも泥縄でやってなんとなくうまくいくところが良くないといえますか、味をしめましてだんだん泥縄上手になりまして（笑）。今日の寥々たる集まりには「これが〈あぐら〉だ」と言いあいながらも、さすがに本心に申し訳なく思います。

二十周年のときは三百五十人くらいで会場を埋めましたのに、今回は情宣をいっさいしなかったものですから。昨日も嵐山の国立婦人教育会館で、ある方に「舟本さんから明日、〈あぐら〉の会があると聞いたんだけど、『ふえみん』にも何も出ていないし秘密の集会なの?」と言われました（笑）。考えてみた



ら舟本さんにもご連絡する時間がなくてあわててお電話したら『あごろ』で見ましたと(笑)。それだけしかインフォメーションをしていない。〈あごろ〉は貧乏だ貧乏だ、いつまで経っても部数が伸びないと嘆くんですが、こんな皆さんの準備ですから実態を反映しているんだと改めて反省しています。特に遠方からわざわざお忙しい中を駆けつけて下さった方々には申し訳ないと思いますけど、話の途中で取り返そうと……。舟本さんと福田さんという有力なお二人がいらっしゃるので、このお二人におんぶに抱っこで乗り切りたいと思います。

まず舟本恵美さん。司会の大学院生、今野望さんは存じないそうで、『女・エロス』って何ですか、と聞かれたのですが、一世を風靡したフェミニズム雑誌です。ネーミングも良かったし部数も多くて、私たち『あごろ』は長いことやっているけど、インパクトということでは『女・エロス』のほうがはるかに大きかった、と今でも話し合っています。リップ・ブームの先端を切った〈リップセンター〉の方たちも、『女・エロス』の方々も、ときどき見え隠れしながらも、今でもいろんなところで頑張っているらしいです。きつと貴重なお話がうかがえると思います。

〈あごろ〉二十五周年の皮切りは、実は大阪で七月十日にやりました。とてもうれしいことに舟本さんが「斎藤さんが行くなら全国どこでもアゴ足持ちで駆けつけますよ」とやさしいことをおっしゃってくださって、各地で二十五周年をしたいと思ってるんです。全国どこでも呼びいただければ出かけていこうかなと思っております。ひとつの節目として何かをやるということは大事なことだったなと、改めて今頃思っています。

お隣にいらっしゃるのは福田光子さん。かの有名な丸岡秀子さんの妹さ

ん——と言われるのはあまり好きじゃないようですが——弟さんが井出孫六さんで、お兄様が井出一太郎さん。その有名なきょうだいにも少しも劣らないすばらしい方です。私は何十年來のお付き合いです、人間としての質の高さ、お書きになるものの筆の確かさ。すごい方だと、ただただ感嘆しています。「そういう方がいらしたから『あごろ』は続いてきたの」と私が説明すると、多くの方が納得されます。

今日は福田さんにやや客観的なお話を伺って、舟本さんと私はやや主観的にお話します。さつそく舟本さんをお願いします。

## 1 『女・エロス』がめざしたもの——舟本恵美

みなさんこんにちは。『あごろ』二十五周年、おめでとうございます。今日は参加できて、たいへんうれしく思います。『あごろ』と『女・エロス』がどういう背景のなかから出てきたのかということをお話ししながら、いまだに続いている『あごろ』に敬服の念を十分に表して帰れたらなと思っております。

## 大正から昭和初期——女性運動の黎明期

まず初めに、少し堅くなりますが、お許してください。私は話をするのが上手じゃないので、書いてまいりましたのを読ませていただきます。

230号続いている『あこら』を支えてきた背景は、日本の歴史そのものであつて、大正時代から綿々と続いてきた女性運動の背景があるからこそ、この『あこら』がいまだに続いているのだと私は思っています。大正から昭和にかけて、いまのウーマンリブと思われる当時の女性運動がたくましくエネルギーを噴出したしました。その頃も『五色の酒を飲む女』とかいろんなことを言われて、多くの男性の揶揄や嘲笑のもとに文筆活動が活発に行われていたことは、みなさまご存じのとおりでございます。平塚らいてうの『青鞥』、高群逸枝の『婦人戦線』、そして長谷川時雨の『女人芸術』、そのような雑誌のなかで、本当に女性があるがままの個性を発揮できるように願つて、従来の女性論とか家族論とか結婚論とかを激しく批判して、女の思想を高らかにうたつておりました。

大正・昭和の初めというのは、まさに百花繚乱のごとく個性に基づいた意見が出されておりましたけれども、ご存じのように、残念ながら軍国主義というなかでひとつずつ潰され圧殺されていくわけです。発禁、活動家の検挙で思想を奪い、十五年戦争に入つていつてしまうのですが、我々の先輩たちの運動の流れというものは、圧殺されたけれどそこでなくなつてしまつたのではなくて、水脈となつて私たちの歴史の中に再び現れてきたのではないかと思うのですね。戦後すぐの婦人参政権運動にしても、源流は大正時代に発しているわけです。

## 戦後花開いた女性運動——経済成長のなかのいらだち

一九四六年に〈婦人民主クラブ〉が結成されまして、そして同じ年に女性参政権が行使されて、三十九名の女性が当選しております。旧婦人会系の流れも、四八年に〈主婦連台会（主婦連）〉、五二年に〈全

国地域婦人団体連絡協議会（地婦連）として装いを新たにし、戦後すぐ女性運動が社会的戦果を次々と獲得してまいりました。

ただ、一方で経済的な成長もありまして、むしろ思想的には少し右寄りになっていくわけですね。女子は家庭科、男子は技術科と分けたり、結婚願望を煽り立てる女性週刊誌が次々と出てくるわけです。例えば五八年には『女性自身』、六三年には『女性セブン』という週刊誌が創刊されました。六五年にはテレビの各局がモーニングショーなどのショー番組を開始しております。経済的には豊かになりつつある幻想のもので、主婦像、家庭像、結婚観みたいなやわらかな締め付けというか、為政者によってイメーヂづくられたものがだんだんとかたまってまいりました。そのころ我々一般の女性たちは、なんとなくじわじわとくる右傾化に対して非常にイライラを募らせていたわけです。

## ウーマンリブ上陸——『女・エロス』『あごら』誕生へ

そういうときに、六〇年代の終わるころ、アメリカからウーマンリブの動きがニュースとして伝わってまいりました。海外のウーマンリブが日本のリブを派生させたということに対して否定的な方多いらっしゃいますけども、私はひとつの起爆剤であつたと、いい意味でとらえております。そういう背景のもとで七二年二月に『あごら』が創刊されました。それに続いて、私も関わりました『女・エロス』が誕生、『わいふ』（六三年ミニコミとして創刊）も七六年、大阪から東京に拠点を移し、部数も大幅に伸びました。山川菊栄さんや田中寿美子さんたちの〈婦人問題懇話会〉は、六三年に生まれ、会報もしっかり出されていたと思いますし、〈国際婦人年をきつかけとして行動を起こす会〉が七五年に、加納実紀



代さんの〈女たちの現在を問う会〉も七六年に発足しております。

『あごろ』は230号まで続いてきたのですけれども、それはやはりかつての歴史を踏まえて不死鳥のように蘇ってきた女性の運動の成果だったと思います。ただ『女・エロス』は七三年の暮に出て八三年に終刊、残念ながら十七冊で廃刊になってしまいました。その理由は経済的な理由なんですね。赤字累積でやっていけなくなつてやめてしまったのですけど、『あごろ』がどんなに経済的な負担があつたにしろ、今もあると思うのですが、ずっと承らえていらつしやるということは、斎藤さんはじめ会員の皆様の非常な努力の結果だと敬服いたします。

## 『女・エロス』を生み出した思想

『女・エロス』についてはもう少し生の声でお話したいと思います。『あごろ』創刊の一年半前、一九七〇年に日本で初めてのウーマンリブ大会、解放のための討論会「性差別への告発」というのが千駄ヶ谷区民会館であったのですけれども、いらした方いらつしやいますでしょうか。



舟本恵美さん

私はちょうどそのころ、同棲していた男の人と別れたばかりでなんだかもやもやしてしまして、マスコミでアメリカのリブの運動を聞いたり、ベティ・フリーダンの『新しい女性の創造』を読んだりして、何かリブの集会に行けば目の前がひらかれるんじゃないかという期待感で行ったんですね。その集会に行くまではリブの方たちは全然存じあげなかったのですが、

まあ行ってみようやということで千駄ヶ谷にまいりました。

その会場でたまたま佐伯洋子さんという人に会ったのですが、そのときに女たちで本を出そうじゃないかという話が出てまいりまして、数人で『女 of 思想』という本を書きました。そのなかで私は——いま思うと非常に恥ずかしいのですけれども——なぜ男にふられて寂しいのかという話を綿々と書いていたような自分だったのです。でもその本を出すことをきっかけとして、自分の人生は自分でつくらなければいけないというふうに思い始めたのと、ウーマンリブの流れと、ちょうどピッタリ合って非常に幸せでした。

『女 of 思想』を書いた佐伯洋子さんと吉清一江さん、大阪の三木草子さんと私が『女・エロス』の創刊メンバーになりました。

『女・エロス』を一度でもご覧になった方いらっしゃいますでしょうか。(十数人が挙手) ありがとうございます。

最近、二十五年も経って、学生さんの卒論のときに必要で古本屋さんを回って探してくれたという人がいてちよつとびつくりしていますけれども、私も全部は持っていないのに、その彼女は古本屋さんで全部集めて下さったそうです。

その我々四人ともう一人入れて五人が創刊メンバーなんですけれども、五人とも性格が違いますし、感性も違う。よってきた歴史も違うわけです。子持ちもいたり、離婚した人もいたり、まだ独り者もいたりとか、いろんな人生を歩んでいたのですが、ただ何かやろう、リブ的に生きようというところで一致していたんですね。それで一年くらい準備期間があったと思いますけれども「性差別への告発」の集会から三年目、『あじら』から約一年半おくれまして一九七三年十一月に第一号を発行いたしました。こ

の年はケイト・ミレットの『性の政治学』の翻訳が出た年で、非常に西欧的なウーマンリブの思想が巷にあふれていた頃でございます。

## 創刊号に込められた「平等への熱望」

『女・エロス』創刊号は「婚姻制度を揺るがす」というテーマでした。吉清さんが創刊号の宣言を書いております。創刊号の宣言ですし、吉清さんが高群逸枝さんと森崎和江さんと河野信子さんを信奉していたものですから、非常に言葉は堅くて難しくて、聞いただけではわかりにくいと思いますが、ちよつと読ませてください。こういう一節がございます。

「わたしたちは、わたしたちが外ならぬ女であること、そのことによって、あらゆる社会的規定を受け、人間であることを否定されてきた歴史と訣別する。そしてわたしたちが、何ものにも規定されない女であると宣言していくとき、そこにはあらゆる人間を包含しようとする意志がある。社会的規定性の自縛から、自らを解き放とうとする女は、すべて無産である。自らの労働に依つて立たねばならない。(中略)わたしたちは、どれ程、お互い他人の生きざまにふれ合い、その生をいとしく感じあえる関係を持ちえているであろうか。そのような関係を日々に創りあおうとしているであろうか。(中略)わたしたち女が望むのは、あらゆる権力を排した社会である。真の意味での、どんな差別もない、自由で平等な社会である。女が女としてそのままに、男が男としてそのままに、また自然は自然としてそのままに生き



『女・エロス』創刊号

られる相互扶助の社会である。」

これが『女・エロス』のテーマになっておりました。彼女が労働とか、平等な社会と言っていますのは、ちょうど一九七〇年代、全国で大学の闘争があつたわけですね。そのときに男性の学生は前に行くけれども、女性の学生は後ろで銃後の守りみたいなかたちでしか役割を担っていなかった。そのところから男と女といっしょに運動しているのに、どうして女だけがおにぎりをつくったり、皿を洗わなければいけないのかという疑問から出てきているのも、リブのひとつの側面なんです。私の本音では、いい女・いい男と出会いたいなことでした。吉清さんの言葉は少し難しいのですが、それを私流に言うとなんかそういうことになるのではないかなと思います。それは単に一夫一婦制の中の女の一人、男の一人ということではなくて、活動の場でも、労働の場でも、政治の場でも、一人ひとりがいろんな人と平等に優しく出会いたいということでした。法律や家族や社会機構が権力構造ではなくて、個人にとって優しくあつてほしい。そのためには女たちの感性でこの社会を作り直していかなければ得られないのではないかな、というようなことだつたと思います。

私はそのときはもう三十二歳を過ぎていましたし、男との修羅場も経験していましたので、何も怖いものはないんですね。ここに労働の場におられる方もいらつしやと思うのですが、会社では女は三十歳になるともう差別されておまして、給料も違うし、面白い仕事はくれないし、私は『女・エロス』をやっていましたから仕事は干されるし。三十歳すぎなので、会社のほうも男たちも私にそう目くじらをたてて糾弾しなくなっていましたので、むしろ生き易くなっているわけですね。そんなときに『女・エロス』に出会っていますので、もうなんの憂いもなく飛び込んでいくことができました。

## リップに対するマスコミの敵しい目

ただマスコミはそうはいきませんで、七〇年代当初からリップに対して非常に揶揄の目をもつて対してきました。そのころリップの集会では男性の記者とかカメラマンは排除していたのですね。バリケードをつくりまして絶対に入らせないようにしていました。なぜかといいますと、その頃の新聞をご覧になるとわかるのですが、必ず「女たちの赤い気炎」とか「黄色い声」とか、いつも言い古された言葉でしか表現しないわけです。たまたま良く書く場合でも「リップの女性にしては」とか、「リップの闘士らしくない優しいふるまい」とかいうかたちで書いていました。せっかく私たちは排除していたのに、そのように書かれてしまう。それなら自分たちがミニコミよりも少しでも多く部数を出すマスコミのほうに行動を移していきたいということになりました。そういう意味で社会評論社というところから『女・エロス』を出版してもらえることになりました、全国の女たちに届けることができるようになったわけです。

ちよつと飛躍しますけれども、七〇年頃には男性のカメラマンとか記者を集会に入れなかったのですけど、三年前に『ルッキング・フォー・フミコ』という映画ができて、そのプレビューをやったときに、会場の一列目は全部女性の記者とカメラマンでした。マスコミの職場の中でもこんなに女性が増えたのかなと思いました。北京の女性会議のあと東京でも報告会が開かれたのですけども、そのとき壇上に上がったのは全部女性の記者たちで、私たちはこういうふう北京の女性会議を取材したのだというような話をして下さいまして、たった二十五年でこんなに歴史が変わるのかと思ったことがあります。

## 『女・エロス』が取り組んだ十七冊のテーマ

『女・エロス』は十七冊出まして、通算しますと十六人の編集人、書き手は六百人になったそうです。私たちは編集長も代表もおきませんで、グループで編集委員会として外側に対して対応いたしました。それは自分たちのなかに権力を作らないという小さな試みだったわけです。そして自分たちの手で思想の片鱗のようなものをつくっていきたいという意気込みがあつようにと思います。

『女・エロス』をご存じでない方のために、一号から十七号までのテーマを申し上げます。「婚姻制度をゆるがす」「反結婚を生きる」「エロス希求の労働」「職場へのリプの果たし状」「女の体は宇宙を育む」「主婦的状况をえぐる」「明日へ翔ぶ女たち」「つくられる女像」「売春考——はるかなるエロス」「幻想の政治をさぐる」「何からの解放か」「婚姻届の呪縛を解け」「家族解体にむけて」「家族考——自存のつながりへ」「仕事とくらし」「性を透視する」そして最後が「女の解放なくして反戦なし」ということでございしました。いま九七年の私たちが直面している民法改正における別姓問題とか、男女平等賃金とか、従軍慰安婦の問題、優生保護法の問題、政治参画、それとアンパイドワーク、そういうものがすべて入っていると思います。

私はこのなかで書いた原稿でいまだに覚えているのは「共同体幻想」でしたけれども、いま非常に話題になっていきますように、女同士どうやって老後を暮らすか、どうやって老後の生活を我々が作り上げるかということなどもその当時から私のテーマになっていました。そして政治参画については、七七年の参議院選挙のときの〈政治を変えたい女たちの会〉へとつながっていくわけです。そしてそのときの

政治の身に沁みた感覚というのは、いま私は千代田区でこの次の区議選にどうやって女性を出していくかという運動につながっています。

## 新女性誌の台頭の中で——『女・エロス』終焉の時

一九七〇年から八〇年頃は、みなさんご存じだと思いますが『MORE』とか『クロワッサン』とかマスコミ大手の女性雑誌がどんどん出てきたんですね。女性問題をやれば売れる、食える、という発想であったと思うのですけれども、そういう発想が女性問題を扱ったようにしながら、女性問題を希薄化してきて結婚幻想というのを撒き散らしてきたわけです。

一方女性たちのなかでは女性学会が着実に研究者を増やしていましたし、女性学という講座が大学に生まれてきました。日本初の女性専門書店の「ウイメンズブックストア」が大阪にオープンしたのもこの頃です。結婚願望と女性学という二極化の方向でありながら、女性のテーマは確実に広がっていったように思います。

私は残念なことに七号で『女・エロス』をリタイアしてしまったのですが、その理由は私が非常に飽きっぽい三日坊主ということに尽きると思うのです。みなさん覚えていらつしやると思いますが、そのころ小林則子さんという方がヨットで太平洋を横断なさいまして、そのヨットが「リブ号」だったんです。そういうふうに、もう「リブ」という言葉が七七年頃には存在権を得てきて、それほど異端児ではなくなってきたと思うんですね。七五年はメキシコで国際女性年世界女性会議が開かれた年でもありました。斎藤さんも参加なさいましたよね。日本も世界の潮流におくれないうにということ、婦

人間題企画推進本部などをつくったりして、国のほうから女性をテーマに擦り寄ってくるという気がしました。それは私の肌に合わないですね。「官」という組織はあまり好きではないものですから、なんとなく違和感をもっていた。そして七七年には『フェミニスト』という雑誌も創刊されました。

つまりリブから女性学、そしてフェミニストというふうに移ってきました。ちょっとシヤレてきてしまったんですね。リブが粗野な感じでなくフェミニストというふうなイメージというか、高尚なイメージをもってきたものですから、その場で私は『女・エロス』をやめようかな、と思ったんです。私は反逆者のままでいたいし、あまり認められた存在でいたくなかったので、潔くやめてしまいました。ただ『女・エロス』は唯一のリブ雑誌として信頼していましたので、ずっと続いてほしいと願っていました。

願ってはいたのですが、結局さきほど申しましたように赤字で……。創刊号は二万部くらい出たんですが、だんだん少なくなったというのは、大手のマスコミがいかにリブらしい『クロワッサン』とか『MORE』とか、いいイメージの女性像を作り上げてしまったものですから、そちらのほうに吸収されたからのような気がいたしました。

最後になりますけれども『女・エロス』の終刊号に吉清さんのいい文章がありますのでご紹介させていただきます。彼女はこういうふうに言っています。

「人間的に、個的な感覚を深い所で交流させ、根源的な生命力（エロス）を充電させる力となる性の解放の第一歩を、手さぐり、足さぐりしながら踏みだしました。この命題は、女たちが現実的に（日常的に）生きていくことのなかでしかみだせない、終刊に至る現在も確信しています。『女・エロス』の主張は、このことに集約されます。そして誌面は、被害者意識で自己肯定しない、自己変革の真摯で



大胆な表現の場として解放され、またそれが読む人の心のひだに、女という層の持つ闘いの経験・蓄積として入りこみ、女たちがより生きやすいように手をさしのべることのできる、さまざまな実践を模索する誌面であれと望んできました。」

まさに創刊号にかかげましたような生きざまとか他人とのふれ合いというものを、ずっと十年間堅持してきたと思います。私は途中でやめましたけれど、『女・エロス』のメンバーというのは一字たりとも変節しなかったのではないのでしょうか。逆に十年間ちつとも変わってなくて進歩がなかったとも言えるのですけれども、『あごら』もそうでしょうけど、売れるためというかたちで自分の心を変節しなかったという意味で『女・エロス』のメンバーの人にも私は敬服したいと思っています。

『あごら』と『女・エロス』が両方とも歴史の差はあれ真面目に生き続けてきたということに対して感謝し、終わりの挨拶にかえたいと思います。どうもありがとうございました。

## 2 『あごら』二十五年の歩みと私——斎藤千代

舟本さんのお話、すばらしかったですね。リップ誌発足のいきさつ、その後の経過が、見事に客観的に語られて、史料としても得がたいお話です。ほんとうにありがとうございます。お話の中身も知らず、「やや主観的に」などと申し上げたことを、深くお詫びします。

舟本さんから『女・エロス』のお話を伺って、私も久しぶりにあの時代のことを思い出しました。いろいろな集会で『あごら』を売る時には、必ず『女・エロス』『女の叛逆』『婦人間題懇話会会報』『わい

ふ』なども一緒に持ち歩いて売ったこと、「あごら読書室」に女の雑誌をミニコミを含めて全部揃えていたのですが、何と言つても『女・エロス』が飛び抜けて人気があったことなど、なつかしい思い出です。一つ大きな誤解に気がついたのですが、私は今まで『女・エロス』は、『あごら』にご不満な方々が、その穴を埋めるものとしておつくりになったと誤解していました。そういうご不満があつても当然、という気持ちもあつたからです——。また、発行する前から、皆さんが、「絶対に商業誌にするのだ」と力説なさっているのぢよつと驚いた記憶があるのですが、「マスメディアにしなければ意味がない」と思つていらした理由も、きよう初めてわかりました。「資料、資料」といつも言い続けている私が、こんな大切な取材をしていなかったなんて、ほんとに恥ずかしいことですが、いい勉強になりました。

それにしても、みんなそれぞれに一心不乱でしたね。今よりはずつと女が生きにくかつた四半世紀前。『あごら』は二十五年間、一度も変節してないし、代表も編集長も置かない姿勢は、『女・エロス』と同じです。これからも変節しないでしょうけれど、創刊号の、ピンと張りつめた想いが今も持続しているでしょうか。それを忘れてはならないと思います。

ところで、舟本さんが『あごら』が今日あるのは『青鞥』以来の女の系譜とおっしゃつたのは、まさにそのとおりなのですけれど、女の系譜は『青鞥』だけだろうか。必ずしも納得できない面があります。『女・エロス』は疑いもなく『青鞥』の流れに立つものだと思うのですが、『青鞥』とか『女人芸術』とか『あごら』はちよつと違う面もあるのではないかと思うのです。

実は『あごら』が生まれたとき、男性からでもですけど、女性からでもずいぶん叩かれたんです。そのことが私はかなりしんどかつたし、辛かつたし、難しいなと思つたんです。なぜ彼女たちが叩いたのかというと、いまのお話を伺つているととてもよくわかるんですが『あごら』というのはあまりリブ的では

なかったんですね。どういえるのでしょうか、思想としての自分の解放、自己解体も含めた非常に鋭い追求をしていたのが「ヘリブセンター」とか『女・エロス』であつたとすれば、『あごら』はもう少し違う。普通の人間として生きがたい最底辺の人間が、じゃどうしたら生きやすくなるかというあたりのほうに視点があつたような気がいたします。

では、舟本さんが客観的状况をきちんと話してくださつたので、私は、『あごら』の呼びかけ人としての私的な話することになります。

## 「戦争」がきっかけで女の問題を考えるように

私が女の問題に気がついたのは年代的には古くて、一九四五、六年。リブが生まれるずっと前です。

戦後の焼け跡に突如現れたパンパンと呼ばれていた人たちを初めて見た衝撃。その人たちが何をするのか、全くわからなかったのですが、何とも言えず悲しかった。その一方で、生活のためにミシンを踏んで足が丸太のようにふくれあがつた主婦たち。戦争中、「産業戦士」の名で、あらゆる重労働を引受けていた女たちは、復員兵が戻つたとたん、生計の道を絶たれた。その現実には、何一つ力を貸せない無力な自分。悲しみと憤りで胸がはり裂けそう——。「女と戦争」が、私の生涯のテーマになりました。

戦争が終わったとき、私はハイティーンで、工場労働者でした。戦争が激しくなつてから学校は全部閉鎖されて、みんな工場で働かされていたわ



斎藤千代さん

けです。私は希望をもって入った学校にすぐ失望していたものですから、学校が閉鎖になって工場で働くということはむしろおもしろかった。勉強しないでいいし余計なことを考えなくていいというのは気楽なことです。その日その日のことを言われたとおりにやって、体が擦り減るほどクタクタになりますから、あとは何も考えない。いずれ死ぬ。その時はその時……。

でも戦争を肯定していたわけではありません。と申しますのは私の両親がたいそう戦争嫌いで、特に「軍閥」が嫌いだったんですね。個々の軍人が嫌いというのでなくて軍閥が嫌い。嫌いというか、日本を破滅させる根元と考えていました。

軍閥のことは、日本史の中でいまだにきちんと総括もされていなし叙述もされていないのが残念ですけれど、それはすさまじいものでした。簡単な言い方をすると、今のミャンマーみたいな状態に日本がなっていたのだと思います。ミャンマーはわずか五十万人の軍人が支配して、そのためにアウンサン・スー・チーさんみたいな方もいまだに苦しんでおられる。いかに民主的な選挙をしても、当選者が実際の実権をもちえない国です。非常に優しい仏教国で、武力をもつという概念のなかった国を武力をもった五十万人の軍人が支配して、いまだにそれを覆せないでいる。それと似ていると言うと、当然異論も出ると思いますが、五・一五、二・二六と、軍に逆らうものは殺すということが平気で行われるようになってからの重苦しい空気は、子ども心にもひしひしと感じられ、今でも忘れることはできません。二・二六で朝日新聞社が襲撃されたとき、両親が「朝日が襲われた」と、反軍閥の重臣たちの死を悲しんだのと同じくらい顔青ざめていたことを、なぜかはつきり覚えていますが、ちょうど朝日の神戸支局が襲われてから『朝日』の論調がにわかに鋭くなかったのと同じように、マスメディアも戦わなくなつた。両親は多分そのことを予見して青ざめたのだらうと、今頃になって思います。

## 軍靴の下、抵抗する両親から学ぶ

私が物心ついたときには、すでに中国への侵略が満州事変という名で始まっていたわけですが、上海事変という「事変」が起きたとき、両親が激しい拒否反応を示していたという記憶はしっかりあります。軍事力が日本の中樞になったときに日本は滅びるだろう、ということ是非常に心配していました、毎晩父親と母親の会話は「こういうふうには軍人が跋扈するような世の中になったらいずれ日本は滅びるだろう」と。それは子どもが寝静まってから言うんですけど、寝室まで話は聞こえてくる。子ども心に恐怖感をもちながら、親たちが必死に抵抗する姿というのを見て育ちました。

前にもちよつと話したことがあります、慰問袋というのを持つてくるように学校から指令が出たことがあります。私はお金もないし物も持っていないので、「手ぬぐいを二つ折りにした袋に石鹼とかお菓子和入れて持つてくるように言われた」と話をしましたら、日頃温厚な父が顔色を変えました。「学校が先頭に立つて戦争を推進するとはもつてのほかだ」と。

持つていかなかったのはクラスで私一人だったと思います。そういうことをやるのはかなり勇気がいったという記憶はありますが、父母がどんなに戦争を嫌っているか、子ども心にも十分わかっていたのです。父は判事でしたが、「司法は人権のとりで」という考えでした。人民のほうから自粛するのは良くない、言うべきことを言っていかなないとどんどん右傾化すると、美濃部達吉さんが例の「天皇機関説」を唱えたときなどは美濃部支持を堂々と公言していたそうです。私を支えているのは、簡単にいうと私の中の正義感、そして反権力思想だと思うのですが、そういうものは子どもの頃に育まれたのでは、と感じて

います。

## 女権論者の母から受け継いだもの

一方、私が『あごら』を出したときにたくさんの人から「やっぱりお母様の子ね」と言われて驚いたのですが、私の母は熱烈な女権論者でした。女の人が男の人と同じ権利を持たなければいけないという強い主張を持っていました。ただし、フェミニストではありません。母は男女同権というところでは強い意識をもっていましたし、弱い人に対する気持ちもありましたけれど、じゃ女がおとしめられてはいけないのと同じように、すべての人がおとしめられてはいけないという人権意識があったかというところまではなかったですね。私が母に一〇〇パーセントの愛情をもてなかったのは、フェミニストではなかったというのですが、一八八四(明治十七)年生まれ之母にそういう意識がなかったからといって母を責めてはかわいそうと、このごろは思うようになりました。

母は山川菊栄さんより少し年上、野上弥生子さんや平塚らいてうさんとは一年か二年ちがうだけで、もちろん『青鞥』のことも知っているはずですけど『青鞥』のことは一言も話さなかった。山川さんも『青鞥』のことはむしろ無視するという態度で、あれはブルジョア女性雑誌とお考えのようでした。野上さんも、軽井沢にお訪ねして、本当に短い時間でしたけれどお目にかかって、こういう雑誌をつくっていますと、『あごら』の話をしましたら「らいてうのところに今は若い女がずいぶん擦り寄っているそうだけど」とおっしゃった。『青鞥』創刊当時のメンバーなのに、らいてうさんに対して好感をもっていない感じがまざまざと感じられて驚きました。らいてうさんと、山川菊栄さんとか私の母とかの一

派は、(リブセンター)とか『女・エロス』に集まった人と『あごら』に集まった人の差、変な言い方ですが案外似ていたところがあるような気がします……(笑)。

## 母の愛読誌『婦女新聞』に親しんで

母が愛読していたのは『青鞥』とか『女人芸術』ではなく、『婦女新聞』という週刊誌でした。これはいま読んでも立派なものです。一九〇〇年に創刊された女性向けの雑誌ですが、創刊者は男性で、非常に敬虔なキリスト教徒です。福島四郎さんとおっしゃるのですが、その方のお姉様が、結婚なさって間もなく病気になった。病気というのが性病だったんです。そのころはよくある話でした。息子が遊び歩いてしょうがないからどこかいいところのお嬢さんをもらって落ち着かそうとしたけれど、おさまらないで、奥さんにその病気が移された。男の人の性病というのは構造的にもそんなにひどい結果にならないらしいのですが、女の人の場合、体の中に性器がありますから、性病は全身病になって非常に悲惨な死に方をするわけですね。

彼はそういうことを許す男社会を許せなくて『婦女新聞』を創刊したんです。ですから、誌面には正義感、人権意識があふれていました。しかし残念なことに、『青鞥』のことは日本女性史のなかにいつも麗々しく書かれているんですが『婦女新聞』はほとんど書かれていません。『あごら』24号『女と戦争』に、『週刊婦女新聞』にみる一九三〇年代婦人雑誌の抵抗」という題で福島美代子さんに書いて頂いたことがありますけれど、週刊誌と



いっても菊判二十ページの薄いものですが、非常に濃い内容でした。七千部売っていた時もあつたようで、あらゆる女性差別を明治三十年代から告発、どういう状況になつていくかということが、時々刻々出ています。らいてうの「元始女性は太陽であつた」の全文も、私は婦女新聞で読み、からだが震えるほど感動したことを今も覚えています。また「障害」者や、朝鮮、台湾のことなどにも触れています。母が学生のときから愛読していたことは、後に四郎さんのご三男から教えて頂いて、母の没後に初めて知りましたが、母がそれを広めることを何よりの喜びとしていたことには、小学校四年頃から気がつきました。「主婦の友」とか「婦人倶楽部」とかは一切とらないで、母がとっていた婦人雑誌はそれだけでした。私が九歳のときに父母が小さな山荘を建てたので、毎週末に行っていたのですが、そこに置いてある書物は母の本では『婦女新聞』だけなんです。あと父の本は難しい本ばかりで、山荘に行くとき読む本がない。私は毎週『婦女新聞』を繰り返し読みました。いま大人が読んでもけっこう難しい雑誌なんですけど昔はルビがふつてあつたからでしょうか、それを読んで、高群逸枝、長谷川時雨、久布白落実、市川房枝、神近市子、吉岡弥生、奥むめを、高良とみといった名前を覚え、女の人がいるいろいろな面で活躍しているんだなと感心していました。

母は初めて女性の理学博士が出たとか、そういう記事が出るたびに欣喜雀躍、みんなに大盤振る舞いしそうなほど喜んでいたことをよく覚えています。

婦女新聞の第一号に示されている「婦女新聞の目的」の中に、「女子の善行はなるべく多く集めんとす」「全国の各婦人会または各慈善団体をして互に気脈を通ぜしめんとす」「女学校および慈善的の学校団体等の消息は、なるべく詳（つまびらか）に伝へんとす」と書かれていたのを知ったのはごく最近のことですが、そういう女性情報を集めて紹介し、女性差別を解消しようとした雑誌でした。



## 「反戦平和」を貫いてつぶされた『婦女新聞』

『婦女新聞』は反戦平和ということにも徹していました。『あごら』24号「女と戦争」の記事を、ぜひ読んでいただきたいと思いますが、日本で上海事変といわれていた日中戦争が始まったとき、そこに軍人の慰安所ができたということも、いち早く書いてあります。軍が国防婦人会をつくった時には、婦人団体への軍の介入を厳しく糾弾しました。そういう記事もありましたので、たいへん弾圧を受けました。一九四二年に紙の配給を押さえられ、ついに廃刊せざるをえなくなつたんです。「鳥のまさに死なんとするやその声よし」と、廃刊を予告する言葉を読んで、母が号泣していたのを、まさまじと覚えています。

その『婦女新聞』をつくっていた福島さんを、母は父親のように慕って文通していました。戦争をはさんで連絡がつかなくなりました。ところが、私がたまたま『あごら』20号に母が『婦女新聞』を愛読していたということを書きましたら、山川菊栄さんが隅から隅まで『あごら』を読んでいらしたらしく、福島四郎さんは亡くなっていたのですが、ご子息のところに連絡下さった。ご三男から「あなたのお母さんはこういうお便りを出してくださっている」と、母が学生のとときに、「なぜ女は校長とか教頭になれないんでしょうか」と投稿したコピーをはじめ、母の投稿を送ってくださいました。廃刊の知らせに号泣した母が〈父母危篤の知らせを聞く思い〉と電報を打ったことも、その時初めて知りました。どれだけ切々たる希望を託していたか。『青藍』が廃刊になるときそういう電報を打った人がいるでしょう。あるいは『あごら』が廃刊するとき、そんな電報が来ることがあるでしょうか。もつとも継続した長さも圧倒的に違うわけで、『婦女新聞』は一九〇〇年から四十三年も続いていたのです。

## 『婦女新聞』の系譜と『あいつ』

このあいだ亡くなられた奥むめをさんなどは「愛国婦人会をつくって軍に貢献した」と、戦後糾弾されていますね。愛国婦人会と国防婦人会の対立、そして大日本婦人会に統合されるあたりのことを、『婦女新聞』は軍の介入として糾弾する一方、参政権運動が愛国運動に歪められていくことに、愛情をこめて警告を発しています。負の歴史の影響か、四八年の〈主婦連〉の「おしゃもじ運動」を女の運動に加えるべきかどうかは女性史研究の争点の一つですが、女が生活に密着して自ら声をあげて、おしゃもじというブラカードを掲げたということは、歴史的なことから、私は思います。奥むめをさんの背中に結わえられて育った中村紀伊さんは、「勇気をふるって異議申し立て」という母親の姿勢を知らず知らず受け継いでおられたのではないかと思うのは、どこかに『婦女新聞』の記憶があるのかと思います。

ただ私は、母にかなり反発して大きくなりました。当時は異端だった女権論を母が唱えるものですから、母は女の人でなかで非常に評判が悪いわけです。母には面と向かって言えないものですから、娘の私にいろいろ言われる。それはつらいことでした。ああいう女の人には絶対になるまいと固く決心して（笑）大きくなつたくらいです。

私がリブの運動にのめりこまなかったのは、それが母の方法論にあまりにもよく似ていたからです。こういう言い方をすると申しわけないのですが、あの運動論は、私には「古い」と感じられた。母が目ざましい成果を得られなかったのと同じように、ああいう方法では、世の中の根深い女性差別は解消できないのでは、という気がしたのですね。

どこの国でも女性解放運動の初期は、非常に過激です。私も、過激という要素も必要だとは思っていましたが、ラジカルというのは、本来、「根元的」という意味だと考えていました。男を排除するよりは、男を巻き込まなくては、とも思いましたし、集会とかデモというのも、その当時の私の性格にはなじまなかった。それよりも、「情報」。その収集と伝達が、基礎的な女性運動の一つとして必要ではないかという思いが強くなりました。戦前、戦中の徹底的な情報封鎖と情報操作が、日本をあの非常識な戦争に導き破滅させたという強い憤りが根底にあつたからではないかと思っています。

ひとつには、女性を差別しない父親を見て育つたためかもしれません。私には、男に対する憎しみではなく、女性を差別する社会の構造を何とかしなければ、という思いが胸にたぎっていました。

考えてみると、私のクラスメートは、意外と女性運動に理解がないんです。私は戦後の女性の情況に深く深く傷ついてしまったわけですけども、それは九歳の時から読んでいた『婦女新聞』や、父母の反戦思想と女性への思いが潜在意識として影響していたのかなという気がします。

## 焼けただれた死体——その焼け跡の女たち

戦争と女の問題がなぜ結びついたのか。今も消えない心象をお話してもよろしいでしょうか。

一九四五年三月の東京大空襲。東京の下町地区の周り、今夜はここを爆撃するという周りにまず落とされたのが焼夷弾、ナパーム弾でした。その内側の人びとは周囲を全部囲まれて、逃げるに逃げられない。そこを目がけて端からじゅうたん爆撃です。一晩に十万人もの人が生きながら焼き殺された。生きながら火あぶりにされたのです。その臭いものすごさ。十万人の燃える臭いというのは……。私は、それ

から十五年間、焼き魚が食べられませんでした。私にとって「戦争」は一生消すことのできない原体験になりました。

しかもその真つ黒な焼け跡に、突如としてあふれ出た原色の女たち。そのすべての女の傍らには、必ず占領軍の軍人がいる。白人の将校は、若く美しい日本女性を。肌の黒さが濃い人ほど老いた女性を。軍人の地位と女の年齢が見事に反比例していたそれは、「差別」を痛切に認識した始まりでした。

両親があれば反対していた戦争、それがなぜ……。日本人も決して喜んで戦争したわけではない。男にとつては自分自身が死ぬこと。女にとつては働き盛りの夫、丹精こめて育てた子どもが死ぬこと。こんなつらいことはないわけです。誰も喜ばない戦争があそこまで遂行されてとめどなくなつた。敵味方二千万人も人命が失われたということは、私たちが味わつたあの苦しみをアジアの人びとも味わつたということですね。そして、決して加害者にはなりたくなかつた日本人のすべてが加害者になつた。体が震えるくらい申しわけない。悲しい。無念。それが原点になりました。

## 権力の情報操作に対抗する一筋の糸として

そういう戦争の原因のなかに女性差別があつたことを論理として認識したのは、三十年もたった一九七五年になつてからですが、論理以上に厳しい「女」と「戦争」の現実が、心に焼きついてしまった重さ。お金もないなかでなぜ私が『あごろ』を捨てないかという、差別の行き着く先の戦争を本当に阻止したい。そうしないかぎり女も救われぬ。それにはやっぱり体を張つてたたかうしかないという一念です。そこが『青鞥』と『あごろ』の一番の違いではないかと思ひます。

ただ最初に『あごら』をつくったとき、それほど鮮烈な不戦のメッセージを出したわけではないのです。この『あごら』のもとになった〈BOC〉、バンク・オブ・クリエティビティという名前の女の作業場を呼びかけたのは一九六〇年です。一九六〇年は日米安保の再確定ですね。日米安保をさらに強化したかたちで確定することに、激しい大反対運動が起きた。数十万人がデモに繰り出し、みんなが煮えたぎった。私はちようどそのころ生後四か月の子どもがいましたが、明日はもう決まるという日、どうしても行かすにはいられなくて、夫とふたりで国会議事堂に行きました。空が燃えるように赤く見えたくらい乱立していた赤旗。十重二十重に議事堂を囲んで、ありとあらゆる層の人が集まった光景は、その場にいなかった人には想像がつかないと思います。

しかし山は動かなかった。翌日、国会に警官を導入して強行採決が行われ、日本はあくなき右旋回を始めました。

『あごら』を出すことはお金の面でどうにもならないくらい苦しいことで、何度やめようと思ったかしれません。非難・中傷も山ほど。やめよう、やめよう、と思いつながらやめなかったのは、いまの日本のメディアに対抗する一筋の糸は絶対切つてはいけないう。小さいものでもこれが残ればそこからまたいつか細胞は増殖するだろうと。最後の細胞を殺しちゃいけないという気持ちだったと思います。

## 〈安保〉の反省から生まれた〈BOC〉

議事堂を、立錫の余地もないほど十重二十重に人びとが囲んで抗議しても、その翌日には日米安保が確定してしまったとき、私は、バツと「これが戦争への構造だったのだ」と気がきました。それまで、

私はノンポリで、《運動》とか《政党》が大きらいだったのですが、そう言って、ただの傍観者でいたことが事態を悪くしたのだ。傍観者は加担者なのだと、《反安保》という《運動》に初めてかわって、気がついたのです。では、私に何ができるだろう。

その時、私の住んでいた団地で殺人事件が起きました。団地の働くお母さんを手伝っていた子守りさんの一人が、赤ちゃんをベランダのコンクリートに投げつけてしまったのです。知人もいない東京で、少女は終日赤ちゃんとつきあってノイローゼになったのでしょう。この事件が伝えられて、団地にいた子守りさんたちが、みんな親もとに呼び戻されました。「娘が殺人者になったのでは大変！」という親御さんの気持ちはよくわかりますが、困ったのは、子どもを預けて働いていたお母さんたちです。

まだ保育園がほとんどない時代でした。「保育所づくりならできるかもしれない」——思い立って、団地のあちこちに呼びかけの紙を貼りました。思いがけず人が集まり、私の生まれて初めての「運動」が始まりました。

団地内の敷地に保育所をつくろうと、五百七十世帯を一軒一軒回って意見を聞き、「子どもができたので仕事をやめなければならなかった」という有能なお母さんが多いのに驚きました。そこで、保育所づくりをすすめながら、「女性の力を預託して社会の需要と結ぶ銀行」を呼びかけました。《創造力の銀行BOC（バンク・オブ・クリエイティビティ）の始まりでした。

## 《BOC》の反省から生まれた『あじろ』

そのころ女の人は、子どもを産んだらもう仕事ができないという状況でした。そんななかで女の人の



力と社会を結びつける役割になりたいと〈BOC〉を始めたのですが、実際に仕事を始めてみて、女性の側にもずいぶん問題があるということを感じました。「経済的自立」に重点が置かれ、所得がふえろと、さらに高所得が追求されていく。それは最初の志とは違うものでした。それで〈BOC〉をいったん解体してでも、新しい呼びかけをして再出発をしなければいけないと、六〇年代の終わりのころから考えはじめました。そして、やっと形になったのが七二年の二月に産まれた『あいら』なのです。

これが創刊号です。〈BOC〉の目的は女が働くことでしたから、この創刊号のテーマもまさに「女が働くこと」でした。このなかにはかなりたくさんさんの調査のデータがありますが、私自身がともととブランナーで、いろんなことを調査しながら仕事をしていましたので、まず実態を調査しなければ、想念だけでは世の中を動かせないだろうという気持ちがあったことを思い出します。

さつき舟本さんが『女・エロス』の創刊のときの言葉をお読みになったので、『あいら』の創刊の言葉も読ませていただきます。

「小さなあいらが生まれました／あいらはあなたを待っています／AGORAは、ぎりしあのひろば／ぎろん・ざわめき・かいもの・ゆうべん／そこからぼりすのぼりしーが生まれました／この小さなあいらには／学者もなく、市場もなく／ただ、あなたを待つ心だけがあります／全国ちりぢりにはたらき／全国ちりぢりに考えている皆さん／あいらに声をお寄せください／小さな点が線となり面となって／働く女性のしあわせにひびいてくる日まで／あいらはあなたを待ちつづけます」

その下に解説めいたものも書いています。

「婦人解放の声を聞いて久しく、なおりブの動きが絶えないのはなぜでしょうか。女性上位という表現の中に、上位ではないアイロニーがこめられていることを、働く女性 は現実の問題として肌に刺す思いで知っています。怨念ということばを好まない人も、ひとりひとり心の底のかなしみから目をそらさなければいけないのではないかと思います。」

子を生み育てる母性に徹したいと思っても職業の第一線に立つためには、切り捨てなければならない部分が多いのが現実です。

働く女性は多くの荷を負い、その荷の重みのためにおのずと走り、走ることによって、自分の最も愛する周辺の者まで走らせ続けます。

走る力は、本来は前進の巨大なエネルギーでなければなりません。それぞれに力走する個人が連帯を持つときエネルギーは幾何級数的な力となつて新しい社会を可能にするでしょう。

多発する草の根の運動が自然消滅に終わらず、より強く広い根を張る力となるように、この誌上で、できるだけ多くの運動、できるだけは広い考え方を紹介し、多様な現実をみつめることの中から前進をはかりたいと思います。

あごらはBOCという小さな婦人の組織から出発しましたが、私ども自身の垣をここに取りはらい、より広い友を迎えて新しい勇氣を得たいと思います。一九七二年一月。

## 地方からの発信、双方向の発信を大切に

創刊の準備は六〇年代の終わりがころから始めていたのですが、私自身がなかなか発行に踏み切れない



かったのは、一つには私はそれまでいろんな編集のお手伝いをしていましたけれど、自分が発行の主体になることはなかったからです。そのときに一番考えたのは、かたよりのない本当に良質の情報を発信できるだろうか、という情報発信の怖さです。その後二十五年間『あごろ』を発行しながら、いろんなことがあるたびにいつも私はこの原点を思い出すのですが、その怖さを忘れたらもうジャーナリストではないだろうと思うんです。ジャーナリストとしてこの怖さだけは生涯持ち続けたいと思っています。そのころたくさんのミニコミがありまして、私どもにも次々に届けられていました。しかしその多くは、心の中のヘドを吐き出してそれを読んでもらいたいというものでした。こういう心のヘドを人前にさらすことが解放なんだろうか、と疑問が深まりました。では、どういう情報を出せばいいか。

自分がジャーナリズムに関わりながらかねて思っていたのは、情報が川の流れのように上から下に流れるということ自体に問題があるのではないだろうか、ということでした。横から横に双方向的に、いまでいえばインタラクティブな情報もほしい。南北に三千キロにも及ぶ長い日本のあらゆる地点から、あらゆる発想・情報が届き、そして女の人が情報の受信者だけでなく発信者になることも重要なことではないか、という強い思いがありました。そして、この「東京の発想が中心になつてはいけない」という信念は、後に地方拠点の持ち回り発信というかたちで、比較的早くから実現することになりました。

## 松谷みよ子さんの「走る」が背中を押した

しかし、自分がつくる雑誌に、値段をつけて売ることとは僭越ではないかという思いも強く、行きつ戻りつしていました。創刊号の原稿には、一九六九年の原稿も入っています。それをふっ切らせたのが、

最後にいただいた原稿、創刊号の巻頭にあります松谷みよ子さんの「走る」だったのです。それをいただいたとき、私は思わず原稿用紙の文字が濡れて溶けるくらい泣いてしまいました。お読みになった方も多いと思いますが、『あごろ』発行に踏みきるきっかけになった松谷さんの「走る」を、いま読ませていただきます。

## 「走る」

松谷みよ子

デンマークの古城をみての帰途、汽車の時間に間に合いそうもないというので走り出したら、案内してくれた学生に叱られた。

「走ってはいけません。デンマークで走るのは事件があつたときだけです」

では事件とはと聞くと、火事なぞは大事件の部類に入り、ドロボウだの人殺しだのはめつたにないという。なるほど、そういうお国がなら一生のうち、走ることはめつたにあるまい……。

このちいさな出来事が私の脳裏にやきついていくというの、その頃……もうかれこれ十年前のことになるけれども、私は走りに走りつづけていたからである。時間が惜しくて、買物も走ってした。だから子供をみごもつたとき、走れない事にいらいらした。それでも強引に走って道端の泥の山にころげこんだことがある。赤ん坊が生まれてまた走れるようになったときは、神へ感謝した。こんなふうだから赤ん坊ごと走るのは毎日のことだった。

当時、私は主婦であり母であり、夫とともに人形劇団を創立して三年目だった。会計もやり、仕込みもやり、人形も縫い、台本も書き、地方へ民話の採集にでかけ、童話も書いた。その頃テレビの仕事も多く、劇団は徹夜に徹夜を重ねた。稽古場もなく自宅が製作場でもあり、泊り込みの場でもあり、一

回に十人分の飯炊きはしょっちゅうだった。

ある朝の事だった。徹夜の朝みんなは放送局へとんで行き、私は乳母車に赤ん坊をのせて保育園の赤ちゃん部屋へ走った。すると何としたことか、乳母車はあつというまにはずれて赤ん坊はころげおちた。今まで起こった事もない出来事に啞然としたが、立ち止まっている間はない。赤ん坊を放り込んでまた走った。またもや乳母車ははずれて赤ん坊はころげおち、私はつまみあげると保育園にかけこんだ。「お願いしまーす」朝のお弁当と泥んこの赤ん坊を渡された園長先生がどんな顔をされたか……振りむきもせず私は駅に向かって走り、階段をかけあがり、息を切らせて放送局へかけこむ、入る。部署につく、もうカメラハダ、ハイ本番、三十秒まーえ、十五秒まーえ、今まで騒然としていたスタジオは一瞬凍ったようにすべての動きをとめる……。あとで調べたら乳母車は前の日引越しに貸したとき、重たい本をやたらと積んで運んだため、金具が開いて甘くなっていたのだった。かなり大きかったとはいえ乳母車を引越しにつかうほど私たちの周囲は貧しく、かつ、のどかであった。

走る。走る。走る。家の中でも私は走った。そうしなくては時間が生み出せなかった。そんな私にデシマークの土を踏んだとたん、一切走るなどいっても、それは無理というものである。なにかというところ駆け出しそうになる私に、彼氏は呆れはてた。

女が仕事を持って生きる。いや仕事だけでなく子供を育てながらどう生きたかと問われるとき、私はひたすら走っている自分が浮かび、そしてまたコンクリートの壁につめをたて、ひっかきとるように自分の時間をむしりとりとうとした姿が浮かぶ。おそらくこれが日本の働く母親の大部分の姿なのではあるまいか。

むかし、信州上田に、愛する若者の許へ毎夜、山を越え山を越えて走る娘がいた。その娘は若者の許

につくと、しつかり握りしめていた両手を前にさしだして、ぱっと開いた。そこにはつきたての餅があったという。それが毎夜続いたから若者が不審に思つてきくと、私は毎夜ひと握りずつ米を握りしめて家を出る。そしてお前に逢いたい一心で、山を越え山を越え走りつづけ、着いたときぼつと掌を開くと、そこに餅がある。そういつたという。

この話を丸木俊さんにしたところ、心に残られたのか「私の交友録」という所に「松谷さんも私も掌に餅を握りしめて走る女である」と書かれ、拝見して恐縮した。しかし、そういわれて考えてみると、とにかく走らねばいらなかった自分が、ふと気がついて掌を開いたとき、そこには作品が生まれていたように思う。いつたい、何故走りつづけたのだろう。それはやっぱり何かをなさなくてはいきれないという人間の業のようなもので、だからつづいたように思う。

今、私はあんまり駈け出さなくなった。それはよいことだろうか。わるいことだろうか。

\*

『あぐら』がどうして続いてきたのだろうと言われますが、何か私も走らずにいらなくて、掌のなかに餅は生まれなかったかもしれないけど習性になったのか、それともいまだに餅が生まれなから走っているのかなと、そんな気がいたします。私の話を終わります。

### 3 戦後女性史からみる『あぐら』と『女・エロス』 福田光子

『あぐら』創刊の一九七二年、その年にはどんなことが起こったのかということを、ちよつと調べて

まいりました。最近、あるところから頼まれて現代女性史の年表を作っておりまして、その関係でこれを調べてみますと非常におもしろい。何か錯覚のような感じがいたしますが、この年に浅間山荘事件が起こっているんですね。アポロの飛行士が月面活動をしたのもこの年です。沖縄の施政返還、それから列島改造論がこの年にできています。それがすべて同じ年であるというふうな感じがしません。

そういうことを考えますと、さきほど斎藤さんのお話にありました一九六〇年安保のあの凄まじい全国民の大きなエネルギーというものが爆発的に起こりましたときに、それを押さえるために所得倍増論ができています。七〇年安保の翌々年くらいに、列島改造論というのがそれを静めるために起こってきたというのは、やっぱり大きな権力のせめぎ合いというものがここにみられるような感じがいたします。

女性関連で申しますと、この年に市川房枝さんが〈沖縄の売春問題に取り組む会〉を結成しています。第三次主婦論争もこの年に起こっています。武田京子さんですね。第三次主婦論争というのはその前の第一次・第二次とは異なる論争が行われているわけです。そして、東京における第一回のウーマンリブ大会の開催、リブグループのデモがあったり、中ピ連が結成されたり。優生保護法の改正案も国会に提出されました。またこの年に勤労婦人福祉法、いわゆる均等法の土台になったものですが、そういうものが成立しています。こういう状況が生まれようとした年の初めに『あぐら』が創刊されたわけです。

## 七〇年代という時代が生んだ『あぐら』

七〇年という年に戦後の四半世紀が終わって、七二年。その当時七〇年安保の挫折感は大きかったと思います。

もうひとつ大きなことがらとしては、経済成長というものが始まりまして、日本の産業構造が大きく変化した年だと思えます。これを契機に日本は消費社会に大きく変わっていく時代なんですね。同時に就労女性が非常に増加したということもありますが、一方で主婦論争が行われ、母親運動が盛り上がりつつあります。それからもうひとつ、いまの私どもの生活の変化の節目になるようなことがらがこのころに起こっています。というのは女性の寿命が伸びたということなんです。そのとき日本の女性の寿命が七十七歳で、女性の寿命としてはたしか世界一位になったと思います。ライフサイクル論というのが大きく叫ばれた時代ですね。こういうなかで『あこら』が「働く女性と考える主婦の広場」というキャッチフレーズを掲げて登場してくるわけです。

白状しますと、私は別に『あこら』に熱意をもっていたわけではありません。私はそのころ国立国会図書館に勤めておりましたが、あるときプラットフォームで斎藤さんにお会いしました。斎藤さんは「こんなこういう雑誌を出したいと思う」というお話をされまして、私は「やめたらどうですか」とまでは言わなかったですけど、「たいへんなことじゃないでしょうか」と申しました。

なるほどその後の斎藤さんの七二年から今日九七年までの間の、骨身を削るような苦勞がここから始まっているわけなんです。私の予言が当たったような気がしています。このときは日本に国際婦人年の国際的な潮が日本の女性問題に押し寄せてくるちょうど夜明け前の時期であつたように思います。ですから、斎藤さんの考えていらつしやったことがらが、いまのお話のなかでよくわかつた気がします。

この間の、戦後民主主義の旗手といわれた日高六郎さんと鶴見俊輔さんの対談をお聞きになった方もいらつしやると思いますが、そのなかで日高さんがいみじくもおつしやった言葉のなかに、私たちが戦後考えてきたことはひとつの「社会探し」であつたという言葉があつたんですね。人が一生懸命生きる

に値する社会というのはどういう社会なんだろうか、ということを探し求めた四半世紀だったということをおっしゃって、実は私もそういうことを時々考えることがあるんです。原点は自分にあるということとはわかるのですが、例えば女性の自立ということが言われましたが、経済的な自立を果たせばそれでよしとするというところに大きな落とし穴がある。そこでストップしたり満足してしまうという考え方のなかにある落とし穴ですね、感性というのは、やっぱり社会探しというのを忘れているのではないか、という感じがしてならないのです。

## 差別のない社会探しが原点

斎藤さんと私はある程度世代的には一緒なんですけれども、ただ非常に違うところは、私は生粋の農村で育ちました。長野県の北信濃の山の中なんですけど。私の姉はそういうところに生まれましたから、農村婦人の問題を一生の仕事にした人ですね。それは当然必然性がありまして、私が小学校を卒業



福田光子さん

する頃にも、農村不況の真っ只中ですからお弁当をもってこれられない子どもがたくさんいました。一つのクラスに十人とは申しませんが一割くらいはいました。そういう子どもたちが、いまでいう用務員さん、小使いさんのお部屋でごはんをもらっているという風景、これを先生がどういうふうに私たちに説明したか、いまは覚えていないんですね。村のはずれなんかには、子沢山なのに、掘っ建て小屋のような、まるつきり雨露をしのぐに耐えられないような家に住んでいるという家庭がいくつかありました。七、

八人子どもがいて、栄養が足りない。ということは知能の遅れということが必然的にでてくるんだろうと思うのですが、そういう子沢山の家庭の知能の遅れた子どもが全部の学年にいますね。

そういう悲惨な農村の姿をみていますと、なんとかしなければいけないのじゃないかという、さつき斎藤さんは正義感とおっしゃいましたけれど、私も本能的にそういうものを捨てておけない。やっぱりみんなが、それぞれの人がよしとする社会はどんな社会なのかということを小さいときからわりと考えていたように思います。

『女・エロス』の舟本さんがおっしゃいましたように、女の原点というのは大切なことだと私は思いますけど、差別のない社会、そういう子どもの社会探しというか、それではないかなという感じはしています、『あぐら』の創刊の頃から、いろんな意味の協力者としてずっと今日まできているわけです。

## 『女・エロス』は理論派、『あぐら』は実感派

二番目に『あぐら』という雑誌が『女・エロス』と非常に違って点をお話しします。

昔『女・エロス』を読んだときに感銘を受けたのは、筋の通った理論があるということを感じたからです。一方、『あぐら』は理論というよりもたいへん実感派というか、実感をもとに、情報を非常に大切にする女の情報誌として生まれたように思います。

ですからそこでは呼びかけもさつき斎藤さんがお読みなったように、たいへんやさしくて、ちっとも派手じゃない、地味な呼びかけです。『青鞥』とも違うし、その前の『女学雑誌』なんかとも違っていたいへんおとなしい呼びかけで始まったように思います。



ただお互いの価値観を尊重し合おうということですから「柵のないひろば」という言葉を使っていますが、柵のないひろばです。柵のないひろばです。誰でも入ってきていいのですが、とんでもない人が時々入ってくるんですね(笑)。斎藤さんの理想主義も結構なんですけれどもそのたびに混乱が起りまして、殴り合いとまではいきませんけれど運営会議なんという修羅場なんです(笑)。そういうことをしばしば経験しまして、斎藤さんの理想主義もほどほどにしてほしいなと(笑)、時々名古屋の高橋ますみさんなんかと話し合ったこともあるくらいなんです。

## 『あぐら』の積み重ねは得難い財産

しかしフェミニズムの雑誌としての『あぐら』は、たいへんな財産だと思います。230号を越える、これだけの積み重ねは一貫したものとして、大きな蓄積ですね。これは『あぐら』に集まった人たちのエネルギーの結果としてとても大きいものだと最近思っています。

最近の私自身の体験から申しますと、日本女性史の見直しということをやっております、特に現代史を書く場合、『あぐら』において他にないのじゃないかと思うことがたびたびありました。特に初期のものに、主婦論ではないのですが「主婦もの」と称して、主婦の実感の強さという記事がかなりありました。それから働く女と主婦の接点というような記事、そのへんの情報としてはほかではなかなか得がたいものがあります。

また、特集号のなかに「女もの」みたいなものがありまして、『女と戦争』、『女と情報』、『女と法』、『女と教育』とか、これがまたすごいんですね。特に『女と情報』なんかはたいしたものだと思います。こ

これは私どもは関与しておりませんで、この特集の時代はほとんど斎藤さんを中心にした『あごろ』の編集会議の方々がやっていらつしやいました。特集の『産む・産まない・産めない』も、優生保護法の情報としては群を抜いたものだと思います。

特集号のなかの「国連婦人の十年と世界女性会議」について。これも七五年のメキシコ会議では、政府の委員として行った人を除いては民間で参加している数少ない体験の記録です。斎藤さんのレポートはすごいと思います。特に当時のメキシコを語るその文章というのは、ちよつとほかでは見当たらない優れたものだと思います。何を書くにしても『あごろ』の情報というのは非常にこれからの現代女性史の見直しのうえには欠くべからざる遺産だと思います。そういうことで褒めたたえと、またほめ殺しか（笑）と言われますのでこの程度にしておきます。

法改正についても、特集が多かったですね。いま申し上げました優生保護法、それから男女雇用平等法、そのころは男女雇用機会均等法という言葉は使いまして男女雇用平等法でした。政府の均等法案を、『あごろ』は禁等法と称して、激しく改正を迫っています。

母性保護ではなく母性保障という言葉も『あごろ』が好んで使う言葉の一つなんですが、その特集もあります。それから派遣法。そういう一連の法の改正について、巻末に掲載した資料集というのも、非常に貴重な資料だと思います。ですからこれから論文をお書きになる若い人に貴重な財産としてご活用いただければ、『あごろ』の仕事も本当にもって冥すべきことだと思います。

『新聞切り抜きにみる女の16年』という特集もあります。これもいいのですが、ちよつと物足りない感じがしました。ただ非常にいいことは中央の新聞だけでないということです。〈あごろ九州〉で協力したものはかなりここに入っています、これも非常に貴重な記録だと思います。本の厚さで価値を決

定するわけではありませんけれど、主に八〇年代の分厚い特集号というものは、今後歴史を書くうえで資料になることは間違いないと思います。また世界女性会議、メキシコ・コペンハーゲン・ナイロビ・北京の記録ですね。これも貴重な記録だと思います。

## 『あぐら』の使命はもう終わったのか

三番目に『あぐら』は清貧というよくきこえますが、非常な貧乏ですね。全国から集まってくる運営委員の集まりでは、いつもお金がないということで、どうやったら持続していけるのか、出し続けていけるのか……。私もこれはよくわからないですね(笑)。これは将来ともどもわからないと思いますけど、斎藤さんの手品のような、言ってみれば斎藤さんが身を削って出し続けているという以外にこれを解く鍵はございません。車の両輪という言葉がありまして、建前の上では〈BOC〉というところで稼いで『あぐら』に投入しているということになっております。(あぐら)会員からいただく会費のなかから編集その他刊行の費用に当てているわけですけど、会費だけでできるはずがないですね。そういうことが斎藤さんが時々重い病気をなさる原因になっていると思います。私どももそういうのを助けるといには、あまりにもみんなが清貧なんですな。

「清貧であることが『あぐら』の特徴であり(笑)、清貧だから『あぐら』はいいんだ」というふうを増田れい子さんと下村満子さんのような方はマスコミのうえにあぐらをかいて(笑) こういうミニコミとかミディコミとかいうか、そういうものに対してそういう表現をなさるんですけど、現実はないへんだと思います。

『あごろ』の使命はもう終わったのではないかと言われる方がいます。そう言って飛び出した人もたくさんいらっしやるんですね。というのには『あごろ』を始めた頃には確かにそういう女の情報を発信するということはたいへん少なかった。しかし今のあまりにも凄まじい情報の洪水の中でなお『あごろ』がやらなければいけないことはないのではないかとこのふうに言われまして、席を立てて『あごろ』を辞めた方がいます。確かにそういう面もあると思います。いま申し上げただけでも、想像力をたくましくしていただくと『あごろ』の裏側というものはよくご推察いただけるのではないかと思います。

## 『地方拠点』というユニークな活動方法

次に地方拠点についてお話ししましょう。私がいまやっております〈あごろ九州〉は、福岡の何人かの『あごろ』会員の集まりでございます。私は長く東京にいまして、それまでも『あごろ』のお手伝いは少しはしておりましたが、一九七五年にいいよ福岡にまいりますときに斎藤さんから「福岡にいらしたら〈あごろ九州〉がきつとお役に立つ」という「悪魔のささやき」(笑)がありました。それである日突然電話がありまして、そういうことをささやかれている仲間が何人かいたのだと思いますが、ホテルのロビーに集まりました。集まったのは五人か六人だったのですが、その人たちは全部『あごろ』を読んでいた人たちだったんですね。偶然読んでいた人とか、これはいい雑誌だと薦められて読んでいた人とか、偶然店頭で求めたとか、そういう人たちとの出会いがありまして旗揚げした〈あごろ九州〉は今年で二十年になります。

地方の拠点というもの——拠点という呼び名がいいのかどうかわかりませんが——拠点活動を全国各

地に繰り広げていくことによって、東京中央の一極集中的な今の文化状況というものに、ひとつ風穴をあける意味で、地方から発信をするということがあってもいいのではないかと思います。これも斎藤さんの構想なんですけど、北は旭川、札幌にもありましたね。そして仙台。東京にも何か所か、もちろん名古屋にも高橋ますみさんという大物がいらっしやいます。京都、大阪、松山、鳥取、それと九州。転勤で今はいらっしやいませんが長崎にもありました。あと、沖縄にもあります。そういうわけで〈あごら九州〉の活動も二十年続いているわけです。

雑誌『あごら』というものがあることによって、グループ活動がもしろい展開をみせるということがあります。このかたちはほかのグループにはないのではないかと思います。全国に拠点が散在して『あごら』の編集を持ち回りでやる。持ち回りですることによってそれぞれの地方の情報が寄せられる。東京からももちろん出ておりますから、そういうお互いの交流をしながら『あごら』が続いているということなんです。『あごら』が続いているということだけではなくて、その雑誌によって例えば〈あごら九州〉の存在感が非常に強まっているということも事実なんです。『こういう運動をしています』とか、『私たちはこういう者です』とかいつて雑誌を売り歩くこともありますけれども、そういう雑誌によってそれぞれのみなさんの理解を得るということがあるんですね。グループの存在と活動の場と共に、常に雑誌のなかに行動の理念が伺い知れる、これが運動の『三位一体』という言葉でいっていますけれど、広げていく上で大事なことだと思います。

それともうひとつは年齢の差が大きいんですね。異年齢集団で、二十代から七十代を迎える人もいます。〈あごら九州〉だけでも在籍している人数は八十人くらいはいるんですね。でもしよっちゅう例会に集まってくる人はそんなにたくさんはいませんが、例会のメンバーというのはみんな元気者なんです。

## 『あごろ』の拠点から広がる女性運動

考えてみると、同じ本を読んで、毎月集まってくるという人は、かなり同質の部分をもっているんですね。桁外れに違うというのでなくて考え方も同じですし、かなり常識的ですし、安心して付き合える仲間が集まってくるわけです。しかし、そういうことを重ねているうちに同質のもののグループというのは風穴が必要になってくるんですね。これが最近の傾向です。そうしますとどういうことになるかと申しますと、月一回の例会というのはだんだんお義理になってきまして、あとはみんなそれぞれのグループ、ほかのグループとのかかわりがでてきます。

ご存じかと思いますが、日本で一番最初のセクシュアル・ハラスメントの裁判は福岡でありました。この裁判は勝ちましたが、おそらく「あごろ」がなければ絶対勝てなかった裁判です。被害者のAさんは、最初、どこか別のところに相談にいらしたらしいんですけど、福岡には「あごろ」というグループがあるからそこにぜひ行きなさいと言われて、私どものところに駆け込んできたんですね。それからみんな一生懸命支援を始めまして、女性の弁護士事務所とタイアップして、二年ほどかかりましたけれども成功させて、注目すべき判例を残したわけなんです。

これだけではありません。〈あごろ九州〉が関与したことはたくさんあるんですね。いまやっているのは「均等法改正in福岡」、これも林弘子さんという労働法で有名な福岡大学の教授を中心にしまして、いまそれが大きく広がっております。

もうひとつは平和運動なんですけど、六月十九日というのは福岡に住んでいる人にとっては記念すべ

き日として「福博」といわれる福岡と博多が昭和二十年六月十九日に全部焼けてしまったんです。本当に焼土と化してしまっただけですね。その日を記念して二十いくつかの団体に呼びかけて「六・一九平和のための女性のつどい」というのを毎年やっております。これの準備がかなりかかります。絶えず情報を交換しながら一年間、来年はどうしようかという計画を立てるわけです。そのほか〈北京JAC〉や「福岡市女性センター・アミカス」との共催のイベントに関わるとか。

だいぶ前でですけど「出歩くあごら九州」というテーマで『あごら』を出しました。〈あごら九州〉は日常的には例会にみんなが集うことになっていきますけれど、それぞれが出歩き始めて、そういうかたちでグループ活動がだんだん広がりつつあるということですね。

## フェミニズム雑誌の「志」とは何か

そこでこれからのフェミニズム雑誌の行方というか、近未来ということを考えてみたいと思います。これはさきほど申し上げましたようにやっぱり「志」というものがないと、運動というのとはなかなか進みません。その志というものは何なのか。それは斎藤さんが縷々お述べになりましたので私から付け加えることは何もございません。たださきほど一言申し上げましたように、女性が差別なく一生懸命生きるに値する社会というのは何なんだろうかということを探そうと思います。

ここ数年女性史の見直しということをやつていましてつくづく考えることなんですけれども、女性だけで生きてきた歴史というのは何ひとつないわけで、女と男が交錯するというかお互いにクロスし合う、そういう女と男の関係の歴史がいままで書かれたことはないかということで、『女と男の時

『空』という本を編集したわけですが、これから私どもはそういうすべてのことを関係というなかで見直していくことが大事なことでないかと思っております。

さきほどの『女・エロス』の中で、高群逸枝の『婦人戦線』に立つ」という、これは本当に私は好きな一文なんです。『女・エロス』の記事にほれ込むのは、やっぱりこの精神が生きているからだと思います。

『婦人戦線』の一九三〇年三月号に、さきほど舟本さんがお読みになったように「労働者が労働者として自覚し、農民が農民として自覚したとき彼らはすべての強権との対立を発見する。婦人が真に自覚したとき第一にしなければならないことは何であるか。それは強権社会に対して決然と手袋を投げつけることだ」という言葉があります。

斎藤さんも時々ラディカルになって、この『あこら』が先鋭的になって、こんなに激しいことを言っているのかと思うくらいに権力と対峙する時もある。これはやはりだんだん『あこら』が孤立してくると『あこら』以外に叫ぶ人がありませんから、どうしても発言も活動もたいへん厳しく先鋭化してくるのはやむをえないと思います。しかしここで『あこら』がいなくなったら日本の女の叫び手がなくなってしまうのではないかと私は思います。ですからやっぱり私どもの足元を照らす光のようなものとして『あこら』を大事にしなければいけないと思っています。

『あこら』を持続させるためにはこれからまたいへんなエネルギーが必要だろうと思いますけれども、これは今日ここにお集まり下さった皆様がたのご協力なしにはとても無理ではないかと思ひますし、ご協力があつてもあるいは無理かもしれない。見通しは必ずしも明るくはないのです。以上をもちまして私の報告を終わらせていただきます。



## 各地のあぐらメイトから ―会場発言―

鈴木勢子さん（新潟）

目が合っただけでマイクが回ってまいりました。斎藤千代さんと初めてお目にかかったのが先月の二十六日の新潟。新潟の読者の一人としてです。私が住んでいるところは新潟県と富山県の県境の町です。新潟市まで出かけるのに一八〇キロで、東京に出てくるくらいの時間がかかるんですね。それで県内の読者の方が十人くらいですが集まりました。私もいろんな本を読んだけど一番びっくりしたのが『あぐら』だったんですね。八月一日、二日、嵐山の「ジェンダー・女性学研究フォーラム」に参加しました。嵐山も今年二十周年ということで一〇六のワークシヨップがありまして、良かったのですが、ここに来るかどうかと随分迷いました。七月二十六日にお会いしたからと思ったのですが、ここに来て三人の方のなまのお話、活字でなくお聞きして良かったですね。〈あぐら〉に来て良かったです。

私は十八年くらい前まで東京の杉並に住んでいたんですけど、夫と別れましてゼロ歳と三歳の娘を連れて新潟の郷里に帰って、当初、女性問題はやらなかったんですけど環境問題などいろいろやって、いまは小さな町ですけど議員をやっているんですね。男社会に飛び込んで、女の視点、ジェンダーフリーということと議員をやっているんですが、女の人の目も厳しいんですね。たとえば、意外と高学歴の方たちが、だっただけあなた離婚しているでしょうとかね。昨日今日の離婚じゃないんですけど（笑）。戸籍上十八年も経っているのに。それは賃金が低くてパート労働でやっている方たちじゃなくて高学歴の人なんです。これはなんだろうと悶々としてきたんですけど、新潟で斎藤千代さんがおっしゃったよ

うに、知識はいっぱいあっても知ったかぶりをして骨の髄まで届いていない、という言葉に尽きるなど。私はそういう意味では『あごら』の読者を広めていくことが重要なということです。ずいぶん読者は増えましたけれど、まだまだ財政的にはたいへんなようなので、福田さんもおっしゃったように続けていくにはどうしたらいいかということをひとつ明確な目的として、この会でやっていけたらなと思っています。私は丸岡秀子さんの「一人の百歩より百人の一步」という言葉をいつも肝に銘じて活動してきました。福田さんにお目にかかれて本当に良かったです。ありがとうございました。

### 芦谷美鈴さん（鳥取）

昨日、一昨日と開催されていた女性学フォーラムに、留学生や子どもたちを含む総勢二十名のメンバーで参加していて、今、埼玉県嵐山町から移動してきましたが……。ちょっとした事件がありました。それと、今の斎藤さんのお話——あの戦争のときに、嫌だと思っていた人はたくさんいたけれど、声に出して言う人が少なかった——が、つながったので、お話しさせてください。

私は前田享子さんと一緒に、〈あごら鳥取〉を十四、五年間細々とやっています。学習塾を基本にして、〈あごら〉の活動をしたり、環境問題、差別問題など、いろいろやっています。が、今、七か国の留学生たちと多国籍バンドを結成して、幼稚園や学校などに呼ばれるままに出掛けていって、音楽活動を通して、国際交流をしています。このたびは、「日本でいろんなネットワーク活動をしている女の人们が集まる会だよ」と言ったら、みんな「連れていけ」と言うので、とにかく安い交通手段を探して夜行列車で来ました。留学生数人、子ども十何人、総勢二十人のメンバー。留学生と子どもを連れた団体というのは、動いてみると、障害者の団体に近いなと思ったんです。日本語が読めないし、話せない。ど

ここに行くかわからない、いつ迷子が出るかわからない……すごく弱い団体だということがわかります。シラーツと冷たい目で見られちゃって……まあ、やかましいのも事実なんですけど……。

さっきね、こちらに移動してくるときに、電車のドアに一人の子どもが挟まれて「あわや!!」だったのです。確かに疲れていて、田舎の子どもですから、俊敏には動かなかったのかもかもしれませんけど、ざあつとみんなが電車から降りている途中、ちょうどその真ん中あたり、最後尾じゃありませんよ、真ん中あたりを降りている子どもがドアに挟まれて、慌ててドアを力づくで押し開けて引つ張りだして……幸いケガがなくて助かったんですけど……そのときメンバーの一人が駅員に抗議したんです。

「みんなが降りている途中、真ん中あたりでドアが閉まったんだ。反対側のドアからもまだ降りていたし、状況を見てドアを閉められましたか？　まだどんどん降りていましたよね。うちの子が悪いんじゃない。人間を相手の仕事なのに、ちゃんと見て閉めてください」と。

そのことと、戦争のときに女たちも母たちも、戦争を嫌だと思っていたのに、みんな権力の側に取り込まれていった構図が、斎藤さんの話を聞きながらつながつたのです。「ああ、うちの子が疲れていてウロウロしていたから挟まっちゃったわ。しかたがない」と思わないで、やっぱり、「人間相手の仕事なのだから、ちゃんと見てドアを閉めて、ちゃんと見て仕事をしてください」ということを、その場その場でちゃんとやっていくということが必要なのだと。私たちは嫌なんだ、私は痛かったんだということを、その場で言う訓練、伝えていく訓練が大事。伝えていかないと次の事故になっていくし、やっぱり、一番弱い者の立場で社会というものは作られなくちゃいけないとしみじみ思ってた……。

そのとき、駅員さんに伝えたのですが、彼らは、謝りもしないし、目も見てくれないんですね。「繰り返さないために言っているんだからお願いします、人を見てドアを閉めてください」ということを言っ

ているのに。いま、戦争の話とふつとつながったので、マイクを持たせていただきました。

#### 下村美恵子さん（名古屋）

私も嵐山の教育会館のフォーラムに参加して、ワークショップはやつたんですが、北京のときもそうでしたが不勉強だったなという反省はしております。さきほどのお話で、女性が自立するために経済的な自立をすればそれでもいいのかというところが、ちょうど私のいまの段階であるなど。そこから何をするか、そこをいま考えていかなければいけないと思ひまして、心に残る言葉でした。

ワークショップは「女性と女性センター」ということで、『あごら』の特集（224号）で作った本件でした。予約販売でさらにまた売れました。ロンドンの大学の博士課程に留学していらつしやる方から「ぜひこれを読みたいので届けてください」というお申し出もありまして、うれしい思いでした。

#### 柳沢つや子さん（名古屋）

私も、ワークショップをしてきました。ワークショップの題名は「女性と民法」で、主に五年別居離婚・破綻離婚を考えるということでした。名古屋発信の〈五年別居離婚に反対し、女性の自立を考える会〉は、二か月に一回集会を開いているんです。名古屋ではみんな五年別居離婚に反対反対という意見ばかりだったのですけれども、昨日のワークショップでは、五年別居離婚大賛成という意見にすごく熱が入って、私は昨日は眠れないくらいショックを受けてしまいました。でもお互いに対立する意見がでたということは、それだけ意見交換がたうさんできたということ、たいへん良かったと思つています。ところで斎藤千代さんのお話のなかの「蛙の子は蛙」だと思ひます。なぜ女性が弱い立場にあるの

かを教えてもらったのはやはり母からです。日常生活で母の会話や立場、地位などから、自然と女性問題を発信していたのだと気づきました。私は〈あごろ〉の仲間に入れていただいて本当にうれいんです。いろんな人たちと出会うことができて、私なりに少しずつ女性問題を理解できつつあるように思うからです。『あごろ』に出会っていなかったら、多分、五年別居離婚・破綻離婚についても関心はなく、それが女性の問題であることも考えなかったと思います。もっと『あごろ』とお付き合いしたいです。

### 三船照子さん（仙台）

さつき全国の拠点の名前を福田さんがおっしゃったときに、やつぱり仙台が出て、ギクツとしました。仙台は飛ばしてほしいなと思っただくらい開店休業状態が長いんです。今回心細いところいっしょに来てくれました仲間が、大和田さんと、いま司会している今野さんです（拍手）。昨日婦人教育会館で「ローカルにこそ女性ジャーナリストの視点を」ということでワークショップをやりました。やり終えてほかの人の話など伺ううちに、何か始まりがチラチラと見えてきたかなと……。若い人のアメリカレポートなどがあつて刺激を受けました。舟本さんのお話を楽しみにしてきたのですが、嵐山から途中鶴瀬駅で下車して時間の段取りが狂つて残念でした。福田さんの二十五年間の通史を聞いていて鳥肌たつ思いでした。ホコリをかぶっていますけれど、バックナンバーをもう一回読んでみようと思います。

### 中村実穂さん（三重）

まだ私は新米で『あごろ』も読み始めて年数がたっていないので、今日ここで二十五年の話を聴いて、もう一回古い本を見させていただいて勉強したいなと思いました。いま名古屋のほうで〈あごろウイン〉

として毎月一回高橋ますみさんのところに集まりまして、岩波書店から出ている『女性とフェミニズム』を勉強して、専門的な知識と、身近な女性問題をみんなで討論して勉強し合っています。そういうことで嵐山でもワークショップを開いてきました。

イルゼ・レンツさん

私はドイツから来ました。七〇年代にも『女・エロス』を一度読んだことがあります。『あごろ』も読みました。そういうフェミニズム雑誌、日本の女性たちがどんなふうに発言できるかどうか。『女・エロス』はとてもクリエイティブな話で、いまおっしゃったとおり『あごろ』のほうは実感で、どちらも興味がありますから。今日はいろいろなことで新しいことを聴けて本当にありがとうございます。

アンドレア・ゲルマーさん

私もドイツからなんですけれども、高群逸枝について博士論文の資料を集めるために日本に来まして、そのためにも高群逸枝の『女性の歴史』が第二次女性運動にどんな影響を果たしたかということを調べたいと思っています。その関係では特に『女・エロス』にも興味をもっています。もうひとつは話にも出ましたが、歴史の連続性があるかどうかで『青鞥』が取り上げられていまして、『婦人戦線』もそうだし。それは第一次女性運動が作った雑誌なんですけれども、第二次女性運動にはどんな役割を果たしたか。それを取り上げたのは、ただ自分の七〇年代、八〇年代のテーマを解くためでしたが、それにも興味があります。『あごろ』にもそういう連続性があるかどうか。さらに『婦女新聞』が出てきましたけれども、それとの関連をちょっとお聞きしたいんですけれども。

斎藤千代さん

私は『青鞥』と『女・エロス』は完全な連続性があると思いますけれども『婦女新聞』と『あごら』が連続性があるといつていいのかわからない部分がありますね。ただ『あごら』の呼びかけ人である私が九歳からそれを読んで影響を受けていたことが、私自身のフェミニズムの始まりだったかな、という気はします。同じものをみても、それが女の問題と関係があるというふうによくの人が気がつかないなかで、私は女の問題に気がついたわけですから。

私が女の問題に気がついた一番最初は、戦後の日本にあふれていた占領軍の慰安婦と主婦の内職だったことは、さっきお話ししたとおりですが、戦後の大変なインフレと物資不足のなかで主婦はほとんどみんなミシンを踏んでいた。着るものも何もなくなっているものですから、どんなものをつくっても売れたのです。足が丸太のように腫れ上がる苦勞を重ねて一週間ミシンを踏み続けても、収入はお米五合、〇・七キログラム。それは一軒の家の一日分のごはんになるかならないかです。そんなことをしたらあなたが死んでしまうじゃないかと、私は年上の女の人に怒りました。だけど自分がこれをしなければ子どもが飢えると言われると、学生の私は言葉ありません。なぜ女はそんなに給料が安いのか。戦争中はトラックを運転するのも工場でリベットを打つのもみんな女の人だったのに、その女の人たちが、男が戦場から帰ってくるとみんな家庭に追い返されて、そういう内職などをしなければならぬ。

そのことに私はどうしても納得できなかったので、大学生になってから自分のテーマとして女の問題を選んだのですが、当時の大学には女性学の講座もなければ指導教官もない。仕方なく、東西の古典から人権思想を読み直し、社会の構造にかかわる問題の本も自習しました。友人には「なぜそれが女の問題か」とか、「なぜそれをあなたがやるのか」と不思議がられましたけれど、これは私のなかではたい

へんな大事件で、さつき福田さんが「見て忍びないものがあるからやるんだ」と言われましたけれど、私も、見るに忍びないものを見て、駆り立てられたのだと思います。でも、同世代の女の人が同じように戦争を体験して、さまざまなことを見、感じたのに、私の世代ではこういうのは珍しいんですね。私は卒論のテーマにも女性問題を選びましたけれど、たぶん日本で大学の卒論に女の問題を選んだのは私が最初だろうと思います。そういうことはやっぱり自分の中になんらかの感受性があつたからで、それは『婦女新聞』みたいなものから学んでいたのではないかと思います。『婦女新聞』を信奉していた母の影響もあります。

といって、『あごろ』は『婦女新聞』を歴史的な系譜として受け継いだのかと言うと、ちよつと違う。難しいですね。個人の発達史上にあつたことと、発展段階の影響は難しい問題だと思います。

フェミニズムの雑誌を、『青鞥』系、『婦女新聞』系、というふうに分類すると、『女・エロス』や『婦人戦線』『女人芸術』『フェミニスト』などは『青鞥』系、『婦女新聞』に一番近いのが『あごろ』とか『ふえみん』、そして『婦人展望』。『婦人問題懇話会会報』は、情報というより論文集ですから、その中間、という感じがな、と思います。

六三年に創立された〈婦人問題懇話会〉には、私は創立準備の時から関わり、会報にも原稿をだいぶ書かせていただきました。樋口恵子、赤松良子、井上輝子といった方たちも、ここから巣立ちました。私はここで山川菊栄さんや田中寿美子さんから学んだことが大きな財産になっていますが、懇話会は「研究」が目的で、「運動」はしないことが原則です。「人に忍びざる情況」を変えるためには、私は「運動」の原点になるジャーナリズムをつくりたかったのだと思います。女の問題は、構造的な問題だと、私はとらえていたからです。



『婦女新聞』の福島氏も、構造的な問題を解決する手段としてのジャーナリズムを志したと、私は解釈しています。そういう意味では、両者には大きな共通項があるように思います。

### 二宮純子さん（名古屋）

私は更年期でこのごろ元気がないものですから（笑）パスしたかったですけど。  
名古屋で十年ほど夫婦別姓の運動をやってきました。それが去年国会を通るかと思ったら、自民党の大反撃にあいましていま全然見通しが立たない。その上に困ったことに、私は五年別居離婚・破綻離婚に反対でして、そのことを約五年くらい前から言い出しました、そうするといま民法改正は夫婦別姓と、非嫡出子の相続分の問題と、五年別居が三点セットになっているものですから、私は別姓は通したいし、五年別居は阻止したいということで私の中が分裂してしまって、民法を改正せよと晴れやかに言えない。そういう、自分としては非常にふがいないとか、割り切れない状況にあるものですから、すいません、パスしなかった（笑）。だけどやはり刺激は受けていないと退化する一方ですから元気のないままこういうところにも出てきました。そのうちに出口がみつかるかなというふうに思っています。

それから私は結婚退職した経験もありまして、二十三年くらい前に私は弁護士から専業主婦になりました。そして悶々としていたときに『あごろ』という雑誌があるということを友達の弁護士から教えられて、高橋ますみさんなども知り合って。私の落ち込んだところが、私ひとりが馬鹿なために仕事をやめて専業主婦になったから陥っている穴ぐらではなくて（笑）、多くの女性が陥っているところであって、そこからの出口のひとつを（あごろ）が指し示しているというふうに思っって長い付き合いとなったわけです。そして、専業主婦を九年やって、弁護士に復帰しました。

中村ひで子さん（東京都国立市）

「女性の平和運動」ということでいろいろな方にアンケートをお願いしたんですね。一番早く斎藤さんがお返事をして下さって、それですごくいい印象を受けました。実はメルボルン大学で博士課程をやっています、その論文のテーマに「女性の平和運動」ということを選んだんです。斎藤さんの回答のなかにご自分の原点ということもおっしゃっておられて、たまたま私のスーパバイザーのヴェラ・マツキーニさんという人が斎藤さんの『見えない戦争』という湾岸戦争後のルポを貸して下さって、一気に読みましてすごく感動しました。『あごろ』のことは、こういう雑誌が出ているなということを知っていました、時々見させていたいただいて、それほどのもり込んではいなかったのですが、斎藤さんの『見えない戦争』でずいぶん勉強させていただきまして、今回どんな方かなと思つて参加させていただきました。よろしくお願いいたします。

田村伴子さん（東京都杉並区）

普段は毎月一回（あごろ）で「自立の心理学」という講座があつて、そこで何人かの女性と自分たちの身近な問題から、社会が右傾化してきて危機感がおられる状況などについての話し合いの場に参加しています。（あごろ）のこういう活動が、やっぱり差別がない社会、自分たちが生きていてよかったと思えるような社会に近づくような、手触りというか、そういうものをつかめるような感じの場だと私は思っているんですけども。

私自身は女性二人で小さな農業雑誌の月刊誌を出しています、『あごろ』を出し続けていくことのたいへんさが本当に身をもってわかるのです。情報が氾濫して、金があるところが雑誌も情報も握ってい

くという現在、私たちのメディアをどうやったらみんなで作り続けていけるかということはすごく大きな課題だと思うんですね。二十五年間、斎藤さんが骨身を削ってやってこられた活動を私たちがどうやって広め深め受け継いでいけるかということを、具体的に、雑誌づくりを続けるための提案ができればいいなと思っています。

### 池田恵美子さん（横浜市）

『総合ジャーナリズム研究』の編集をしています。二十年くらい前に『あごら』の新聞切り抜きなどをさせていただいて『あごら』で勉強した一人でございます。現在は私どもの雑誌に斎藤千代さんにコラムをご執筆いただいています、斎藤さん個人、あるいは『あごら』という雑誌を毎月みて、まだ勉強しております。さきほど斎藤さんが「片寄りのない情報」とおっしゃっていたのですが、私もいま編集スタッフとして、やっぱりひとつの雑誌を動かす、編集していく、真の意味での片寄りのない情報はどう伝えるかには悩みが尽きません。

私は『あごら』という雑誌の編集姿勢にもすごく共鳴しております。福田光子さんには、藤原書店の仕事（女と男の時空）で一緒にさせていただきまして、これから男と女の関係性のなかでも歴史をみていかなければいけないかなというのを改めて今日のお話で思いました。

今日のシンポジウムについてひとつだけ言わせていただきますと、戦後フェミニズムのとはくちの話を今日されたと思いますので、第二弾をぜひやっていただけたら足跡をたどることになるのではないかと思います。これからも学ぶほうが多いと思いますけど、会員のひとりですのでよろしく願っています。

## 大東愛子さん（婦人民主クラブ）

さきほどお話を伺っていて『女・エロス』が出たときの新鮮なショックを懐かしく思い出しました。『あごろ』の創刊の言葉を聞き、文章を読んで、ああ私もかつてこの文章を読んだなと懐かしく感じました。婦人民主クラブは『ふえみん・婦人民主新聞』という新聞を出しています。大きなメディアでは封じられていたり、見落とされがちな草の根の情報を届けていきたいという意味で、『あごろ』さんと同じ気持ちでいます。それは絶対に必要なことだと思います。また、運動の場でも共働することが多くあります。特に、斎藤さんを中心として『平和』のことに熱心に取り組まれる姿勢に深く共感します。これからもネットを組み、地道で確かな歩みを一緒にしたいと思います。今日は二十五周年本当におめでとうございます。

## 北村三和子さん（東京都世田谷区）

斎藤さん、お久しぶりでございます。今日は、『あごろ』の来し方・実績、また『女・エロス』、近年の女性史、その他の女性雑誌や新聞を歴史的に振り返るお話を伺って、改めて勉強させて頂いて本当にいい機会でした。私の個人的な『あごろ』との関わりを思い出しましたら、結構古かったんだなあと気付かされた次第です。

私が、『あごろ』と初めて出会ったのは、一九七六年に夫がアメリカの大学院に通っていた時です、七〇年代後半のアメリカ社会というのは、フェミニズムムーブメント、リブの運動が荒れ狂っていたのですが、私自身もいろんな女の集会に行つて、自分のアサーティブ・トレーニング、コンシャスネス・レーシングをやつて、いろいろな模索していた最中だったので、どんな集会に出ても、全国組織NO

Wの集会にしても、地域の小さな集会にしても、当然のことながら、アメリカの女の問題を話し合っていると、日本の女の問題とかみ合わないところがあるわけです。そうした時に、お連れ合いが私の夫と同じハーバード大学の大学院に籍をおいていらした河野貴代美さんやゴードン・ヨシエさんたちとめぐり会って、日本の女の問題を話し合う集まりをボストン、ケンブリッジ界限で作ろうということで「ケンブリッジ日本女性問題を考える会」を発足させました。そうしたら、日本の女性グループとも繋がりをもちたいということになり、河野貴代美さんが『あごら』を知っていて、そこで『あごら』とめぐり会って斎藤さんを存じあげた次第ですが、それが七六年でした。

私自身が『あごら』に育てられ、『あごら』に勇気づけられてきたのがもう二十年以上にもなったのかと改めて感慨深く思います。

かといってここに多くご出席の方々のように、婦人運動や女性問題の活動に関わってきたということではなく、国の内外で一会員一読者という事で大半を過ごしてきたのですが、その間常に自立を追求し、子育てや夫の転勤等家族の変化があつた時、職業を持ち続ける努力をする勇気を『あごら』から貰ってきたということのほかに、先ほど名古屋の弁護士の方が「結婚退職で辞めたことが、自分一人の問題じゃないという視点をもっていた」とおっしゃっていらしたのを伺って、私も『あごら』から得た一番のものは、経済的自立や精神的自立心を持つということとは勿論のことながら、自分を常に客観的に観ることのできる視点を持たせてくれたことではないかと思っています。自分を客観的に観ることによって、八方塞がりにならずに正義感をもって公正な目で自分を判断し、そこから勇気が生まれ、そうやって今日まで自分なりに強く生きてこられたのかなとつくづく思い至って、改めて斎藤さんはじめ皆さんと『あごら』に感謝の気持ちでいっぱいです。

西川けい子さん（埼玉）

名古屋で〈 Wein 女性企画 〉に参加していましたが、初めて師匠の大事さとか仲間の大事さというのがよくわかりまして、それからぼつぼつ勉強を始めました。いまは埼玉県です。JRに乗ってれば一時間で来られます。名古屋にいた頃は一時間というともう田んぼになっちゃいますし遠いと思っていたのですが、「たいへん近い」ということを首都圏で教わりましたので、どんどん動いて、できるだけ参加させていただいています。

もう帰ってしまったのですが、隣にいた遠藤むら子さんと二人で〈 あごろ埼玉 〉をいちおう立ち上げたことになってはいるのですけど、二人で立ち上がっているだけなものですから、つい近くの東京に来てしまいます。これからもう少し埼玉県の北部の人たちと連絡を取り合い、大勢の人たちに呼びかけて固めていこうと思っています。

岩田すみ子さん（岐阜）

参加はぎりぎりになって思いました。遅かったから満員じゃないかと心配して、事務局に「まだ参加できるでしょうか」と電話したら「大丈夫ですよ。誰も来ないから（笑）まだガラガラです」と。「じゃお金を早速払い込みますので」と言いましたら「それは来たときで十分ですから」ということで、そうですかと半信半疑で電話を切りました。あとから考えるとあれは斎藤さんで、斎藤さんはああいうふうにおっしゃるけれどもなんか事務的には信頼できないところがあるから、あとからほかの人に叱られているんじゃないかと思って心配しながらまいりました。でもおっしゃったとおりで、良かったな（笑）と思いました。

今日はずっと話を伺って自分以上の二十五年というのも考えてみました。『女・エロス』との関係ですとか『あごら』との関係ですとか。

『あごら』を一番最初に見したのは発刊した年です。その前年くらいに私自身が岐阜県の新聞社になんとか入社いたしました、誰も読まないまま放ってあった雑誌を拾って大事に持っていたということを思い出しました。そのとき私自身はそれを読んだはずだったんですが、最近創刊号が再版されまして、それをみましたら泣けてきましたね。たぶん拾ったときには、そういうふうには読むことはできなかったんじゃないかと改めて思いました。

私自身は地味に、ただ買っているだけの読者の一人なんです、斎藤さんの怖いところはそういう読者がいるということもちゃんと知っていらして、何しているか、何が好きかということをやちゃんと知っていらつしやるんです。ここにもいらしている大垣市の大橋倫子さんの紹介で読者になって、これまでにたくさん機関紙とか雑誌とか買いましたが『あごら』だけは会費を払っても損すると思ったことがなくて。

斎藤さんが創刊したときにたくさんさんの批判とか反対者が出たということをおっしゃいましたが、私自身も『あごら』の読者であるという、特にどちらかというと左翼系の女の人からは馬鹿にされたんです。私はなんで馬鹿にされるのかよくわからなかったんですが、とにかく馬鹿にされたということだけよく覚えています。でも私自身は馬鹿にするどころか、今日福田さんがおっしゃいましたように本当に真の意味でレベルが高い、真の意味でラディカルなものがいつも含まれていて、そういう尊敬の気持ちでもってずっと読んでまいりました。お話しするといろんなことがありますけれども、あとの方がいらつしやいますのでこのへんで。

## 大和田郁子さん（仙台）

さきほど三船さんから私の紹介がありました。仙台も拠点の一つに入っていますので、三船さんと同じで、帰ったら何かしなければいけないのか（笑）と。

今日はみなさんの活発な意見を聞きながら私どもも参考にして、別なかたちでの展開、切り口でいけたらいいかなと思っています。よろしくお願いいたします。

## 辻和子さん（東京都板橋区）

若い方のなかで、私はおばあさんですけど、気分は若いつもりです。みなさんもそうかもしれないですけど斎藤さんや福田さんにはものも言えないくらいお世話になっているその一人です。さっき『婦人民主新聞』の黄色い洋服の方がおっしゃって、とても懐かしかったのですが。もう亡くなりましたけれど松岡洋子さんという人がいた国民生活学院という学校で、生徒主事だったんですね。その関係で学校を出てから松岡洋子さんの秘書をやって、婦人民主クラブの仕事と婦人民主新聞の編集をしました。

松岡さんがアメリカに行ったりしていなくなったときは「スポーツニッポン」というところに行ってスポーツニッポンの広告取りをしたり新聞社のなかでいろんな仕事をいたしました。

私自身は好きな人がいたのでですけど戦死しましたから、残念ながら独り者です。でもとても子どもが好きで、姉の子どもとか親戚の子どもをかわいがっておりますので、そういう子どもたちからは好かれていていると思います。年でちょっとあちこちガタがきていますしあまりお役に立たないのですけど、精神力で頑張って、みなさんの足手まといにならないようにお手伝いしていきます。



ザイリーさん

何もわからないですけど男性は一人ですからとりあえず。マレーシアからきました。いま鳥取で勉強しています。最後に多国籍バンドと一緒に楽しみましょう。

宮崎和子さん（大阪）

こんにちは。〈あごろ大阪〉で〈さわの会〉といっしょに斎藤先生にお目にかかってお話を伺いました。このたび国立婦人教育会館のほうに参加し、追っかけのようなかたちでこちらに寄せていただきました。みなさんとお目にかかりたいなと思ひまして。どうぞよろしくお願いいたします。

斎藤美栄子さん（東京都港区）

〈あごろ〉の集まりにくると恥ずかしくて穴があつたら入りたい感じです。〈あごろ〉のためには何もしていいのに、大学生のときに斎藤千代さんにお目にかかつて、〈BOC〉で仕事なんかも紹介していただいて以来、その仕事はまだ細々とですが続いているなど恩恵にのみあづかっています。それでいながら、ただ読者会員でいて、本当は、その本もあまりおもしろくないとか、疲れたときに読んでもしんどくなるというか（笑）、もうやめようかやめようかと思いつつ創刊からずととつていて、創刊号が二冊きた（復刻版が来て）という感じです。でも息も絶え絶えに続けているこの本をやめるのはすごいギルティな感じで（笑）なんとなく続けて読んでいる会員なんです。

大学四年のときに女子大生亡国論ということを母校の暉峻先生がおっしゃって、そのときにちよっと目覚めかけて考え始めたんですけど、子ども三人産んで、お姑さんもいますし、アルバイト的なことを

しながらも、どっぶり家庭生活を続けていました。ですから〈あごろ〉の世界では落ちこぼれなんです。でもお母さん方の集まりとか、趣味のグループとか、家事とかお料理を一生懸命やる主婦グループとかの中では、ある意味ではちよつとエリートらしいんです(笑)。なんの問題も感じなかったり、感じるのを避けていたり、というような方たちに、『あごろ』で学んだことを言うとか「あなたすごいわね」ということになって(笑)、『あごろ』のおかげで北京女性会議にも出ましたし、そういうのに出ましたという報告を書いたことによって、区の海外派遣にも行つて、報告冊子を作つたり発表したりしました。こんどまた嵐山にも行つたからちよつと偉くなつて(笑)。でもあまり言ひすぎると「あなたは別だわ」ということになりますので(笑)、そうならない程度に(笑)、ほどほどにバランスを保ちながら。私は豪華客船の中の下の客室でお料理を作つたり部屋のなかをきれいに整えているような主婦たちに、「それもとっても大切だけれど、その船に穴が空いたら沈没するんだし甲板に上がつてこの船がどっちの方に進むか見守ることも必要。そういうことを〈あごろ〉の人たちはやっているんだから時々私たちも」、ということ、甲板と客室の間を走り回つて伝えるパイプ役になれたらなと思つております。

### 澤田和子さん(大阪)

最初は〈あごろ大阪〉だったのですけど、いつのまにか〈あごろ阪神〉ということになっています。責任者がいたのですが、それぞれのご都合で替わられて、いま私が担当しております。斎藤さんには七月に来ていただいて二十五周年記念として「女が働くこと生きること」のタイトルで〈あごろ〉の設立当時のことを中心に、講演をしていただきましたので、今回はもうやめておこうかなと思つて、おこたわりのお電話をしたら、芦沢さんが「誰も申し込みがない」となげいておられたので、これはいけ

ないと思い、来ました。友人の宮崎さんが個人で申し込んでくださり、大阪としてホッとしたところで。私の高校時代の友人が東京におられることを思い出し、一人でも多いほうがいいと思って昨夜電話で頼みましたら、「難しい話は苦手やけどパーティーだったら行きます」と言って下さったのでよろこんでいます。私は北京会議は参加できなかったけれど、みなさんの海外旅行傷害保険を契約してもらい、儲けさせていただいたので、やっぱり来なければいけませんよね(笑)。これからも大阪をよろしく願います。

### 高橋ますみさん(名古屋 あごらウイン)

名古屋から参りましたけれど、名古屋育ちというよりは(あごら)育ちでございまして、『あごら』の最近の本は難しいので読まないけれど、出たり入ったり。(あごら)にいるとどういう女性のひとりができるかという見本のように、創刊号からずっと会員でいます。

名古屋から来た連中は(あごらウイン)と言うので、あれは(あごら東海)だったのが、いつの間になくなったんだろうと思われる方もいると思いますが、創刊号が出たころは(あごら東海)というのを最初は立ち上げました。その(あごら東海)では主婦の自立に向けての勉強会をしておりまして。それが数年続きまして、勉強ばかりで自己紹介ばかりしてもしようがないということで(笑)今度は『あごら』を出している(BOC)、バンク・オブ・クリエイティビティという会社で女性の能力を登録してそれでマネージしていろいろ仕事をするということになりました。

私が『あごら』という雑誌に一番最初にひかれたのは、その当時私はお金が欲しかったんです。(BOC)はお金を得るのに能力を登録して、その能力を生かし合いましょうということでしたが、その能力

もないのにどうしようと思つたら、「赤ちゃんのあやし上手という能力だつてあるし、老人の愚痴の聞き上手とか、漬物を漬ける才能とか、そういう社会でまだ経済的に評価されていないものをみんなで協力し合うことによつて社会につないで自立に向けたらどうだ」というまるで夢のような話にマジにのつてしまいました。気がついたらそれが三十代の半ばでして、来年は還暦ですからその間ずっとその夢を追いつけております。

それでさつそく〈東海BOC〉というグループをつくつてまた数年たちました。そしてちょうど銀行が「トマト銀行」とかいろいろ名前を変える時期だったので、「〈東海BOC〉ですが」と言う、「東海美容師の方の集まりですか」(笑)というようなこともありまして、名前を変えたんです。〈ウイン〉というのは勝つという意味ではなくて、国際的な女性の地域発信のネットワークというのを英語では頭文字をとりますと「WINN」、そういうグループをつくつてビジネス集団を作りました。

現在は名古屋の栄に小さなオフィスをみんなで持つことができるようになったのですが、それもたまにお隣の一軒おいたところにやぐさ屋さん、暴力団の事務所があるからそこが空いていたんですね。貸してもらえないかと言つたら、お隣の喫茶店の方が「暴力団がそばにいるけどいいかね」と言われたから、「私たちも似たようなものだから」と(笑)。

結局借りられたんですが、近所の方たちもどうもそこに出入りする女たちが毎回変わっているの、ママさんは誰か、と隣の喫茶店に聞かれたそうです。日替わりママさんだと言っているんですけど(笑)。そういういきさつがあつて、私どもの事務所では『あごろ』の創刊号からずっと商品として並べております。

そしてただいまたいへんなお三方のご苦労の、そして質の高いお話を聞きながら思いましたのは、こ

うやって長いこと『あごろ』に関わらせていただいて、『あごろ』というのは人を育てる種ばかりをまいて、私をはじめいろんな人が目覚めて。『あごろ』に出会えなかったら、いまの私、いま社会参加している私はないと思っています。私に出会えなかったらここにきている人もないだろうというくらい、自分としてはいろいろと客引きをした(笑)。近所が悪いと言葉も悪くなるのですが(笑)。そういうなかで、東海でもいろんな人が人生を生きることが楽になったと。いろんなことで窮屈な思いをしていて話を聞いてパツと楽になるという経験をいっぱいしたんですが、それがなかなかこの東京の(あごろ)、およびこの(あごろ)という集団に還元できない。というのは、それぞれが違う興味をもっていて、例えば私のところのグループでも(あごろウイン)の勉強会があるし、シングルマインドネットワークがあるし、ライター集団があるしというふうに、いろいろ枝葉になっていつているんですね。枝葉になってるけれども、総括しようと思わなくてもいざというときにネットワークとして集まれるという状態なんですよ。

そういう分散化をしたグループが、こんどは全国的にいろんなかたちで時々「(あごろ)です」というと、「私も若い頃(あごろ)でした」とか言われることがあります。どうして継続して(あごろ)じゃないんだらうなというのが悩みというか(笑)。

『あごろ』二十五周年おめでとう、ここからいよいよ次のおめでとうに向けてどういうふうにしていったらいいかということは、これから知恵を出しあって、今日こうやって集ったみんなのなかで考えていく。例えば分散化しても会員としてつなげる努力をもつとする必要があるのではないかとか。それにはやはり楽しい女性運動というのができていいのではないかと思います。これからバンドをしてくださるということですが、そういうふうにお芝居をしたりパフォーマンスをしたり、いろいろ多様な楽しみ

方をしながらというふうにしていかないと、次の世代に伝えていくときに、なんか女性問題はしんき臭くて(笑)となるとね。

「戦争と平和」ということでは、私も小学校の一年生のときに機銃掃射に狙われて、いま生きているのが不思議だという……。三人のお友達が同時に亡くなられましたので、ずっと戦争と平和ということにはこだわり続けているんです。そういうことも伝えながら、しかも若い方にも読んでいただける『あごら』にしていくにはどうしたらいいのかというのがこれからの私たちの課題だと思います。

斎藤さんも体は最近はお元氣なようで……。やはりまだ頑張っていただかなければいけませんけれど、もうちょっと私たちが支える態勢をつくるときにきているのではないかと思っています。どうもしやべり過ぎてしまいました。ありがとうございます。

あごら二十周年記念号(183号 一九九三年四月発行)

## あごら20年●女の20年

◆良妻賢母フェミニズムなんて捨てちゃえ! 田嶋陽子のおもしろフェミニズム

◆AGORAボトム会議 マスコミの限界／メディアの限界

下村満子・増田れい子VS石原豊子・奥川睦・斎藤千代・福田光子

◆みんなで話そう——女と男の言いたい放題

金住典子／河野信子／小島サカエ／高橋ますみ／外口玉子 ほか

定価一五〇〇円＋税(あごら会員の方は税・送料サービスいたします)

「注文はあごら事務局へ」TEL 03・33354・3941

# 私と『あごら』

## —あごら25周年に寄せて—

〈あごら〉を支え続けて下さる全国の皆様から、心のこもったメッセージをいただきました。  
(掲載あいうえお順)

◆「母を語る」のシリーズを感銘深く読んでいます。女が生き難い時代に、自分の考えを持って生き、子を育てた偉大な個性に、尊敬と憧れの気持ちを抱かせられます。自分もそのように生きられるという勇気が与えられます。特に、月一回会っている三浦文子さん（高橋ますみさんの母上）の場合は、羨望の気持ちが湧きました。

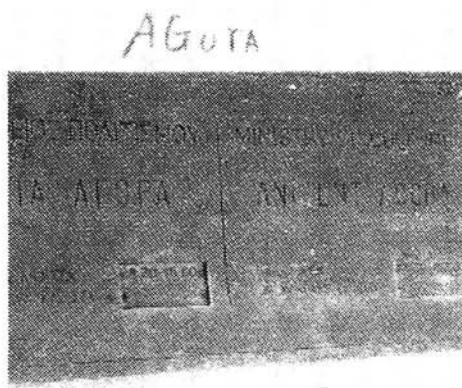
私の母やその他大勢の母たちは、志を抱いても遂げられない人がほとんどでした。夢や希望を捨てて、歴史の中に埋もれていく母たちの思いもこれからは語られてほしいと思います。母の個人史のマイナスの面を知ること、今後、それをプラスに転じて生きるには必要なことではないでしょうか。

◆（愛知県・尾西市 浅野美和子）  
古代ギリシャの『あごら』の案内板です。アテネの自由時間、まっさきに

訪ねたのですが、月曜休みとあって、門の外から眺め写真を撮るだけに終わりました。残念でした。

でも、雑誌『あごら』創刊二十五周年の年に、その名の由来の『あごら』を訪ねることができ、会員として嬉しい思いでした。

炎天の古代あごらや門閉さす 阿鬼  
(東京都・日野市 石井明子)



◆第225号「あごらのあごら」で『あ

ごら」が犯罪報道をテーマとし、男性優位社会である日本のマスメディアの中に女性の視点を取り入れ、女性差別的な言葉を使用しない報道、被害者を匿名とし、プライバシーを暴露せず、犯罪事実のみを伝える報道をいかにして実現させるか、その方策、道筋を模索されることを提案」しましたが、未だに犯罪報道の特集を組まれておりません。二十五周年をひとつの節目として、犯罪報道、マスメディアの問題の特集を組まれることをここに改めて提案致します。

(東京都・大田区 市川雅彦)

◆二十五周年おめでとうございます。

今〈国際婦人年あいちの会〉でも、二十五年の歩みのまとめの作業をやっています。思えば『働く女と考える主婦のひろば』と書かれた『あごら』を手

にしたのが、現在の私をつくる大きな出発点でした。そして一つの支えでもありました。この二十五年間、地道で骨太で堅実な歩みに心から敬服しています。(愛知県・東郷町 伊藤汎美)

◆創刊号に書かせていただいていた以来のおつきあいです。二十五年前と今を比べてみると、環境・人権・平和、教育等々、世界は、日本は、少しは良くなっているでしょうか。ともすると絶望的に、なえてしまいそうの中で、唯一、目に見えて確信できることは、女性たちの声や活動がしつかりと世の中を動かしていること。まだまだですが、『雲の上は、いつも晴れ』なのですから、これからもしつかりとやっていきましよう。

(東京都・千代田区 伊藤佑子)

◆女性が本当に必要としている情報を発信する数少ない雑誌の一つとして

『あごら』はとても貴重な存在だと思います。特集をはじめ、主要記事にたっぷりページをとり、資料も掲載するなど、充実した内容も魅力です。今後ますます良い雑誌を発刊し続けて下さい。(神奈川県・川崎市 井上輝子)

◆『あごら』の信頼性、誠実さ、先進性、そして読みやすさ、すべてにおいてこれに優るものはないと、いつも送られてくるのを楽しみにしています。さまざまな場でPRしていますよ！頑張れ あごら！

(沖縄県・那覇市 伊良部裕子)

◆四半世紀を生き抜いてこられましたね。二十五年と言えば四十歳の人も六十五歳。このまま同窓会として高齢化していくか、それとも次の世代に引き継ぐか。運動も世代間ギャップに直面しています。

(東京都・文京区 上野千鶴子)



◆〈あごろ〉に集い、〈あごろ〉で考え

〈あごろ〉で生命を吹きこまれ、真っ直ぐに道を歩きはじめた多くの女たち。日本全国に種をまき続けて、そのつながりと広がりには、大きく日本の社会を変えてきたと思います。そして自由を息をして生きられるようになったと思う。しかしなお、閉塞した社会で果たしていく〈あごろ〉の役割は重要です。ご健闘を祈ります。

(東京都・千代田区 大脇雅子)

◆二十五周年おめでとうございます。

継続することは、大変な労力を注ぐ人がいて、初めてできることです。斎藤さんをはじめとする事務局、編集を担う方々に、心底敬意を表します。

いつの間にか、娘が『あごろ』を手にするようになりました。家の中で、意見を交換できるよう、「手引き」であって下さい。

(兵庫県・明石市 岡崎ひろみ)

◆二十五周年、それ自体得難く、〈あごろ〉皆さまのご尽力に、敬意と喝采を贈ります。わたくしも何の因果か五十年、関東平野で幅広く人間平等をめざす活動を重ね続けましたが、ローカル、ワーストワンと言われ続ける地方の声は、中央(マスコミ)には届かず、張り合いのないことが多かった。

私、ご覧下さるように文字がさらさらと書けないのは三年前硬膜下血腫で頭蓋手術二回、辛い脳は無傷。しかし平衡感覚不十分、独りの外出差し止め、さらには昨秋眼圧が上がって左目失明。ただし多くの友人に励まされ、仕事は、休みなくしています。昨年は三篇出版し、忙しかった。これが失明原因になつたらしい。

これからも民意の力として、期待します。(埼玉県・桶川市 岡田まき子)

◆私の願い

①新ガイドラインは世界の平和を破壊する武力制圧であり、また日本全土を武力戦に突入させるものであることを危惧し、今こそ、同じ志を持つ者が連帯して、民衆の大きな力でもって、憲法改悪を阻止しなくてはならないと思います。〈あごろ〉は、女性の力を大きく結集するものとして期待しております。

②戦後処理に対する日本国家の早い対応を切望しています。

私は戦時中、大久野島(毒ガス製造所)に学徒動員されておりました。日本は戦争で中国に於いて使用した後、戦後大量に遺棄してきました。

中国ではその遺棄毒ガスによっていまだに被害者が出ており、単に肉体的苦痛に止まらず、働けなくて貧困に陥り、家庭が崩壊し差別を受けて、生活

が破壊されてしまっております。日本が国とし、謝罪と救済、補償を早く行なつてほしいので、〈あごろ〉の力をお貸し下さい。

(広島県・三原市 岡田黎子)

◆雨後の筈のように出版された女性情報誌の中で二十年生きのびた『あごろ』の二十周年を祝つたのはつい昨日のようですが、もう五年。本当にアツという間ですネ。縁の下は火の車でも、継続は力。これからも幾多の困難を切り抜ける生き延びて下さい。行く手に幸あらんことを!! (愛媛県・松山市 奥川睦)

◆「新聞」がつまらないという声をよく聞く。選抜の時点でステレオ・タイプが採用されるような気もするし、皆さん出た記事を書く人がいても編集の時点でカットされるのかもしれない。とにかく新聞社という企業の臭いがプンプンして舌足らずな情報にいらいら

してしまふ。

そんななかで『あごろ』の『なぜ今「自費史観」か(1、2、3)』は、多面的編集と広場の発言で光っていた。

さまざまな意見の中から私たちがどのような時代に生きているかを考え、自分の言葉で語れるようになるとき、世論は活気を帯びていくのだと思う。

(東京都・調布市 奥平せい子)

◆満二十五周年、心からおめでとうございます。《継続は力なり》ですね。真のフェミニズムを追い続けて地道に活動されている成果が多くの人々の生き方に花開いています。この雑誌を支えて下さっている皆様に敬意を表します。(東京都・世田谷区 粕谷晴江)

◆私は『あごろ』創刊号からの読者ですが、第237号の「あごろ読書室」を読んだ時、〈あごろ〉をやめようと思いました。それは思いとどまって、こ

の号に『女と男の時空——日本女性史再考』もち上げ号」と大書しました。藤原書店の藤原良雄氏を訴えた——

『花の乱』と称しています——私には、「いつになったら明けるのやら、『年季奉公』は」の一行以外は空虚にひびくのです。今や私が訴えの根拠とした労基法さえ風前の灯。その結果として『女と男の時空』のような分厚い本を誰が読むのでしょうか。

(東京都・保谷市 片岡陽子)

◆『あごろ』によって、男社会日本のようにすがよく見えてきます。今の私の苦しさも、そこから来ていることが多いのだと気づかされました。そのことに異議を唱えておられる女性たちのがんばりに勇気づけられています。

その社会の中で私は何をなすべきかを思う時、私の場合にはまず自分を知り、自分を取り戻すことから始めなければ

なりませんでした。

この数年、その作業を続けています  
が、生まれて半世紀、ひたすら自分を  
殺し、人の顔色を見て『女らしく』生  
きてきた私にとって、それは想像以上  
に大変な作業です。でも少しずつ楽に  
なり、楽しく生きられるようになって  
います。自分を大切にするという実感  
を持つて、初めて他を大切にするとい  
うことがわかってきました。

でも理解することの困難さも感じさ  
せられています。今、何も言わないこ  
との無責任さを痛感し、職場で家庭で、  
地域で発言していく勇氣を持つとうと  
思っています。

(岡山県・岡山市 北 昭子)

◆二十五周年おめでとうございます  
た。九七年に二十五年ですから、〈あご  
ら〉の発足は七二年。私は七五年夫が  
ハーバード大学院で学んでいたアメリ

カで〈あごら〉を知り、それ以来夫の  
勤務地の北京→東京→ニューヨーク→  
香港→東京と引つ越す先々へ『あごら』  
を送っていたきました。〈あごら〉へ  
のメッセージは「あごらよ！ 二十三  
年間私を支え私を見守ってくれてあり  
がとう！ 私に、意志・意識を持ち続  
ける力をありがとう！」と感謝の気持  
ちを述べたいと思います。

一つ小さな希望としては、過去を振  
り返るのは老いの兆しといわれるかも  
しれませんが、『あごら』の初版本から  
の特集を一挙に掲げた「ダイジェスト  
版」のようなものが一冊出てほしいと  
思います。あの頃のあの熱い思いにも  
う一度触れたい、もう一度ちょっと立  
ち戻ってみたい、なぜかそんな心境で  
す。これは兆しどころではなく、完全  
に老いの症状かもしれせん。でもま  
だまだ若いつもりです。六月末から再

び海外生活となりますが、これからも  
良き〈あごら〉のメンバーでありたい  
と思います。事務局、BOCの皆様の  
ご健勝・ご活躍を心よりお祈り致しま  
す。(東京都・世田谷区 北村三和子)

◆二十五年前……私は女性史を学びは  
じめた頃でした。『あごら』を知る由も  
なく、国際女性年もはるかかすんだ存  
在でした。メキシコ会議のようすや世  
界行動計画の全文を目にしたのは『あ  
ごら』のバックナンバーからでした。  
私にとって『あごら』は、資料情報誌  
として貴重なものだったのですが  
……。

世の中、ダイジェスト情報重視の昨  
今、『あごら』は、正確な資料の提供を  
続けてほしいものです。いつまでも女  
性たちの応援誌でありますように。

(新潟県・新潟市 倉元正子)

◆この国の死せる民主主義と国会に熱

きいのちと祈りを注ぎ、社会的弱者が、いつでも安心して生活でき、生きる希望と喜びをもてるようにしていきたい。(東京都・千代田区 栗原君子)

◆人権と環境、差別を問いつづける『あごら』の二十五周年、すごいことです。女たちの闘いのある場に、必ず『あごら』の眼があります。去る五月九日、海上基地建設に反対する沖縄の女たち一二〇人が銀座を練り歩き、トーク・パフォーマンスをしました。そこにもちゃんと『あごら』の斎藤さんの姿がありました。同封の写真は「基地はいらない」と嘉手納基地の第五ゲート前で行なった女たちの行動です(下段)。

軍隊の暴力性は、世界中でネットワークする女たちを目覚めさせましたね。平和の担い手『あごら』に期待しています。

◆二十五周年おめでとーございます。今後に期待しています。ご苦勞の多かった過去は「根っこを張る期間であった」。そう思います。



「生きててよかったね」と言える地球にしましょう。

BOC、編集部のみなさまのご健康を祈っています。

(千葉県・印旛郡 桑原ちる子)

◆俳句風に

あ あかときのご 劫火の園に  
らん 蘭麝香

行為の一節ひとふしに、アポリアが立ちあがる時代、(あごら)メイトの一人ひとりの香気に、力を得ています。

(福岡県・福岡市 河野信子)

◆二十五年の道のりは、どんな風景だったのでしょうか。有形・無形の財産が積み上がっていることと思います。

『あごら』とお付き合いを始めてまだ一年ちよつとの私ですが、この先の二十五年を共に歩んでいきたいなと思っています。女性が生きやすい社会をつ

くすることを念じつつ。

(東京都・府中市 小林育子)

◆政治に関心のある人や、わかっている人だけが読むんじゃないで、そうでもない人がふと読んでしまう……という本にならないかな……。良い本なのにイ。(東京都・杉並区 小林カツ代)

◆国連「女性の十年」に先立って、女性問題の情報を提供し続けた活動、「女性の十年」以降もつねに最も重要な情報をありがとう。各地の〈あごろ〉のみなさんが地域で掘っている活動も貴重です。(東京都・渋谷区 駒野陽子)

◆〈あごろ〉二十五周年心よりお喜び申し上げます。振り返ると二十周年にメッセージを寄稿してから早いもので五年の月日が流れ、ずいぶん〈あごろ〉にはお世話になっております。〈あごろ〉と共にあることを感謝致します。

これから先もすべての機能を越えた

女性の社会参加を切望します。

(山口県・佐波郡 齋藤貞子)

◆戦後男女平等が説かれ、その後ウーマンリブが上陸したが、定着せず。フェミニズム運動が取って代わり、いまはジェンダー問題、男女共同参画ということが言われている。

『あごろ』誕生の頃に比べると、娘が社会に出ようとしている今の時代は、女性の、学ぶ分野も、職種も、広がり、参加するスポーツの種類もふえた。肩ひじ張らずにのびのびとしなやかにやりたいことをやっているように見える。しかし結婚、出産、育児をするようになり、年を重ねるにしたがって、彼女らの生活は、今の状態が改善されない限りいろんな面で厳しくなることが目に見えている。そうならないように考え、変革していかねければならないのだが、その前に、非婚、少子化が

進んでしまっている。

世界全体の平等を考えると、問題はどこから手をつけたらいいのかと思うほどだ。こういったことを北京会議で痛感した女性は多く、意識も活動も高まったといわれる。とはいっても、一般の意識はまだまだだ。特に若い女性は、目の前の物質文化の表面的な豊かさだけに惑わされて日々を過ごしているのではなからうか。

一方、平和問題は？ 湾岸戦争も、ペルーの人質事件も、武力で終わった。そして未だ止まぬ核実験。平和なんか求めても無駄なんじゃない？

無力感におそわれ、諦めて、忙しくも安逸な日常に逃げ込もうとする大勢の人がいる。私がいる。ちよつと美味しいもの、ちよつと面白そうなテレビ、ちよつときれいな洋服、ちよつとお金に入るアルバイト。ま、いいか、こん

なところだ。

しかし決して諦めず、しぶとく世界平和、すべての人の平等を考え、問い続けてきた人がいる。冊子がある。斎藤千代さんと『あごろ』。そして共に頑張ってこられた方々。またなんとかやって来たよ、とばかり配達される『あごろ』を手にするたびに、私は襟を直し、人間の心を取り戻し、私の価値基準を高めてきた。

『あごろ』を支えて来た大勢の会員。その末席で、私もちつともきれいでもなく、ちつとも面白いキャラクターでもない、ただくそまじめなだけの『あごろ』ちゃんをその誕生からながめてきたのだ。

その結果、何をした、でもないのがお恥ずかしいが、諦めないで、できることからやっていかなければ。

ところで、社会運動家でもない、子

育て中の主婦や働く女性が、多忙な日常の中で、平和、平等のためにできることって何？ 読者のあなたがしていらっしやることは何？ いくつか教えて！ 蛇足／端っこの方で世界平和と平等な人権に結びついてくれたらいいなと願いつつ、私心がけていること——

- ・ 自分の子や教え子を、性差でなく、個性差を見て育てる。
- ・ 息子に家事能力、娘に経済力をつける。

- ・ 女性議員に投票する。
- ・ 政治家、マスコミに意見を出す。
- ・ 英語の生徒の教材に、平和、平等などのテーマを選び、問題意識を持つてもらう。

- ・ ホームステイを提供したり、日本語を教えたり、通訳などして、国際交流を図る。

- ・ 女性の集まりで、こういう話題で話

し合う。etc.

以上、本当に初歩的で簡単なことばかり。もつとどかんと大きなことができたらしいのだが、『あごろ』を堅苦しいと敬遠する方たちにこんな読者も存在することを知ってもらい、仲間に加わっていただきたい。

(東京都・港区 斉藤美栄子)

◆『あごろ』二十五周年おめでとうございます。最近の『あごろ』は問題意識もはっきりしていて、元気で、呼びかける力があると感じています。地方の編集は、なんと素敵なアイディアでしよう。いつもは知ることでできない方々の力の入った文を読んでみると、いつの日か全国の女性が、フェイス・トゥ・フェイスで手をつなげる日が来る、と信じてことができます。

(茨城県・水戸市 酒井はるみ)

◆二十五年間に、どれほど数多くの女

性が『あごろ』をスタート台にして飛び発ったことでしょう。そして、『あごろ』に支えられたことでしょう。欲を言うならば「笑い」が欲しいですね。

（千葉県・柏市 佐藤典子）

◆「継続は力なり」と申します。さらなる継続と発展をめざして女性と平和のためにがんばりましょう。大阪も協力いたします。（大阪府・大阪市 澤田和子）

◆『あごろ』創刊の年、高校三年生だった私は『おんなの歴史』（もろさわようこ著）を読んで、日本史のレポートを書いていた。女性が生きていくにはなんとなくオカシイ世の中だと感じていたころ。一九七五年の国際女性年も遠いできごとだった。

二十年を経た九五年、〈あごろ〉のメンバーと共に北京女性会議へと出発。女性がかかえる問題を肌で感じとるようになった。大きく関わっている

のは〈あごろ〉と〈あごろ〉をネットワークにした人との出会い。おんなたち一人ひとりの問題に、これから気がつくだけかのために、そしてすでに気がついてしまった、あなたや私のために存在するのが〈あごろ〉なのです。

（愛知県・名古屋市中村区 渡辺典子）

◆二十五年は長いようで一瞬。編集のご苦労、特に地道な資料と情報を掘り下げることに感謝しつつ、次の「一瞬」を共に探っていきましょう。いっそうアダルトになれるネットワークに、しっかり「反骨」を育てながら。

（東京都・葛飾区 しま・ようこ）

◆これからの特集など、希望として

……

ふだんフルタイムワーカーとして働いておりますので、フェミニズムについて勉強できません。フェミニズムの歴史など、〈あごろウイン〉の女性学研究

究会の資料となるものが特集されると良いです。

（愛知県・名古屋市中村区 下村美恵子）

◆二十五周年おめでとうございしました。『あごろ』の果たしてきた役割は、たいへん大きなものだったと思います。女性の状況は激変しましたけれど、すべてがよいことばかりではありません。

今、一番望むこと。「女性が、もっと広い心を持つこと」。

（東京都・文京区 下村満子）

◆『あごろ』はほんとうにユニークな雑誌です。チョコチョコしないで、ドーンと大きく構えて堂々としているところがとてもいい。

ますます前進を。

（京都府・向日市 壽岳章子）

◆『あごろ』二十五周年おめでとうございます。九六年、詩画集『ほおずきの詩』出版の折、出版部の皆様には

大変お世話になりました。『あごろ』にも何度も掲載していただきありがとうございます。ございました。

「夢」をかたちにできましたこと、輝いている人たちとの尊い出会いがあり、学びをたくさんいただだけ、幸せでした。

『あごろ』のご発展と皆様のご活躍をお祈りしております。

(岐阜県・可児市 白鳥美津子)

◆『あごろ』創刊号からの四半世紀、気軽に「二十五周年おめでとう」などと言ってしまったいいものか、この重い二十五年に、とまどいを感じてしまふ。女性たちを取りまく厳しい状況に、その改革、改善を求め、女性たちには、自立への覚醒を、そして世界へは、平和を求め続けた確とした存在がなかったら、今の『あごろ』はありえない。財政危機と人的危機は幾度もあつ

た。いかなる企業、政党、宗教からも距離を置き、広告費でまかなわない、しかも購読会員は千人に満たず。毎月、二十五年間もどう経費をまかない得たのか。『あごろ』存続は、創始者の斎藤千代さんの熱意とそれを支えた女性たちの熱い想いに負うのみである。

『あごろ』に出会い、生き方の姿勢を確かなものにし、地域社会で活動している女性たちはたくさんいます。女性の人生を変えてしまった情報誌『あごろ』。これが本当のジャーナリズムというものでしょう。

これをどう次の世代へ引き渡していくか、これが私たちの21世紀への課題です。

(愛知県・名古屋市長 高橋ますみ)

◆二十五周年おめでとうございます。この葉書がフイリピンに転送され、

届いたのが五月二十二日なので、遅れますが、五月二十四日東京に行く友人にこの葉書を託します。

実はこの地で、松井やよりさんの講演会があつて出席し、参加者名簿の所属の欄に『あごろ札幌』と書いたところ、二十数年前BOCで職員をされていた旧姓「長谷川知子さん」より声をかけられました。もうどこかですれ違つても、わからなかったと思います。新宿の『あごろ』に週一回の割合で通つていたころ、知子さんは子どもさんの保育園のお迎えで急いで帰らなければならず、『あごろ』に着いた私とほんの一瞬会うだけでほとんどお話ししいお話もしていいのです。それなのに『あごろ』という名前だけで、また出会えるのですから、やっぱり『あごろ』ってすごい!』と思いました。

知子さんと出会えたおかげで、私の



フィリピン滞在の残り一か月半は実り多いものになりそうです。

(フィリピンにて・札幌市 高橋芳恵)

◆『あごろ』二十五周年、おめでとうございます。

十年前、オリーフ繁るギリシャの『あごろ』を私は歩いてきました。五年前、〈あごろ〉会員となり、『戦時下少女達の勤労働員の記録』の原稿を携え、街路樹のエンジュを数えながら『あごろ』編集部を訪れた日、ベンガラ色の「あごろ」の三文字の看板が幡のようにくつきりと印象的でした。

「白い花が咲き、秋には算盤の珠のように長い実のなる窓辺がとても楽しみなのですよ」。そして千代さんは、さりげなく女高師時代「のみ・しらみの駆除にフオスゲンを浴びせられてふらふらになり倒れてしまいました」「東京大空襲の日、被災者に炊き出しのおにぎ

りを夢中で作り、翌日気がついたら、手の皮がすつぽり剥けていました」等、忌まわしい戦争体験を語られました。志強く点された『あごろ』の灯よ、永遠なれ、民衆を率いる自由の女神の旗のように『あごろ』三文字の幡よ、力強く逆風にもはためきあれ。

(東京都・府中市 滝島典子)

◆「組犯法」「周辺事態法案」「労働基準法改悪」という時代の逆風の中で、どうやって権力とケンカしていくか、それが課題だと思います。

そして今、私はバイト先と筒井修さんをはじめとする福岡地区合同労組の助けをかりて団交をやっています。改めて会社の人事担当といっても労働三法をホント、知らないんだと思いました。(福岡県・前原市 谷 和美)

◆現在自分の住んでいる地域で都市計画道路をきっかけにしてまちづくり、

道づくりをみんなで考えましようと呼びかけて、市民が主体的に学習し行動しようという活動をしています。住民のエゴや行政の厚い壁、仲間とのコミュニケーションなどつまずきそうになると、二十年以上も前にK市の公民館でお話を聴いた斎藤千代さんの毅然としたお姿を思い浮かべます。今の私の原点ともいえます。

二十五周年おめでとうございます。

(千葉県・千葉市 田畑みどり)

◆『あごろ』二十五周年おめでとうございます。思えば一九六〇年、東京・世田谷・芦花公園の自治会運動と区立保育園設立運動に始まった斎藤千代さんの思いが〈BOC〉創立、そして『あごろ』へと、一粒の滴がせせらぎとなり、河となり、今や大海となつて世界に満ち満ちて行くさまを拝見し、感無量です。

〈あごろ〉の歴史と共に歩まれた会員の皆様方のご努力に心より敬意と拍手を贈らせていただきます。

（東京都・三鷹市 近石綏子）

◆創立二十五周年おめでとうございます。

婦人年、均等法、平和、年金等、タイムリーな企画で、内容、考え方、問題点、資料が適切で、ありがたい情報誌です。皆様に感謝しています。これからも女性、子どもが、いきいきと暮らせる社会へのしもべ？としての『あごろ』をお守り下さい。

（岩手県・花巻市 千田かおる）

◆二十五周年おめでとうございます。地味ながら確かな足取りに敬服します。

若い世代とコミュニケーションしにくい面はあると考えます（誌面が硬い、ということで）。ファッションと料理と家

庭問題（健康問題も含めて）に限定すれば、ここでのアプローチによつては、若い世代へ切り込める誌面になると考えます。特に女性の自立面から、輝いている女性たちのインタビュー記事を増やしてほしい、元氣が出る、と考えます。国内に限らずに海外記事も、欲をいえば落ち込んだ時のハウツー記事（セクシュアルハラスメントなどの対策）もほしいです。

（大阪府・大阪市 土屋隆司・千津子）

◆私の原点でもある『あごろ』。二十年ほど前に初めて本屋で手にとつて読んだ時の感激は未だに心に残っています。家庭役割と仕事の両立に悩んでいた当時の私を支えてくれたのが『あごろ』でした。

（東京都・三鷹市 寺沢恵美子）

◆二十五周年記念おめでとうございます。ずうつと以前、『あごろ』編集室で

「自立の心理学」の話し合いに参加したことが懐かしく思い出されます。私が女性問題にかかわるスタートとなった『あごろ』。今後もたくさんの方々に元氣を与えて下さい。

（東京都・立川市 寺田芳子）

◆〈あごろ〉のみなさん、こんにちは！毎号届けて下さる誌上でいろいろな方たちとお目にかかり、しばし歓談している気持ちになったり、自分の意見・考えを思いついたりして『あごろ』を楽しんでおります。毎号をまとめているらっしゃるご苦労に頭が下がります。

さて私は、『歌の宅急便』を開業（？）して、現在あちらこちらから「声」をかけていただき、『童謡、唱歌を歌い継いで行く』という目標をもち、草の根の童謡運動を広げています。日本の伝統文化である童謡・教科書から姿を消して行く愛唱歌の数々を中・高年または

高齢者の方々にお送りしています。歌うことは心の開放になり、心が洗われた思い、生きる力が出てきましたと、ご好評をいただいています。いろいろな歌をお届けし、最後に会場のみなさんと十曲余のなつかしい歌、心にのこる歌を心いっぱい声いっぱい歌いあっています。何かを求めている中高年世代、高齢者のみなさん、カラオケでは満足できない！それがなんであるかということをお私たちの宅配コンサートで実体験して下さい、温かい言葉をいただき、私の幸せも増しております。

伴奏のピアノ担当・水谷美穂とコンビを組み、楽器を持参、どこでもどんなかたちでもコンサートをお届けします。もちろん歌を通して女性の生き方、社会の問題、教育のこと、諸々のことを私なりの考えで、心いっぱい伝えさせてもらっています。Sing and

Talk (イベントや「集い」・ホーム・コンサートなどにご利用下さい)、もし関心を寄せて下さったTELを下さい！(写真などもありますので、希望して下さいはお送りします)私も、どっこいまだまだ生きて行きます。みなさんもお元気で！

(愛知県・名古屋市 戸田順子)

◆〈あごろ〉は私の宝物。何をしても自信のない私をやさしく強く励ましていただき、ありがとうございます。斎藤様を中心に一致団結して弱い者の味方をされる皆様方を心から尊敬しております。実力のない私には直接活動はできませんが、陰ながら皆様方のご多幸ご活躍をお祈り申し上げます。

「金剛石も磨かずば」の二番

水は器にしたがいてその様々になりぬなり

人も交る友によりよきに悪しきにう

つるなり

己に勝るよき友を選び求めて諸共に心の駒にむうちうて学びの道に進めかし

よい友を得た幸をしみじみと感じます。(広島県・竹原市 中谷明子)

◆二十五周年おめでとうございます。

読者として二十三年。そして一時職員としてかわった〈あごろ〉は私の人生の幸運のひとつでした。その証拠に私の友人リストの半分は〈あごろ〉の繋がりにからという事実が示しています。

『あごろ』発行の危機が言われることと幾度か。私の在職中も、みんなが自発的に賃金カットしたりで「もうダメか」と思われていた頃でした。夫の転勤で辞められたのをホッとしたものでした。しかしあれから十五年続いています。斎藤さんはじめ関係者の尽力には、ただただ頭が下がります。どこにそ

の力があるのか不思議です。驚異です。

(京都府・京都市 中山紀代子)

◆初めての子育てに戸惑い、リブと名乗っていた女たちと出会い、その勢いで第一回国際婦人年メキシコNGO会議に参加したのが1975年です。壇上では女性たちの逞しき演説が入り乱れています。突如英語で切々と語り始めた日本人女性がいるではありませんか。彼女の正体は定かではなく会場はざわめきます。この人とは付かず離れず長い付き合いになるなあとなぜか「悪い」予感が胸を掠めたものの、私は戒厳令下のグアテマラ行きのバスに乗り込みました。

次に彼女に出会ったのは、日本の首都東京の一部交通労働者のスト決行で遅刻するおまけも付いた、メキシコNGO会議のための『あごろ』誌の座談会です。記録性に裏打ちされた『あこ

ら』の背骨の魅力が予感を現実に変えた瞬間でした。

そしてこのごろ。思い出した頃、書き慣れた文字で「あごろ斎藤千代」と気恥ずかしそうに署名された用件が、今どきの電気製品のFAXからカタツカタツと音を立てて流れてきます。

(神奈川県・横浜市 新美みつ子)

◆女が何かをしようとする時、関係ない人までが何だかんだと評価・評論を加えるという世の中の「マイナス引力」は二十五年前も今もほとんど変わっていません。『あごろ』には、これからも、その時々トピックについて論じていつてほしいと思います。

(神奈川県・横浜市 新見麗子)

◆『あごろ』は、私の「女性問題」の情報源です。単なる資料ではなく、問題を的確に指摘してくださる先生でもあります。(といって、けっして一方的

でなく)また、読み物的な記事もあり、いつも楽しく読んでいます。毎号出ていく努力はたいへんなことと思いますが、それをやりとげている方々に心よりお礼を申し上げます。

(東京都・清瀬市 野々村恵子)

◆出会えてよかった『あごろ』。私と波長が合って、先行する方たちにいつも励まされています。

マスメディアの伝え得ない真実は貴重です。どこでも入手できればさらにひろがりができると思いますが、やはり会員増を目指すよりないでしょうか。『あごろ』という女のひろば四分の一世紀の歩みに讀!

(京都府・京都市 服部 素)

◆二十五年前、大学に入ったばかりの頃、どこかの集会(たぶん「行動する女たちの会」だったのでは……)で『あごろ』創刊号を見つけて買いました。

女性初の高裁長官に就任された野田愛子さんのインタビュー記事と並んで、女性判事の永石泰子さんが女性への定年差別を違法とした判決を書いたことが報じられていました。その頃も含めて、女性法律家に関するこのような記事はたいへん少なかったので、法学部の学生として、とても励まされました。

最近の『あごろ』の特集記事の中には、必ずしも共感できないもの、自分とは考えを異にするものも見かけますが、日本社会全体が向かうべき指針を失っている今のような時代にこそ、『あごろ』には山椒のように小粒でもピリリと辛い存在であってほしいと思います。 (東京都・練馬区 林 陽子)

◆二十五周年おめでとうございます。毎回、世情にあった真摯な情報を提供して下さることに頭が下がるとともに、感謝の心いっぱいです。さまざま

な情報の中、唯一安全、安心なものとして心地よく読ませていただいています。北京会議で多くのことを学べたと、〈あごろ〉の斎藤千代さんはじめスタッフの方々に深く感謝申し上げます。これからもよろしくお願い致します。 (香川県・丸亀市 日高幸子)

◆二十五周年記念のメッセーじに、何を書こうかと悩んでいたちょうどその時、『あごろ／239号』が届きました。そのなかの斎藤千代さんの「起業して、いつのまにか四十年近くに」を熟読して、心に滲みる共感を覚ええました。

創造力ゆたかな〈あごろ〉会員のみなさんが、刻々とつくり出された1号から239号までの雑誌『あごろ』は、私にとって実に貴重な日本の女の歴史の宝庫です。そして、この『あごろ』を支えてこられた四十年近いBOCの先進的な実践と、その実践のなから

生まれた千代さんの確信に、おおいにはげまされています。前進あるのみです。 (埼玉県・所沢市 広田寿子)

◆一九八〇年コペンハーゲンの世界会議NGOフォーラムに初めて参加したときはその感動が活動の原動力となり、その後の五年間頑張りました。

一九八五年ナイロビのアパートで自炊しながら、〈あごろ〉のみんなとフォーラムに通った日々の楽しさを胸に、その後の十年を仕事にあげられました。

一九九五年北京会議にも出かけましたが、フェミニズムへの熱い思いがよみがえって、張り切れたのはわずか数か月。だんだん効率の悪いくたびれた人間になっていくような気がします。でも、ガンを病む夫をささえながらのこのおだやかな生活もそれなりに満たされていて、おかしなものです。

(愛知県・刈谷市 古野佐喜子)

◆二十五周年おめでとうございます。

戦争体験文集『十四歳の戦争』の出版をお願いしたのを契機に〈あごろ〉会員となって八年、冊子の数もだいぶ増えました。現在では、女性問題に関わる情報源として貴重な存在となっております。

今後若い人たちのために、全国各地にある財団法人女性センターのネットワーク作りをし、幅広い女性問題の学習機会を提供してくれる場の紹介冊子や、全国の学校教育のためにジェンダー教育のテキストの発行 e t c (若人向けのやさしい冊子) などいかがでしょう。

ますますのご発展をお祈りします。

(千葉県・流山市 堀内政子)

◆〈あごろ〉の二十五周年おめでとうございます。さまざまな困難にぶつかってもくじけず乗り越えて来られま

したことに敬意を表します。

正直に申しまして、いくつもの講読誌がありますが、応援しとげる意味で継続しています。「母を語る」も、壽岳章子さんは面白く拝見していました。

(東京都・豊島区 前島郁子)

◆「口コミ」が支え、全国の志ある人々に支えられ、消えそうな時もあったようですが、継続の二十五年は重いものです。

鳥取県立図書館に『あごろ』誌を見つけました。リクエストし続けても、「雑誌は多くて……」と断られ、寄贈したりもして——。二十五周年を祝うかのように、この地の県立図書館にもやつと『あごろ』誌が並んでいます。

(鳥取県・鳥取市 前田享子)

◆〈あごろ〉は青春まつさかりの二十五歳ですね。〈あごろ〉は私の〈あごろ〉、女の〈あごろ〉、みんなの〈あごろ〉。

愛しています!!

ここにはフェミニズムの先端があります。戦後の日本に生まれた良質な文化があります。私たちの育ててきた〈あごろ〉を、もつともつと多くのひとに知らせたい。

(東京都・中央区 増田れい子)

◆〈あごろ〉満二十五年のあゆみ、真におめでとうございます。

一度きりの人生を健やかに、大切に生き、のびやかな思いやりのある社会となりますよう、これからのますますのご発展を心からお祈り申し上げます。(東京都・杉並区 榎山幸子)

◆〈あごろ〉の二十五年は、日本の女性現代史を流れるバックボーンと思います。世界の女性史も、大きなうねりとなって、日本の女性を刺激しましたが、国内の機が熟していたのも事実であり、好機でした。

「あこら」に育てられた人たちが、花をつけ、実をつけた時、真の平和と、女と男の平等も実現すると信じます。人類の歴史の中では、点にすぎないこの時期に「あこら」と同時代を生きたことを感謝し、さらなる活躍を祈ります。

「あこら」に育てられて、私はちよつとはマシな人間に成長したようです。

開き直ったモノ言いですが、以前にもまして、私の人生での主人公はこの私なのだから、「生きててよかった」と喜べる時間と場面を、たくさんもちたいと思います。「あこら」から得た私の教訓です。謝々。

(福岡県・福岡市 森崎民子)

◆どんな組織でも、継続しつつ変革して行くことが必要とされるものと、期待しております。

(東京都・豊島区 八木江里)

◆女性の時代といわれて久しいことで

すが、その起点に、この四半世紀つねに問題提起をしてきた『あこら』の力は大きかったと思っています。

(神奈川県・横浜市 山口美代子)

◆学生時代に少し読んだことのある『あこら』と、PKO法反対運動の中で再び出会って読者になりました。その間、私の職業も、会社員から、市議会議員に変わりましたが、『あこら』の間口の広さ、あたたかい語り口にひかれて読んでいます。今後、このゆきづまった日本社会の底の経済の問題にももっとメスを入れ、人権や福祉とのつながりをあきらかにしていっていただきたいと思っています。

私も自分の持ち場でがんばります。

(東京都・武蔵野市 山本ひとみ)

◆二十五周年おめでとうございます。

七年前に、ウイン女性企画と出会い、

『あこら』を知り、北京女性会議では、

たいへんお世話になりました。女性のつながり、連帯感、ネットワーク、そしてパワーを学ばせてもらいました。

現在私は、要介護の義母のために自宅に宅老所を作り、多くのボランティアと運営しています。かかえている問題は多々ありますが、継続は力なりと『あこら』を見習っています。

(愛知県・名古屋市中 吉川富士子)

◆「あこら例会」をあらで出会った友達と二か月ごとに(メンバー四人で)吹田市勤労者会館で続けています。自分たちの生活を基本に話し合い、お互いを精神的にささえあえる本音を語る「場」になっていますが、メンバーはこのままで、これ以上に上げたくない気持ちも少しあります。「あこら仲良し」に名を変更したほうが適当か……と思うこの頃です。ごめんなさい！

(大阪府・吹田市 吉田悠子)

## 統一地方選で女性議員数、一挙二・四倍に

男性論理の国会が日本を危うくしているとの声が大きくなるなか、「改革は、まず地方から」と、今年の統一地方選には女性の立候補者が大幅に増加。その当選率も高く、合計二、三八一人、前回の一・四倍に達し、前半の道府県議選、政令指定都市議選、後半の市議・区議選、町村議選のすべてで女性当選者は過去最高を記録した。また首長選では東京都に初めての女性市長（国立市長・上原公子<sup>ひょうこ</sup>さん）が当選、「女性の時代」を感じさせた。

とくに「女性県議ゼロ県をゼロにしよう」の声のもと、大キャンペーンを行なった十の県議選では、すべてに女性県議が誕生。戦後、全議席を男性が独占し続けていた愛媛県では、一挙に三人の女性議員が生まれたが、その反面、山形・福井・広島の三県が、新たに「女性県議ゼロ県」になった。

女性地方議員の定数に対する比率は七・〇%となり、前回の四・五%を大きく上回ったが、国会議員の中の女性の比率八・九%（衆議院四・八%、参議院一七・一%）に比べると、まだ低い。ただし今回の選挙では女性の当選率は高く、特別区議は八四・三%、町村議は八三・四%、一般市議八一・九%、政令市議六九・二%、道府県議四二・一%に達した。女性蔑視の格別厳しい地方で、女性がこれだけ支持されたのは、大きな変化というべきだろう。

しかし、党派別にみると、社民党が激減、自民党も微減したなかで、共産党が激増。党勢の伸びの中で、女性議員も伸びたことが、女性議員数の増加と結びついたとも言える。ちなみに全女性議員の三割は共産党が占めている。

## 〈あごらメイト〉は、八五%が当選

248号で紹介した「統一地方選に立つ〈あごらメイト〉」十三名のうち、初挑戦の東京都江東区の田中やす子さ



ん、山梨県都留市の清水絹代さんのお二人が善戦して敗れたほかは、ほとんど上位で当選された。二人を立てて心配された岡山も、二人とも当選。各地域とも女性候補者の市民運動における長い活動と成果、議員になってからの群を抜いた活躍が評価されたのは、うれしいことだった。

清水さんの体験談は、127ページに掲載されているが、田中さんも、戦うことで大きなアピールをなさった。もっと早くからPRして、成功させたかったと、力不足を申し訳なく思っている。これから統一地方選でなく選挙に臨まれる方、お早めに事務局にご連絡を。

## 男女基本法成立は確実

超党派の支持を受けて討議されていた男女共同参画社会基本法案は、5月21日参議院総務委員会で、女性団体や各党女性部の意向を受けて、下記の修正案を可決、この修正案で、今国会中に成立の見通しになった。

各地で「基本法さへ通れば、もう大丈夫」との声が上がっているが、248号に示された危惧は解消していない。法律がいったん制定されると、その改正には非常なエネルギー

ギーが必要になるが、引き続き修正の運動を重ねたい。

また各地方議会では、この基本法を基に、都道府県市町村レベルの行動計画の策定がすすめられているが、各地域の基本法や行動計画は、国の基本法を上回るものであつてほしい。「私たちは何を望むのか」——家庭から、地域からの声を積み上げてこそ、基本法は私たちの力になるだろう。

### 〈男女共同参画社会基本法案に対する修正案〉

男女共同参画社会基本法案の一部を次のように修正する。目次中「第一章 総則（第一条―第十二条）」を、

「前文 第一章 総則（第一条―第十二条）」に改める。

目次の次に前文として次のように加える。

我が国においては、日本国憲法に個人の尊重と法の下の平等がうたわれ、男女平等の実現に向けた様々な取組が、国際社会における取組とも連動しつつ、着実に進められてきたが、なお一層の努力が必要とされている。

一方、少子高齢化の進展、国内経済活動の成熟化等我が国の社会経済情勢の急速な変化に対応していく上で、男女が、互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮する

ことができる男女共同参画社会の実現は、緊要な課題となつてゐる。

このような状況にかんがみ、男女共同参画社会の実現を二十一世紀の我が国社会を決定する最重要課題と位置付け、社会のあらゆる分野において、男女共同参画社会の形成の促進に関する施策の推進を図つていくことが重要である。

ここに、男女共同参画社会の形成についての基本理念を明らかにしてその方向を示し、将来に向かつて国、地方公共団体及び国民の男女共同参画社会の形成に関する取組を総合的かつ計画的に推進するため、この法律を制定する。

## 児童買春禁止法、ついに成立

一九五八年に施行された売春防止法の欠陥は早くから指摘されながら、いまだに改定されていない。その間、日本男性の目に余るセックス・ツアーは、アジアはじめ各国の<sup>ひんしゅく</sup>響感を買い、国連でも問題になつたが、その結果、ようやく念願の児童買春禁止法（児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律）が、5月18日

衆議院本会議で可決・成立した。この法では十八歳未満の児童を相手とした買春や、児童を被写体としたポルノの販売などを、国外犯を含めて処罰の対象とする。買春は三年以下の懲役か百万円以下の罰金、ポルノ製造・販売・輸入は三年以下の懲役か三百万円以下の罰金、児童買春を目的とした人身売買罪には一年以上十年以下の懲役に処せられる。

売春防止法の穴を埋めるものとしてはまだ不十分な面も多いが、海外での買春まで罰せられることになったのは大きな成果。ここまで努力された女性議員（特に参議院）に心から感謝したい。

## 新ガイドライン関連法案に反対する意見広告運動

5月24日、ついに成立してしまつた新ガイドライン法案だが、平和を求める市民たちの運動は、日本各地でさまざまな形で最後まで行なわれた。

5月22日東京新聞夕刊に、「私たちは新ガイドライン関連法案に反対します」という意見広告が掲載された。意見広告は〈新ガイドライン関連法案に反対する市民の会〉が呼

び掛け、千五百人以上の市民の賛同によって実現した。神奈川県の下直子さんから、報告を寄せていただいた。

\*

元中学校教員であつた古屋珠子さんは、新ガイドライン関連法案が衆議院を通過したことに愕然とした。「教え子を戦場に送るな」と言い続けてきたことは何だったのか。日本が再び戦禍の悲慘を引き起こさず、子どもたちに平和な未来を約束しようと、長年家永裁判運動を支援してきたのは何だったのか。かつての教え子に何と言つたらいいのだろうか、居たたまれない思いに駆られた。

4月21日、東京新聞夕刊に井上ひさしさんたちがこの法案の廃止を求める意見広告を出されたのを見て、古屋さんは一市民である自分たちもこうした意思表示をしたいと考え、友人や家永裁判運動の仲間たちに相談、神奈川の反基地運動をしている人びとも参加して、神奈川・東京でたちまち六十五人の呼び掛け人が集まった。そして〈新ガイドライン関連法案に反対する市民の会〉をつくつた。

呼び掛け人から呼び掛けられた人、さらに呼び掛けられた人と、こぼれた水が床に広がるように、運動は息も継がせぬ勢いで広がった。いろいろな場面で多くの方々のご援

助をいただいたが、新ガイドライン関連法案反対等の平和運動をしていた方々はもちろん、戦争への道を突き進む日本 の状況に怒りや不安を感じながら、それを表現する手だてを持たなかったり、行動したくてもできない状況にあつたりするたくさん の市民が喜んで賛同し、次々と広めてくださつたことが、何より大きな力となつた。

おかげで、連休を含む二週間という短時間で、意見広告に氏名を掲載される方千四百十三名、その他運動にご寄付くださった方百三十二名（5月20日現在）となつた。

賛同は東京・神奈川・千葉・埼玉を中心に、沖縄から北海道にいたるまで、さまざまな地域から寄せられている。

始めたときは、これほど多くの方々がこの運動に参加してくださるとは、予想もできないことであつた。どれほど皆様が平和への熱い思いを持ち、戦争協力法案に激しい怒りを持つておられるかを実感した日々であつた。このことを東京新聞の読者だけでなく、政治家をはじめ、広く社会に知らせなければならぬと感じている。そして、私たちの呼び掛けに応えてともに運動をし、意思表示してくださつた千五百五十名に近い皆様、いくら感謝しても足りないと思います。

（5月21日 記）



## 歴史は誰のものか

〈歴史の事実を視つめる会〉主催で毎年4月29日に開かれていたこの集会。今年は元日本軍細菌部隊所属の松本博さん、特殊部隊で三光作戦に参加した永富博道さんの証言を中心に、シニアワーク東京（飯田橋）で行なわれた。

松本さんは今年七十三歳、十七歳のときに志願して中国にわたり、南京中央大学病院に拠点構えていた中支那防疫給水部（七三一部隊の姉妹部隊）に入った。衛生関係の仕事と思っていたら、何と配属されたのは極秘の「人体実験」の部屋。そこでは中国人が「マルタ」と呼ばれ、ペスト菌等の細菌実験の犠牲となっていた。松本さんは監視役だったが、全身の血を抜かれた中国人の「処置」にも立ち合ったことがある。「マルタにされた中国人から『日本鬼子！』と背中に怒鳴られ、夜眠れずに脂汗をかいた」という証言は鬼気迫るものだった。

永富さんは八十三歳、右翼学生組織の代表として中国に行き、軍の諜報部だった特殊部隊の一員となって軍の「慰安所」設置にも関わったことがあるという。病を押して参加した永富さんは、車いすに座ったままで、「日本をアメリカに売ってはいけません」と絞り出すように語った。

なお、途中参加した元セレベス民政部のタイピスト、小林ミツさんも「軍による慰安婦募集や慰安所新設」の文を打ったことがあると証言し、軍の慰安所関与を裏付けた。

第二部では、元フェリス女学院大学学長の弓削達さんが「日の丸・君が代とアジアの民衆」と題して、侵略のシンボルとしての日の丸・君が代の法制化の危険性を警告。出版労連の俵義文さんは、藤岡信勝東大教授をはじめとする〈新しい歴史教科書をつくる会〉が全国支部を精力的に作りながら、歴史教科書のパイロット版『国民の歴史』を今秋発行して国民への浸透を図ろうとしている動きを報告した。

『あごら』でクマラスワミ報告を連載中の東京造形大学の前田朗さんは、四月の国連人権委員会第五五会期でのクマラスワミ報告書の内容と、「慰安婦」問題について四本の発言があったことを中心に報告した。

## ’99私と憲法のひろば

今、憲法が危ない！ 新ガイドライン関連法案で九条が骨抜きにされ、改憲を狙う〈憲法調査会〉の設立が国会内で画策されている今、憲法改悪を食い止める勢力の結束はますます重要になってきている。

5月3日憲法記念日に毎年開かれている「私と憲法のひろば」は、今年は〈21世紀につなぐ憲法50周年運動〉〈憲法を生かす会〉〈婦人民主クラブ〉など六団体の主催で両国・江戸東京博物館で行なわれた。

第一部では、主催団体を中心に何人かの発言があったが、特に所沢高校OG・川野まなさんの「みんなで作った学校行事が、日の丸・君が代、問題で崩されるなんて怖い。社会の中でおかしいと思ったことをそのままきちんと言えることが大事」という発言は実感がこもっていた。

「沖縄・安保・そして憲法」という題で講演した新崎盛暉沖縄大学教授は、新ガイドライン法案が衆議院を通過した直後にサミット開催地が沖縄に決まったことを例にあげ、「これは沖縄差別の裏返しである。基地反対の世論を崩

すためにサミットを利用している」と指摘。一方、沖縄ではサミットに対する反対運動はまだ出てこないが、名護から「サミットで各国首脳が来るのなら、そこに民衆のサミットをぶつけよう」という提案が出ているという。また、本土では新ガイドライン法案への賛成が六割を超えた（共同通信調査）ことにふれ、「国会が改憲を決議してからでは遅い」と警告。ちなみに沖縄では新ガイドライン法案反対の割合が本土の二倍（沖縄タイムス調査）だそうである。

第二部では〈許すな！憲法改悪、市民連絡会〉発足の集いが行なわれ、憲法調査会発足を阻止するための署名運動、FAX通信による市民ネットワークの強化などが提案された。その場で、主催者団体の高田健さんから、今日の集会の直前に、何と会場の外に右翼の街頭宣伝車がおしかけるという事態が発生したことが報告された。これはかつてなかったことで、集会の妨害は何とか食い止めたものの、会場側は今後の貸し出しに難色を示したという。政治団体ではない市民の手による集会が右翼の妨害を受けたことに、主催者側はショックを隠せないようだった。事態はそこまで進んでいる。今は本当に危ない時期なのだということを、もっと一般に広めなければと切実に思う。（れ）

## 基地のない沖縄を——七千人が総決起集会

復帰二十七周年を迎えた5月15日午後、宜野湾市の海浜公園で「平和とくらしを守る県民総決起大会」が〈沖縄平和運動センター〉主催で開かれた。5月13日から県内三コース（那覇・浦添・名護）を歩いてきた平和行進団も合流し、大会参加者は約七千人。

大会では、新ガイドライン関連法案の廃案を求める決議と、「基地のない平和な二十一世紀の沖縄」を求めた大会アピールを採択した。決議には「米軍用地特措法改悪」「組織的犯罪対策法案（盗聴法）」「日の丸・君が代法制化」反対も盛り込んだ。また、5月19・20日の両日、首相官邸や関係省庁に決議文を提出する東京行動団に百人規模で取り組むことを確認した。

## 新たな基地にNO／4・28やんばる抗議集会

一九五一年4月28日、対日講和条約が発行し、米軍による沖縄支配が国際的に合法化された。この日は沖

縄にとって「屈辱の日」と記憶されている。

今年の4月28日は、前日に衆議院で新ガイドライン法案が可決され、まさに「屈辱の日」となった。名護市役所広場では、夕方六時半から「やんばるへの基地建設に反対し、戦争協力法案の廃案を目指す4・28やんばる集会」が同実行委員会の主催で開かれ、約三百人が参加して法案可決に抗議した。

自然の宝庫、やんばる（県北部）は、普天間基地の移設候補地として名前が上がっており、同じく移設候補地である津堅島、「象のオリ」移設候補地の金武町からの参加者などとともに、「新ガイドラインと新たな基地建設に反対しよう」との決意を新たにしたい。

## 米軍用地特措法「再改悪」が危ない！

沖縄土地収用委員会の公開審理が行なわれていた九七年4月、米軍用地特別措置法は土地使用の期限が切れても永久に暫定使用できるように「改悪」され、これを違憲とする反戦地主七人が国を相手取って訴訟を起こしたことは『あごら247号』でお伝えしたが、

今、新たに特措法の再改悪が国会で進められている。

この3月29日に国会に上程された「地方分権推進一括法案」は四百七十五本の法案が一括されており、5月13日に衆議院本会議で趣旨説明が行なわれて審議入りした。しかし、その中に特措法の再改悪が紛れ込ませてあることは、マスコミでもほとんど取り上げられていない。その内容は、

①市町村長、知事の行なっていた代理署名や公告・縦覧が国の直轄事務になる。

②収用委員会の審理が遅れたり、却下裁決が出た場合は総理大臣が裁決できる。

③新規収用・使用に対し、緊急裁決ができる。

というもので、もしこれが通れば、米軍の土地使用に関する自治体の権限は奪われ、国の権限で強制使用できようになる。これでは米軍基地固定化・拡大を際限なく許しかねないと、4月16日には那覇で「米軍用地特措法改悪に抗議する集会」が開かれた。また、〈違憲共闘会議〉〈権利と財産を守る軍用地主会〉〈一坪反戦地主会〉は共同で再改悪案の廃案を求める署名をすすめている。

◆連絡先は098・869・1578（違憲共闘会議）

「沖縄が周辺事態に巻き込まれることはありうる」

野呂田防衛庁長官の発言に抗議！

野呂田防衛庁長官は5月11日、参議院日米防衛協力指針（新ガイドライン）特別委員会で、沖縄選出の島袋宗康議員の「沖縄が周辺事態に巻き込まれる可能性が高いのでは」という質問に「地理的条件から言っても、基地が一番多く存在することを考えても、そういうことはありうる」と答弁、翌日の同委員会では野呂田氏は「舌足らずであつた」と釈明したが、前日の発言を一日で撤回したことにかえって紛糾をまねいた。また、船舶検査の警告射撃について、野呂田氏は同11日の記者会見で「違憲ではない」と発言、これも12日に特別委員会撤回している。

公式の場での発言を、二十四時間後には立て続けに撤回するという野呂田長官の態度に「沖縄県民の生命や生活がないがしろにするもの」と沖縄県内の首長や市民団体は一斉に反発している。13日に名護市で開催

された市民集会では、〈沖縄平和運動センター〉の瑞慶<sup>ずけ</sup>山浩<sup>やま</sup>副議長が長官発言を批判。また、東京でも、一坪反戦地主会関東ブロックや全国組織の〈婦人民主クラブ〉が、野呂田氏の辞任を求める声明を発表した。

## 米軍ヘリ墜落事故に宜野湾市と県が抗議決議

4月19日、夜間海上訓練中の普天間基地米海兵隊所属のCH-53Eヘリコプターが米軍北部訓練場の東沖合の太平洋上に墜落、ヘリに乗っていた海兵隊員三人の遺体が収容された。同機が墜落した周辺海域は地元住民が漁業に従事している地域で、一歩間違えば大惨事の可能性もあった。

この事故に対して、普天間基地を抱える宜野湾市は4月23日臨時議会を開き、事故の再発防止や米軍機による住民地域上空での飛行訓練の即時中止を求める抗議決議と意見書を採択。また27日には沖縄県議会も、嘉手納飛行場内での米軍パラシュート訓練と合わせて、米軍ヘリ墜落事故に対する抗議決議と意見書を採択した。

## 新沖縄フォーラム

### けーし風 第二号

特集 モノが語る戦跡

戦争遺跡保存の意義と現状（吉浜忍）／戦跡に対する考古学的調査とその意義（池田策史）／沖縄の戦争遺跡と平和学習（村上有慶）／沖縄戦と戦後史を知らせるために（大久保康裕）／アジア・太平洋の視点で戦跡を見る（安仁屋政昭）／アジア・太平洋の戦跡の現状又吉盛清・新垣安子・外間愛子・平田守・高嶋伸次・平良次子・瀬戸隆博

●与那国／小浜／宮古／島尻／那覇／中頭／山原／奄美／関西／関東  
●北の風 南の風

●論点 新崎盛暉／岡本 恵徳／屋嘉比 収

●ひと 国吉 勇

●沖縄環境ネットワークだより（具志堅 宗弘）

●沖縄 この三ヵ月（森田 康弘）

●ひろは 学生ガイドの会（地主園 亮）

●佐喜眞美術館だより

■定期購読の申し込みは、ハガキかFAXでお願いいたします。

定期購読者は年間四号分（二千円）または二年間八号分（四千円）を郵便振替（020601019027）で送金してください。＊バック・ナンバーあり。

新沖縄フォーラム刊行会議

〒902-8521 那覇市国場五五番地 沖縄大学地域研究所気付  
TEL ☎ 981-3115 599  
FAX ☎ 981-3113 210





# おめでとー！小川みさ子さん

## 『女ひとり地方議会に春一番』

### 出版記念パーティ

小川みさ子さんの『女ひとり地方議会に春一番』出版記念パーティが、4月26日、鹿児島市郊外の閑静な住宅地の一角にあるエスニック風喫茶で行なわれました。

後援会長である市在住の作家、相星雅子さんのあいさつに始まり、神父・小平卓保さんや僧侶・副直子さん、アイメイトをされている内野カツ子さんたちのお祝いの言葉が続き、支援者の層の厚さを実感させられました。

また、遠くは東京より駆け付けてくださった武蔵村山市議（4月末引退）ふくおひろしさんの記念ミニ講演。小川さんが、孤立無援の議会での紛糾の際、幾度となく対策を相談し、活路を見いだした

方です。「議員は一人の力であったのではないから、簡単にやめてはいけませんよ」と、父親のような温かい声をかけてくださいました（全国の新旧議員、何かの時はSOSを。知恵いっぱいの方です）。

その他、東京の（あごら・BOC）の斎藤千代さん・真泉雅子さんはじめ各方面の方々からお花や激励が次々と。司会の高橋ひろみさんも、傍聴の際のエピソードを交えながら涙ぐみつつの進行。

小川さんも「皆さんが何度も議会に足を運んでくださり、励まし助けてくださったから、やっと私は続けてこられました」と感謝の涙。

その後、「自然食やさしい村」の食事を囲



み、ピアノの弾き語りや、店主の女性デュオ（きよら）のミニコンサート等には、アルコール抜きながら、心の底まで温まり、ステキな夜を楽しみました。

「一人の力では何ができるだろう。政治家なんて誰がなっても同じ」と刷り込まれている私たち。南国・鹿児島の太陽のような小川さんの発信したエネルギーの集大成。ぜひ手にとって読んでください。（古里なおみ）

◆定価 本体一八〇〇円（＋税）。

※注文はBOC出版部へ。

TEL 03・3354・3941  
FAX 03・3354・9014

と、思い返してみると、愛光生（愛光学園生徒：筆者の教え子）たちの文化祭の〈女装コンテスト〉への熱の入れ方は、「現代っ子たちのやることは……」の次元でしか考えていなかったけれど、TVっぽい要素が入っていたのかもしれない、と思ったりした。そのあたりの境界は、本人の意識次第だし、簡単に言えることではない。「バレンタインのチョコのもらいが少ない」という彼らのぼやきには、そういえば確かに少なからず切実な響きがあった。結構、「深刻だったりして」、とも言えるし、「何だ、たわいない」と言ってしまえそうでもある。

ユング心理学のアニマ・アニムスをひっぱり出さなくても、だれの中にもいろいろな要素はある。男の中には《女》が、女のなかにも《男》が、自分とは異なるものへのあこがれもふくめて、住んでいるはずである。それなのにどうして我々は、このような日常のなかの非日常に目をつぶり、こうした茶目っ気・個性にすぐ〈変態〉のレッテルを張り付け、自分を安全地帯におきたがるのであろうか。自分の中の異性（異性性と言ったほうが誤解が少ないかもしれないが）を認めることもできぬほど人間は弱虫なのか。それとも自分や人間そのものへの我々の理解がそんなに浅いのか？「人間なんてたかだか、そのくらいのもの」、立派だなんて思い違いをしたら、他人を差別し、返す刀で自分をも身動きできぬ自縛の闇にほうり込んでしまうというのに。

とはいえ、そういうことに気づくのは勇気のいることだ。自分のなかの《差別する心》や しんどいことから、見て見ない振りをして距離を置きたがる《心の弱さ》に引きずられ負けてしまうのも実に簡単なこと。

それだけに三橋順子さん（氏をあえて使わないことにする）との出会いはインパクトがあった。〈女装家〉を名乗る彼（彼女と言うべきなのかもしれないが）の話はユニークで説得力があった。フェミニストカウンセリング教育訓練'99春講座に参加した、3月7日の午後の講義メニューだった。タイトルは「フェミニズムとトランスジェンダー」。「接点としてのジェンダー・フリー」の副題。ちなみに、男性としての職業は、都内某私立大学やカルチャーセンターなどの講師で、専門は日本史。既婚、一妻一男あり、と、プロフィール。

# Transvestite

(トランス・ベスタイト)

奥川 睦

トランス・ジェンダー(transgender)で『知恵蔵』をひく。

「生物としての体の性と、自分自身を認識する心の性とが一致しない人」と短く定義してから次の3つのタイプを挙げている。

1) トランス・ジェンダー (以下 TG) 生物上の性と、自認する性が一致しないので、自己の性と反対の性で生きようとする人。役割上も人々からの認知も反対の性を求めている。

2) トランス・セクシュアル (以下 TS) トランス・ジェンダーの人で、さらに外科的手術で生殖器を転換して反対の性に(本人にとっては本来の性に)変えようとする人。性同一性障害としてみれば、性転換手術の対象となる。

3) トランス・ベスタイト (以下 TV) 異性装者のことで、パートタイムのトランス・ジェンダーと理解することもできる。クロスドレッサーともいう。

うかつながら、表題の語を知らずにいた。1)と2)の使い分けも曖昧だった。広い意味では1) 2) 3)ともTGなのだから、狭い意味でのTGと紛らわしいのは仕方ないとも言える。しかし、3)については内心忸怩たる思いがある。映画やドラマでも比較的、目にすることは多いのに、それが遠い景色になっていた。そこには、やはり世間の常識に縛られる発想の硬い私がいる。一般論から言っても、日常に溶け込んだ景色になっていることは、逆に意識からスルリと抜け落ちる。抜け落ちやすい。そう言い訳することはできるかもしれない。でも、それこそが落とし穴、差別の温床となることを、これまであまりにもたくさん見てきた。自分にも厳しく戒めてきたつもりだ。なのに……。

宝塚で〈男装の麗人〉と呼ばれる人びとがおり、歌舞伎の女形も伝統芸能としてすんなり受け入れている。シェイクスピアの時代のお芝居も、女性は変声期前の少年が演じていた(『恋におちたシェイクスピア』も初日の幕開き直前に少年が変声してしまうドタバタで盛り上がっていた)。祭りの場では異性装は珍しくなかった。とは言え、「これは、お芝居の舞台」「今日は、イベント・お祭り」と、日常と切り離すことで黙認され、大目に見てもらった逸脱行動。一度それを日常に持ち込めば、途端にコッピドイ目にあってきたことは、歴史が証明している。

2000年世界女性会議はじまる The 43rd Session of the CSW Report  
国連女性の地位委員会を傍聴した③ 小川椒子

3月17日 木曜日

〈女性の地位委員会 (CSW)〉

9時-10時 フリーフィング

10時-16時 非公式協議

初日のパネルディスカッションと二日目のシンポジウムに基づいて、女性2000年会議準備会議の政府代表間の非公式協議が開始された。

EU、G77(開発途上国と中国)、その他(JUSCAN:日本、米国、カナダ、NZなど)と大きく二つのグループに分かれて協議開始。

各NGOは、自国の政府代表に対して、「2000年国連特別総会の準備にNGO

Oが関わる必要」と2000年の特別総会にNGOが貢献するために必要なアクションメントを確保できるように「ロビー活動を行なっている。

〈NGO会議〉

午前

- ・世界女性電子ネットワークセミナー
  - ・アジア分科会
- 午後

- ・アメリカ分科会
- ・ラテンアメリカ、カリブ分科会
- ・アフリカ分科会

〈2000年世界女性会議(NGOフォーラム)開催予定について〉

北京会議相当規模のNGOフォーラムは企画されない。

2000年6月5日から9日まで国連特別総会を開催し、そのメインテーマは「女性2000年会議:二十一世紀に向けての男女平等・開発・平和」と決まっている。特別総会は各国の首脳レベルの集まる会議である。

1995年の北京会議の時のように、2000年国連特別総会に合わせて「国連世界女性会議、女性に関するNGOフォーラム」という形でNGOフォーラムを開催するよう要請する事は、先々週の段階では話題に上っていたが、可能性がないと言うことで方針を転換した。

特別総会にさきだつて2000年3月



に開かれる、CSW準備会議（CSW「Prepcom」）にもNGOが参画できるように、CSW議長に要望書を提出した。CSW議長に提出した要望書の内容は、来年のCSW準備会議の政府代表団の中に若い女性を含めること、NGO代表も他の政府代表と同じ立場で代表団の

中に含めること。さらに、国連に対するコンサルテーション団体として認可されたNGOだけがCSWに参加できるので、この認可方針を明確にすること（例えば、北京会議で政府間会議に参加したNGOは、自動的に認可される）を申し入れた。そこで、CSW準備会議にNGOが積極的に参画、関与するという形をとることになりそう。CSW準備会議でNGOの決議を各NGOが各国の政府代表団にロビー活動してNGOの視点を各国政府の代表団の意見に反映しようとしている。そのためのNGO会議開催のための財政支援をどう獲得するかを明日のNGO会議で討議する予定。

CSW準備会議の日程は、2000年3月初旬。今年のCSW準備会議と同じような日程になる。来年の準備会議は、各国政府代表団と連携して、全世界的な視野で、女性の地位を人権・平和という

基本的な観点から底上げし、2000年国連特別総会の準備会議となる。

また、NGO独自の会議を国連特別総会の前とCSW準備会議の前に開くことも検討中で、こちらが、イメージとしては、北京会議NGOフォーラムに近い。

しかし、その性格は、どうも各国女性の交流というよりは、情報交換と戦略討議という、作戦会議の色彩が濃い。

さらに、各国政府代表団による地域レベルでの政府間会議にNGOも参画すること、地域レベルでのNGO会議を開催することを討議中。

国連へのコンサルタティブ資格を認定されているNGOの会議（CONGO）は、今年の10月10日から16日と、12月8日から11日に、ソウルで開催予定。10月は、二十一世紀のNGOの役割、12月は、国連の活動とNGOの連携がテーマ。

このほかに1999年10月には、タイ

のバンコクで婦人とメディアに焦点を絞ったNGO会議の予定。

各国の女性の交流を目的とした「北京会議のNGOフォーラム」と同じようなNGO会議は、今回は地域レベルでのNGO会議になるだろう。

女性の地位の向上を目指すNGO会議は、各NGOの合意を得た上で、2000年国連特別総会の準備にNGOが関わる必要性があり、NGOが特別総会に貢献できるようにアレنجジメントをするとのCSWの決議を得、さらにスポンサーを採ってNGO会議開催の日時と場所が公式になるというプロセスを踏む模様。

#### ＜NGOオルタナティブ報告について＞

また、各国政府がDAW（国連女性の地位向上部）の質問状に対して回答する形で提出する「北京行動綱領実施状況に関する報告」に対して、各国のNGOが

オルタナティブ報告を各国内レベル、地域レベルでまとめ、その上で全世界的なNGOオルタナティブ報告とすることになった。NGOとしては、この作業のための財政支援も獲得する必要がある。

日本のNGOも連携体制を固めて、日本のオルタナティブ報告を国内レベルでまとめ、その上でアジア地域および世界的なNGOオルタナティブ報告をすることになる。そのため、この作業のための財政支援も獲得する必要がある。

#### ＜筆者注＞

北京行動綱領の地域実施状況に関する専門家グループ会議（ESCAP準備会議）（国連アジア太平洋地域経済社会委員会（ESCAP）主催）が4月初めに開催され、「女性2000年会議」に先駆けて「ESCAP地域ハイレベル政府間会議」を1999年10月26日から29日にバンコクで開催することを決定。

3月18日 木曜日

#### ＜女性の地位委員会（CSW）＞

9時～10時 プリーフィング

10時～12時 非公式協議

1時～夜 提案書案説明と非公式協議

午前中は、昨日に続いて女性2000年会議の準備に関する政府代表間の非公式協議継続中。

各NGOも、政府代表に対して、「女性2000年会議の国連特別総会の準備にNGOが関わる必要性と、2000年の特別総会にNGOが貢献するために必要なアレنجジメントを確保」できるようにロビー活動を継続中。

まだ最終的には決まっていないが、各国の合意がかなり取れてきた様子。しかし、途上国グループの強力な反対もあり、いくつかの点については、やっと合意案

ができあがったものの、時間切れて正式の決議まで持っていくことができず、次回3月末の経済社会理事会で承認されれば、2000年国連特別総会の準備会議としてのCSWを、あと1日かけて臨時に開催し、決議を行なうことになる模様。

2000年6月5日から9日までの特別総会に、NGO代表が参画（貢献）できるように決議するかどうかと、特別総会にさきだつて2000年3月に開かれる、CSWの準備会議にNGO代表も参画できるように決議するかどうかを協議中らしい。

\*

今朝のフリーフィンクで発見した印象的（意外）な事柄。

先々週のCSW準備会議のなかで、元中国（チベット）人で、現在はカナダ国籍の人のスピーチをCSWの事務局（DAW・国連女性の地位向上部）の職員が

キャンセルした事件があり、私の参加していたアジア分科会でもメンバーが署名した抗議文をDAWに提出した。先週、DAWの責任者が不適切な対処であったことを認めて謝罪し、遅ればせながら本人がスピーチした（「あこら248号」3月8日付けレポート参照）。

3月17日付けでDAWと「女性問題と婦人の地位向上に関する事務総長に対する特別顧問」という立場のアンジェラ・キングさんのメッセージがだされ、そのステートメントのコピーが配布された。ステートメントの要旨は、抗議文（Letter Of Concern）に署名した人びとへの感謝このような事態を起こした事実を認めての謝罪、今後もNGOと国連との良いコミュニケーションの継続希望の三点である。

このステートメントには、抗議文へ添付された署名の写しが添えられていたのだが、日本国籍の署名は、私一人だった。

「おかしい」という感想を述べていた人が私の他にもいらしたのに、その方々の署名はどうなったのだろう。

＜NGO会議＞

午前

・Beijing+5プロセス分科会

NGO会議開催のための財政支援については、NGOがプロポーザルを作成し、UNIFEMにファンドを求める。

NGO会議を国連の政府代表会議（6月の国連特別総会と3月のCSW準備会議）に連動して開くことを検討した。

NGO会議の性格は、各国女性の交流というよりは、女性の地位向上についての情報交換と戦略討議という、作戦会議になる。

・アジア分科会

地域レベルでの国連の政府間会議にN

GOも参加すること、地域レベルでのNGO会議の開催を検討。

アジア太平洋地域の場合は、国連アジア太平洋地域経済社会委員会（ESCAP）主催で「ESCAP地域ハイレベル政府間会議」がタイのバンコクで1999年10月に開催されるので、これに合わせたNGO会議を開催する（17日付けレポートの筆者注参照）。

この地域レベルのNGO会議では、ESCAPメンバー各国政府から提出された「北京会議で決議された行動綱領の進捗状況公式報告」に対して、NGOの視点からのオルタナティブ報告を各国レベル、サブリージョンレベルでまとめ、その上で全世界的なNGOオルタナティブ報告への準備作業会議とする。

午後

・女性のリーダーシップ分科会

・アフリカ分科会

・アメリカ分科会

来年のCSW準備会議の政府代表団の中に若い女性を含めることについて、アメリカ分科会では、「我が米国政府代表団に、日本政府代表団と同じような若い女性を含める必要がある」との発言があった。日本政府代表団の若い女性官僚の評判がよかったというこらしい。

アメリカ分科会を傍聴した感じでは、2000年6月5日から9日までの国連特別総会の前後と同じ時期に「女性ジャンボリー」という感じのNGO女性交流会が企画される模様。北京会議相当規模のNGOフォーラムは企画されないが、会場について、「大学では、どうだろうか」「国連の会議場をウィークエンドに借りて開いたら良い」などの案が出ていた。

日本政府代表団のフリーフィング

今夜は、国連代表部公使は欠席。NGOメンバーの男性一人以外は、全員女性。こういった機会は珍しい。紆余曲折はあったが、NGO代表のCSW準備会議参画について、ようやく合意に到達できそうな雰囲気になってきたようだ。ひとまず安心。国連特別総会でのNGO代表のスピーチなどの詳細については、来年のCSW準備会議で検討される。

目黒依子代表はじめ政府代表団のメンバーは、フリーフィングの後再び、非公式協議へ戻っていかれた。

「2000年6月にNYに皆で来よう」と準備してきたのに、この様子ではNYには来られそうにない。どうしよう」と、悩んでいる人がいたので、「こういう風に考えてみたらどうですか?」とお世っかいをした。

\*



国連のウェブサイトでは、様々な情報を見ることが出来る。また、Women's Watchも女性関連の情報が豊富。これも国連のウェブのCSWから参照できる。

(<http://www.un.org>)

3月21日 日曜日

現在、NY時間では、21日(日曜日)の早朝です。メールを送信してからホテルをチェックアウトし、JFK空港へ向かいます。明日22日(月曜日)の午後に成田到着予定です。

金曜日19日は、第43回CSW準備会議最終日。この日の段階での決議案と、NGO会議の報告です。金曜日には、アジア分科会、女性2000年会議に向けて、NGOとしてどのように取り組んでいくかを話し合うフレームワーク作りの分科

会であるBeijing+5プロセス分科会、アメリカ分科会に参加し、最後はCSW準備会議の全体会議を傍聴。

〈女性の地位委員会 (CSW)〉

9時-10時 ブリーフィング

10時-11時 非公式協議継続中

3時-4時半過ぎ 全体会議

CSW議長から、提案書の修正案ごとに、フロアの意見を求め、反対の声が上がらなくなったところで、採択という宣言が続き、5時前に審議終了。英文とフランス語だけの公式文書が作成され、中国語とロシア語の公式文書が完成した後、5月(?)に会期一日のCSW準備会議を臨時開催して正式に審議が完了することになった。

〈NGO会議〉

・アジア分科会

アジア地域では、五つのサブリージョンに分かれて、各国のオルタナティブ報告書を持ち寄りサブリージョン報告を作成した後、地域会議を行なうこととし、各国とサブリージョンのフォーカルポイントを4月1日までに決定することになった。

〈筆者注〉

日本はアジア太平洋サブリージョンに入り、フォーカルポイントは橋本ヒロ子さんに決まった。

・アメリカ分科会

アメリカ分科会では、アメリカ政府代表団のメンバーが六人ほど来て、CSWでの政府間交渉の進み具合の途中経過を報告し、質疑の途中で代表団長は、また本会議へ戻っていった。ブリーフィング要旨は、以下の通り。

①女性2000年会議は、6月に1週間

の会期で開催する「国連の特別総会」で、各国政府トップが参加する。

②2000年3月に、3週間の予定で、

「2000年国連特別総会の準備を行う」CSW準備会議を開催する。

③このCSW準備会議には、経済社会理事会からコンサルテーション団体として認可されたNGO (CONGO) と北京女性会議の政府間会議に参加したNGO が参加できる。

アメリカ分科会の討議によると、2000年女性会議としては、CSW準備会議の前に2日程度のNGOワーキングセッションを開催する可能性を探れるかもしれない。

開催場所、財政基盤などの詳細は白紙で、今後意見を交換する。

NGOワーキングセッションは、2000年国連特別総会の前およびCSW準備会議の前の二回共に開催できる可能性

もある。このNGOワーキングセッションは、イメージとしては、NGO北京会議のNGOフォーラムに近い。

#### ・Beijing+5プロセス分科会

各国政府がDAWの質問状に対して回答する形で提出する、「北京会議で決議された行動綱領の実施状況に関する報告」に対するオルタナティブ報告を各国レベル、地域レベルでまとめ、その上で世界的なNGOオルタナティブ報告とすることが、今回のNGO会議の合意事項である。

さらに、地域レベル（アジア太平洋地域ではESCAP会議）の政府間会議にNGOも参加できるようにすること、地域レベルでのNGO会議を開催できるように検討中。

1999年10月（ESCAP地域ハイレベル政府間会議と連動して）には、バ

ンコクで婦人とメディアに焦点を絞ったアジア地域のNGO会議を行なう。

このNGO会議で、アジア地域のNGOは、事前にサプリージョンごとにまとめたオルタナティブ報告を持ち寄り、地域レベルでまとめてオルタナティブ地域報告書を作成する予定。

各国の婦人の交流を目的としたNGOワークショップは、地域レベルでのNGO会議で実現できるかもしれない。

\*

2000年の国連特別総会およびCSW準備会議と連動して「女性2000年NGO会議」と「2000年世界女性(NGO)会議」を開き、「CSW準備会議と連携したNGO会議の合議結果をCSW準備会議の決議に反映して貰いたい」と、「国連特別総会において、NGO代表もスピーチできるようにして貰いたい」との要望をCSWに送り、各国のN

GOはそれぞれ、CSW準備会議の自国の政府代表団に対するロビー活動を活発に行なっている。

しかし、いわゆる女性の地位先進国でさえも、必ずしも国連の特別総会でNGO代表がスピーチすることに賛成してはならず、国連特別総会へのNGO参加は、来年のCSW準備会議において審議される。

\*

日本では、もう桜便りが聞こえ始めているのでしょうか？

ニューヨークは、この2日ほど暖かったのですが、道端のクロッカスやスノードロップ（だと思ふ）がほころびはじめました。天気予報も先週の暖かった日には、若葉マークが付いていましたが、一昨日の天気予報のマークには、若葉の上に白い花のマークが追加されていました。この2、3日には、小鳥のさえずる声もちらほらと聞こえ始めました。春が

そこまで来ているようです。

もう、朝の5時を過ぎました。今朝は、空港へ8時前に到着するために、6時には起きなくてはと、目覚時計を6時にセットしてありますから、久しぶりの徹夜になってしまいました。飛行機に乗ったら良く眠れることでしょう。では、東京で目にかかります。

#### ＜編集部注＞

◆もし日本がNGOフォーラムを日本で開く財政的・人的準備ができ、いち早く名乗りをあげれば、それも可能かもしれないとの情報もあります。ちなみに一九八〇年の第二回会議はテヘランの予定が、急遽コペンハーゲンになりましたが、小ぢんまりとした、しかし実に心暖まる良い会議になりました。2000年には沖縄で、サミットの7月に世界女性平和会議を開こうという運動も始まりまし

た。運動して5月か6月にNGOフォーラムを沖縄で開けば、「人権問題としての沖縄」を、全世界にアピールすることができのではないのでしょうか。

◆国連から出された「北京行動綱領の実施状況に関する各国政府への質問状」への回答書は、今年4月に総理府男女共同参画室が取りまとめ、すでに英文・和文とも用意されています。お問い合わせは同参画室（03・3581・1812）へ。参画室のホームページでも取り寄せることができます。

(<http://www.sorifu.go.jp/danjo>)  
◆これに対するNGOのオルタナティブ報告作成の会もスタートしました。（へあごら）もこの会に参加します。

◆それにしても、小川さん、連日連夜、ほんとうにありがとうございます。お蔭で2000年会議が見えてきました。沖縄でフォーラム開けるといいですね。

# 女性に対する暴力

## クマラスワミ報告書の紹介（第九回）

前田 朗

### 七 宗教的急進主義

宗教的急進主義による女性に対する暴力は、世界中の多くの社会でみられる厄介な現象である。それは単一の宗教や諸国家の集団に限定されず、多数の諸国にさまざまな形態で存在する。クマラスワミ特別報告者は、宗教的急進主義に由来する女性に対する暴力を論じるに当たって、宗教間の論議に立ち入って、この慣行が実際に当の宗教によつて是認されているかどうかを解明するつもりはない。人権研究者たちは、宗教そのものは人権侵害を是認しないという見解で、すべての宗教について多数の研究を行なってきた。それゆえ、世界のすべての宗教は人権保護の精神を持っており、むしろ人為的な慣習や慣行が、宗教に名を借りて、女性を差別することが多いと思われる。

本報告書は教義論争に関心を向けるのではなく、特殊な人為的慣行の影響を考慮し、その慣行が女性に対する暴力となる場合には、それを廃止するために立法や計画実施をするよう政府に促すだけである。この訴えに当たって「女性に対する暴力撤廃宣言」が明確に次のように規定している事実を念頭に置いて

ている。「各国は女性に対する暴力を非難すべきであり、責務を回避するために習慣、伝統や宗教的考慮を引き合いに出してはならない」。

アフガニスタンのNGOの報告に含まれた多くの例の一つだけを取り上げたい。

「ターペキは幼児を医者連れていくところだった。その子は下痢がひどく、すぐに医者に見せる必要があった。ターペキはブルガ（顔を覆うベール）を着用していた。市場で、十代のタリバーン原理主義の警備兵が彼女に気づき、呼び止めた。ターペキには、立ち止まったら公衆の前に姿を現したかどで殴られるとわかった。急がないと子どもが死んでしまうと思い、走り出した。タリバーン警備兵がカラシニコフを数回発射した。ターペキに命中したが、死ななかった。人々が間に入り、彼女と子どもを医者連れていった。家族がタリバーン指導者に抗議したが、女のほうに過失があったと言われた。彼女は公衆の前に姿を現してはならない。止まれと言われれば止まるべきで、逃げ出すべきではなかった、と。」

アフガニスタンのタリバーン支配領域では、女性が家の外で行動したり家から離れたりすることは、タリバーンが認める理由のある場合しか許されない。たとえブルガを着用していたとしても、路上で呼び止められれば、鞭打たれたり殴られる危険がある。カンダハル出身の女性がNGOに語ったところでは、タリバーン支配領域では教育も学習もない。「学校や教育施設はすべて閉鎖された。カンダハルには私の知る限り女性医師が一人もいないため、医者にかかることもできない」。

次に述べるように、フダド法令のジナの罪が、パキスタンでは実際に適用されており、国家によって解釈される宗教的急進主義が女性に対する暴力となる一例である。パキスタンのフダド法令では、強姦を犯罪として立証することはほとんど不可能であり、立証されなかった場合には当の女性が姦通や姦淫の罪で裁判にかけられる。強姦被害を訴えた目の見えない少女サフィア・ビビがこの例である。彼女は

未成年で妊娠していた。裁判所は法令で定める四人の証人がいない以上、サフィアは強姦被害を立証できなかったと判定した。それゆえ一審裁判所は彼女がジナ法令に違反したとして三年の重拘禁を言渡した。女性運動が国内で反対運動をしたので、連邦裁判所は手続きの理由でこの判決を破棄した。

女性の身体の自立や自分の着たいものを着る自由も多くの社会で否定されている。女性が共同体のしきたりに抵抗すると、暴力の的にされやすく、共同体は「彼女にはそれがふさわしい」とみなすだろう。暴力はまた「女性らしい」服装をしていない女性に向けられることがある。これらの共同体のしきたりを国家が担っている国もある。イラン・イスラム共和国は「ヒジャブ・エ・イスラム」という女性の服装規則を制定し、これに従わない者には重い刑罰が課される。さらに共同体も、規則違反の女性に警告したり、逮捕しようとする義務を共同体の住民に課すことで、しきたりを担うよう奨励している。女性は逮捕されると、七五回の鞭打ちを受け、看守の自由裁量で、口汚く罵倒されるだけで釈放されることもある。服装の自由を行使する女性への虐待行為は、聖典で承認されているとして、政府によって正当化され、一定の共同体構成員によって正当化されている。

鞭打ちや石投げという公開刑罰は、拷問等禁止条約違反である。多くの国では、国際基準が承認されているのに、法律も裁判所もいまだにこうした刑罰を男性にも女性にも課し続けている。女性の場合、しばしば姦通や姦淫について、共同体のモラルの境界を越えたと見られる。この刑罰は教典の解釈を通じて立法者によって正当化される。

多くの社会では、夫を亡くした妻に対する処遇が女性の人権侵害となることも多い。インドのある地方では、非常に暴力的な取扱いがなされる。例えば、歴史的な慣行で女性が夫の葬式で焼身自殺し（サティ）、サティ寺院は宗教的に美化され、それが現在では不法とされているのに、今日も現実にはまだ起

きている。ラジャスタン地方のデオララの事件では、ループ・カンワーが結婚して八か月にも満たない一九八七年九月に夫が死んだ。彼女は四千人の見守る中、花嫁衣装をまとうて村の真ん中に建てられた葬式台で夫の遺体とともに焼かれた。この事件で大騒ぎとなり、インド政府が「サティ美化予防法」を制定した。しかし、この事件に関する論争は、サティ文化に寛容な共同体があることを明らかにした。サティ賛成派は、この慣行は宗教的に認められていると主張する。サティは不法とされたが、国家はいまなおサティを美化する儀式や慣行に寛容である。ループ・カンワーのサティに責任のある家族の男性が最近無罪放免となったことは、識者を懐疑的にさせ、刑事司法システムがサティ法を効果的に実施していないという印象を与えた。

キリスト教原理主義の伸長も、特定のカテゴリーの女性に対する暴力を正当化する風潮をつくっている。合州国では、一定の条件のもとで妊娠中絶の権利は憲法上保護されていると最高裁判所が解釈しているが、あるキリスト教集団は、女性が憲法で認められた中絶権を行使すると、女性に対する暴力を正当化する行動主義をとっている。「殺す」という脅迫、ストーキング、放火が、これらの集団が用いる暴力的戦術である。こうした暴力を訴追しようとしている州もある。例えば、マサチューセッツ州は一九九六年三月十八日に、ジョン・サルヴィを有罪としたが、彼は中絶病院に通っていた二人の女性、シャノン・ロウニイ（二十五歳）とリー・アン・ニコラス（三十八歳）を殺害した。キリスト教原理主義集団は、女性の人権を求める者の獲得成果を非難しようとしている。合州国のキリスト教連合の主要イデオログのパット・ロバートソンは最近「フェミニストが議題にしているのは女性の平等の権利ではない。それは社会主義であり、反家族的な政治運動であり、女性が夫から立ち去り、子どもを殺し、魔術を行ない、資本主義を破壊し、レズビアンになることを奨励している」と述べた。女性活動家に対する「憎

悪発言」が宗教の名において行なわれることは、女性の人權を信じるすべての人の重大な関心事である。世界の宗教は、社会における女性の地位に関して重要な唯一の信仰体系ではない。多くの国では、世界宗教の経験の枠外にある部族的慣行が共同体のなかに存在し、女性に対する暴力となっている。魔女狩りはさまざまな時代に世界のすべての地域で文化を越えて発生した。南部アフリカやインドでは、魔女であると考えられた女性が殺されている。インドのビハール地方シングプハムでは、魔女信仰ゆえに毎年平均二百人の女性が殺される。被害者のほとんどは、土地所有の夫を亡くした妻や望まない妊娠をした女性と見られる。

これらの共同体の文化的慣行は、女性に対して暴力的であり、女性の品位を落とし屈辱を与え、それゆえ女性が自分の人權を完全に享受することを否定する。国際基準が要求しているのは、文化的慣行を擁護する者が宗教的信仰と儀式に基づくものだと言主張したとしても、こうした慣行を撤廃する国家政策が一致して取られることである。

## 八 勧告

各国には女性の人權に関する国際文書を留保なしに批准することが求められる。社会における女性に対する暴力の問題を扱う重要な条約は、女性差別撤廃条約、国際社会権規約、移住労働者権利保護条約である。各国は、国際人權条約、特に女性の人權に関する条約の留保をすべて撤回するべきである。

各国は、国際人權文書や地域的人權文書のもとでの報告義務に応じるべきであり、それには女性の状況に関するデータ・情報、特に女性に対する暴力に関するデータが含まれるべきである。各国は、それ



その刑事司法制度がいかにして社会における女性に対する暴力問題に立ち向かうべきかに関して情報と訓練経験を交換するべきである。

**強姦及び女性に対する性暴力（セクシユアル・ハラスメントを含む）**

各国は、性暴力に関する最近の研究に照らして刑法を改正すべきである。強姦被害者中心の定義は、性暴力を完全にカバーするように広げられるべきであり、被害者の「同意」と結びついた問題を捉えるようにするべきである。暴力の実行者がきちんと処罰され、悪質な犯罪の実行者が重い判決を言い渡されるように改正されるべきである。

各国は、セクシユアル・ハラスメントを犯罪化するために刑法改正すべきである。教育施設や職場ではセクシユアル・ハラスメントと闘う法規定・施設内規定をつくるべきである。教育や雇用を提供する組織及び施設は、セクシユアル・ハラスメントの女性被害者に妥当な聴聞が許され、法の適正手続きがされるよう保証すべきである。ジェンダーの視点で証拠規則を評価し、女性に対する差別となることが判明した場合には証拠規則を見直すべきである。それは例えば、被害者が女性であれば補強証拠を必要とする規則や、当該事件とは関係ないのに被害者の過去の性的行為の証拠を法廷に持ち出すことを許す規則である。

各国は、捜査や訴追の期間に強姦被害者のアイデンティティとプライバシーを保護する法的機構を用意すべきである。この保護は適切な立法の一部をなすべきである。

制定された成文法ではなく判例法を重視するコモンロー国家の裁判における法解釈が、強姦に関して補強証拠を必要としていたり、またその他の法制度では「名譽の抗弁」があるが、これらを見直し、も

しそれが女性に対する差別や中傷であるならば改正されるべきである。

各国は、警察や裁判のすべてのレベルで、ジェンダーに敏感で自覚的であるべきであり、警察訓練コースでそうしたプログラムを義務とし、裁判官のための法学教育セミナーやワークショップを続けるべきである。

各国は、学校教育課程に変化を組み入れて、女性に対する暴力と闘う態度を育成すべきである。各国は、医学教育や法学教育にジェンダーに敏感な訓練を行なうよう義務づけるべきである。各国は、強姦やその他の形態の女性に対する暴力の被害者にかかわる医療関係者、特に司法病理学者のためのジェンダーに敏感で自覚的な訓練を行なうべきである。

各国は、NGOと協力して、強姦被害者サービスのための基金を配分するべきである。それにはシェルター、法律扶助、医療援助及びカウンセリングが含まれる。こうした政策は、警察署であれ病院であれ、女性被害者が国家や社会が提供するサービスに完全にアクセスできるように（一時避難センター）をつくることをめざすべきである。

### 人身売買と強制売春

国際社会は、人身売買と売春に関する新しい国際基準の準備を始めるべきである。国家活動の報告と監視を確実にする国際機構が発展させられるべきである。

国際的女性売買問題は、地域的協力と国際的協力によらなければ廃止できない。各国は、この問題に特別な努力を振り向けて、人身売買に冒されている諸国の警察及び司法の間で定期的情報交換をするべきである。

受入国の入国管理政策は、二重の弱みから女性が傷つくのを予防するよう修正すべきである。さらに、売買被害者が即座に国外追放されることで人身売買業者が処罰から逃れることのないようにするべきである。

各国は、マクロ経済政策が高レベルの女性の失業をもたらしてきたことが、人身売買と強制売春の分野の主な問題であることを認識するべきである。社会政策は、周縁化された女性が自分の職業や生計について別の選択ができるように構成されるべきである。

各国は、警察や裁判所がこの問題に敏感になり、社会問題の大きさに反応するよう保証すべきである。女性を中傷する態度、特に強制売春を強いられた女性を傷つける態度が、女性売買業者の刑事訴追を妨げるものがないようにすべきである。

各国は、人身売買と売春の女性被害者のために特別サービスが用意されるよう保証すべきである。シェルター、医療サービス、法律扶助、訓練、カウンセリング提供が、人身売買の女性被害者を支援する一般的なプログラムの一部となるべきである。

健康教育に関する国家プログラムを強化して、HIV/AIDSに関する注意喚起、特に、HIV/AIDS感染者とともに生活する女性に注意を喚起すべきである。健康施設は、伝染性の性病に関する女性被害者の一般的必要に応じるべきである。

#### 女性移住労働者に対する暴力

すべての国が移住労働者家族権利保護条約を批准するよう求められる。

送出国は、大使館や領事館に移住者担当を設置して、移住労働者、特に暴力被害を受けた者を援助す

るべきである。さらに、送出国はオリエンテーション・プログラムを実施して、移住労働者が基礎的な言葉を学び、将来暮らす国の文化を学び、暴力を受けたときにどうするべきかについての情報を提供されるようにするべきである。

受入国は虐待雇用主を訴追するべきである。さらに、パスポートの没収のように女性移住労働者が被害を受けやすくする規制は廃止すべきである。受入国は、NGOと協力して、暴力被害を受けた女性移住労働者のためにシェルターとカウンセリングサービスを用意するべきである。入国管理局は、移住労働者の必要にもっと敏感になり、移住者の滞在資格が彼らへの虐待を容易にしていることを考慮するべきである。受入国は、移住者の人間性を奪う人種差別法や態度と闘うべきであり、移住者と自国民との間のもっと健全な関係を確保する戦略を発展させるべきである。

### 宗教的急進主義

各国は、女性に対する暴力撤廃宣言に含まれているように、女性に対する暴力を正当化するために習慣、宗教又は伝統を引き合いに出してはならず、すべての国家と社会に国際人権文書の普遍的で、不可分の相互依存的な適用を確保することを支持すべきである。

刑事手続法と手続きは、国際基準と矛盾のないものにするべきである。拷問、残虐な、非人道的な及び品位を傷つける取扱又は処罰は、強姦及びドメスティック・バイオレンスの効果的な訴追を宗教的解釈で妨げるような法律とともに、廃止されるべきである。

各国は、女性の人権を侵害する社会における伝統的慣行や儀式が廃止されるよう率先して努力するべきである。法、教育及びメディアを含む多面的な戦略を実行して、態度や社会的慣行の再編成を助ける

べきである。

## 女性に対する暴力とリプロダクティブ・ヘルス

女性のリプロダクティブ・ヘルスの侵害はすべて、認識され、廃止されるべきである。人口と開発に関するカイロ国際会議の行動綱領、及び第四回世界女性会議の北京宣言と行動綱領が、この議論の出発点となるべきである。女性の性的自立と再生産の自立を進展させる目的の戦略が奨励されるべきである。

各国は、胎児期の性別決定を規制する法律を採用して、女嬰兒の差別的墮胎を廃止するべきである。息子選択の習慣や慣行は、女兒の価値を引き下げ、性選択墮胎を奨励する。女嬰兒殺しは廃止されるべきである。

## ポルノグラフィ

技術革新と情報革命が女性に対する暴力にどのように影響するかや、女性に対する暴力を描写する人物を評価する研究を行ない、国際社会の関心を高めるべきである。女性に対して暴力をふるう人物と闘う戦略を準備する国際的対話が、言論・表現の自由を侵害することなく、促進され、ポルノグラフィに関する国際基準が発展されるべきである。

各国は、NGOと協力して、一定の種類のポルノグラフィがいかに関心に対して暴力的であり、社会に許容できないかについて、関心を高めるよう努力すべきである。各国、調査機関及びNGOは、女性に対する暴力に関する情報と統計を恒常的かつ組織的に収集し、女性に対する暴力の程度を評価し、問題を透明で見えやすいものにするべきである。

# 語りかけたいあなたへ 22

大里知子

## 書見台

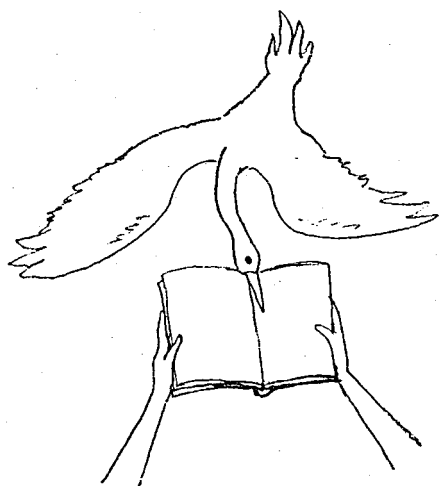
自分の身体にしびれが出始めて、まだ、そのしびれをどうしても容認できなくて、精神的にもんもんとしていた頃、姉（則子）はいち早く、本の好きな私が読めなくなったら困るだろうと、横になつていても本などが読める書見台を買ってくれた。でも、その頃私が精神的にひどく落ち込んでいたものだから、読み進むことに誰か人にページをめくってもらわなければいけないと思っただけで、私の心は萎縮してしまい、書見台を使って自分で読書をするなどということは、とても考えられる心境ではなかった。こんなわけで、ずいぶんしばらく書見台は郵便物や新聞の切りぬきを見る程度で、フルに活用することもなく私の部屋におかれていたのだった。

その書見台で、この六月から、やっと本を読むようになった。

精神的には何も落ち着いたわけではないし、身体の方も決して良い状態ではないけれど、きつと自分で出来ることなくってきたので、せめてもう一度本を読もうという気持ちをつるい起こさせたのかもしれない。それから、本が持つ魅力に負けたと言っても言い過ぎにはならないと思う。

私は、何かをやるうとする前、かならずあれこれ思いめぐらし、いざ実行に移すまでにだいぶ時間が

かかる。そうして実行した後は、もうその目的のために突進するという性格なので、書見台での読書も、みんなにページをめくってもらって読んでいくうちに、しばらく忘れていた読書の醍醐味が感じられて、簡単にはやめられそうもなくなってしまった。本を讀んでいて熱が入ったり、面白いところへ差し加かると、読むピッチもどんどん上がり、本のページをめくってもらう回数も当然早くなってしまう。そんなとき、私が何回もすぐ「めくって」「めくって」と言うものだから、夜に寝がえりその他で、付き添ってもらっている、児玉シモさんに「とばして読んでらるか？」（文字をとばして読んでいるのか）と言われってしまった。



その反対に、ページをめくってもらえない状態のときもある。そんなときは、いくら次のページが早く読みたいくてもウズウズしていても、どうすることもできず叶わないので、黙って待っているしかない。こういうことで、自然に忍耐力というものが、養われていくのではないかと、たいへん甘いことまで考えてしまった。

幸いにして、まだ遠視も出ていないので、みんなの手を借りてページをめくってもらい、出来るだけ、ゆつたりとした気持ちで書見台での読書を、楽しみたいと思っている。



# 近親相姦を鋭く告発 セブレーション ——ドグメ #1——

1998年 デンマーク  
カラー 1時間46分  
配給 ユーロスペース

- 大波に揺れる文字が断片となって歪み、さらに揺れる。異様なメインタイトル。メインクレジット。
- ふしぎなイントロダクションに始まる映画の画面には、多くの手ぶれも。制作は「ドグメ #1」。純潔の誓いという十戒を厳しく守った四人の制作者によってつくられたという。
- 1 すべてロケーション撮影。小道具やセットは持ち込まない。
- 2 音楽は使ってはならない。
- 3 カメラは手持ちカメラ。
- 4 カラー映画であること。人工的な照明は禁止。
- 5 オブティカル処理やフィルターの使用は禁止。
- 6 殺人や武器の使用、爆破などの表面的なアクションは禁止。
- 7 時間的・地理的な乖離は禁止。
- 8 ジャンル映画は禁止。

- 9 フィルムはアカデミー35ミリ使用。監督名はクレジットにのせない。
- 10 現代映画に挑戦する十戒を守りぬいて、98年カンヌ国際映画祭審査委員賞を受賞。授賞式の舞台上に立ったのは、二十八歳のデンマーク青年、トーマス・ヴィンターベア。作品にその名はない。

\*



褐色の大地に立つ邸宅。領主の還暦祝にかけつける二男一女とその家族。華々しいはずの祝賀の式は、すさまじい憎悪と復讐の場となる。

妹と双生児だった長男は、妹と共に



父子相姦。妹は自殺。長男はいまだに独身。兄弟の中で唯一家族を持つ次男は愛人を持ち、未婚の長女は、新しい愛人の黒人を連れて参加する。その黒人に向けられる蔑視と罵声。

デンマークの映画だからこそ観に行った私は、次第に胸苦しくなる。逃げ出したくなる。

一九八〇年、第二回世界会議・コペンハーゲン会議に参加した私は、フェミニストのコミュニケーションの一つに宿泊した。白夜を毎夜毎夜語り明かして思わず一か月を過ごした。コミュニケーションの人も、毎夜訪れるいろいろなジャンルの人びとも、限りなくやさしかった。そして温かかった。礼儀正しかった。私が席に加わると、みんなはデンマーク語での会話をヒタリとやめた。英語が不得手な人もいたのに。

しかし映画では、長女の黒人の愛人がデンマーク語を話さないのを知って、無遠慮な差別語を、出席者のほとんど全員が投げかける。

そして、子どもたち、——とくに長男が父親にぶつける憎悪の言動。色を失う父親。とりなそうとする母親や友人たちの努力も、一つ一ついつそう醜悪な局面を導き出してしまふ。

これがデンマークの実態だろうか。もしも自分に近親相姦のトラウマがあつたら、この映画を観ることで傷口は再び大きく広がり、修復不可能になるだろう。

拷問にかけられたような長い時間に席を立とうとしたとき、短い、しかし強烈な言葉が、局面を変える。

すぐにエンディング。

メインタイトル同様、波にただよう

文字。しかし、今度の波はややおだやかに見える。そして初めて静かな音楽が耳に入る。

「私は監督として、個人の趣味趣向を捨てます。私はもはやアーティストではありません。私は、作品」を作ることとをやめます。美しさや調和といったものより、真実が重要だから……。

すべてを神の名のもとにおいて」画面に名を印さなかった監督、トーマス・ヴィンターベアの言葉が心に沁みる。さすが、フェミニズムの国、そしてキェルケゴールの国の作品。

——こんな手法で「従軍慰安婦」が描けたら、と、ふと思う。(斎藤 千代)

\*

◆7月上旬から東京・渋谷のユーロスペース(03・3461・0211)でロングランの予定。

## あごら読書室

### 1945年のクリスマス

ベアテ・シロタ・ゴードン 著

平岡磨紀子 構成

柏書房

日本国憲法草案の作成に携わり、第二十四条に「男女平等」を書き込んだことで知られるベアテ・シロタ・ゴードンさんは今年七十五歳。この五月十二日、〈戦争への道をゆるさない女たちの連絡会〉主催で東京・全水道会館で講演と吉武輝子さんとの対談が行なわれ、初めてその肉声に触れた。流暢な、しかもウィットに富んだ日本語にまず驚き、豊かな表情と温かい雰囲気、「偉大な女性」という先入観がたちまちふっ飛んだ。

そのあと、この本を読み、ベアテさんが

私たち日本の女性にくれたプレゼントがとてつもなく大きかったことに改めて気づいた。やはり彼女は「偉大な女性」だった――。

ベアテさんの父はリストの再来と言われた天才ピアニスト、レオ・シロタ。一九二九年、山田耕作の招きで東京音楽学校に赴任し、ウィーン生まれのベアテさんは五歳で初めて日本の土を踏む。それから十五歳で米国の大学に留学するまでの十年間、彼女は日本文化を存分に吸収しながら育つ。この経験が一生を決定づけることになった。

留学後、太平洋戦争が勃発。ユダヤ人である父の親戚は大部分ヨーロッパにあり、次々とナチスの手で収容所に送られていった。東京にいたベアテさんの父も

音楽学校を罷免、疎開した軽井沢で、両親は苦しい生活を余儀なくされる。ベアテさんは自分がある国と両親がいる国との戦争に直面し、音信が途絶えた両親の消息を知りたい一心で、学業のかたわら日本語短波放送の翻訳のアルバイトを始める。はからずもそこで一層日本語翻訳能力を磨くこととなり、のちのGHQの仕事に大いに役立つことになった。

GHQに入れば日本に行ける、両親に会える……本の題名である一九四五年クリスマスイブ、二十一歳のベアテさんは、GHQ民政局のメンバーとして久しぶりに日本の土を踏んだ。本の冒頭のシーンは、両親との劇的な再会。この時には、憲法草案づくりに携わるとは夢にも思わなかったそうだ。

運命は翌年二月に突然降ってきた。マッカーサー元帥が、ベアテさんの所属する民政局に憲法の草案作成を命じたの

だ。作成に許された時間はわずか九日間。この本の第五章は、運命の九日間を日記形式で時々刻々と記録している。まさにこの本のハイライト。

「あなたは女性だから、女性の権利を書いたらどうですか？」——上司の言葉に飛び上がって喜んだベアテさんは、東京中の図書館を駆け回って各国の憲法を集め、女性の権利に関する条文を抜き書く。特にワイマール憲法とソビエト憲法が役立つたという。彼女が書いた草案には、婚姻の自由、職業選択の自由はもとより、婚姻出子の差別禁止までも盛り込まれていた。現代から見ても何と画期的で先進的な条文なのだろう。「女性と子どもが幸せにならなければ平和は訪れない」と言うベアテさんの心情があふれている。

しかし、そのほとんどは草案の段階で「憲法に入れるには細かすぎる」と削られ、彼女は涙で上司に抗議したが受け入

れられなかった。だが、かろうじて残った「家族生活における両性の平等」条項に日本側が難色を示したとき、何と、ベアテさんの書いた条項をほとんど削った上司が「シロタさんが日本女性の立場や気持ちを考え、一心不乱に書いたものだ」と主張してくれたのだ。こうして、女性の権利を第二十四条に盛り込むことが実現した。それはまさに間一髪というところで、憲法に盛り込まれたのだった。

草案作成の件は極秘とされ、ベアテさんは最近までこのことを一切言わなかったという。

アメリカに戻って、GHQで同僚だった日本語が堪能なゴードン中尉と結婚したベアテさんは、その後ジャパン・ソサエティとアジア・ソサエティのプロデューサーとなり、数々の一流アーティストをアメリカに招聘して公演を成功させる。一流の芸術を見極める眼力、交渉の粘り

強さに驚嘆する。文化交流という面でも、日本はベアテさんに多大な恩恵をこうむっている。

登場人物が生き生きと描かれているのも、この本を一層魅力的にしている。両親GHQの上司と同僚、お手伝いの美代さん、通訳をした市川房枝さん、棟方志功夫妻、淡路人形の一座など、各人の個性が際立っている。ベアテさんは人間が心底好きなのだろう。

この本は、ベアテさんの語りをドキュメンタリー作家の平岡磨紀子さんが文章に起こし、関係者の証言や資料を交えて構成するかたちで書かれた。平岡さんの構成力のすばらしさにも敬意を表したい。憲法が危険にさらされている今、ぜひとも多くの方に読んでいただきたい。憲法に込められたベアテさんの気持ちを感じてほしい。

(あ)



# あごらのCDができました

♪ One for all. all for one!! ♪

昨年早春、へあじら事務局へにかかってきた一本の電話。「あのー、そちらで出されている『あじら』という雑誌の裏表紙に書いてある詩は、どなたの作品なのでしょうか……」。聞けば、青森県のアマチュア合唱団（五所川原合唱団）の方で、この詩に曲をつけた「One for all. all for one!!」という題名の歌を「リサートで愛唱をわたるよか。今度のCDをつくることになったので、作者に許可をいただきたい……」というようでした。

作者は、実はへあじらの呼びかけ人、斎藤千代さん。斎藤さんはとても喜んで、まことにOK。そして、すてきなCD「Songs vol. 2」が生まれました。

じつはじつは、このメロディーを作曲されたのは、坂崎隆浩さんです。この楽譜を見れば、歌ってみたいですよ。

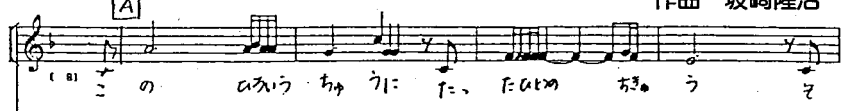
CD「Songs vol. 2」は十四曲入り、千円です。お問い合わせは、[adm@music.ocn.ne.jp](mailto:adm@music.ocn.ne.jp) 菅原邦弘さんへ。ホームページは <http://www.linkclub.or.jp/~sgwr/> 〈あじら〉事務局（TEL: 09.3355.4364 FAX: 09.3355.4364）でも二十枚限定販売します。

# One for all.all for one!!

作詩 斎藤千代


作曲 坂崎隆浩

[A]



( 81 ) こ の おろち ち うい へ、 へいへい おろち う へ

( 81 )



( 121 ) の おろち ち うい へいへい へいへい わた し へいへい

( 121 )

[A']



( 161 ) へいへい わた がえんがい ち う へいへい がえんがい わた

( 161 )



( 201 ) し か がえんがい おろち へいへい へいへい へいへい へいへい

( 201 )


[B]



( 241 ) へいへい へいへい あ へいへい わ た し へいへい へいへい

( 241 )

[B']



( 281 ) へいへい へいへい へいへい へいへい へいへい へいへい へいへい

( 281 )



( 32 )

い、え、い、え、い、え、い、え、う
 た、た、た、た、た、た、た、た

( 35 )

た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た

( 40 )

た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た

( 41 )

た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た

( 40 )

た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た



Musical score for 'E' (611). The score is written on a grand staff with a treble and bass clef. The melody is in the treble clef, starting with a quarter note G4, followed by eighth notes A4, B4, and C5, then a quarter note B4, and a half note A4. The bass line is mostly rests. The lyrics are 'あ ざた ねた い' (a za ta ne ta i) and 'ええ ちよ, ち Wow--- E-E'.

Musical score for the vocal part of 'La... La...'. The score is on a single staff with a treble clef. It begins with a whole note 'La' followed by a half rest. Then, there is a measure with a half note 'La' and a half note 'La'. This is followed by a measure with a half note 'La' and a half note 'La'. The score ends with a double bar line.

The musical score for 'The Rose Tree' is presented in two systems. The first system consists of a treble clef staff with a key signature of one flat (B-flat) and a 2/4 time signature. The melody is written in eighth notes, starting on a G4 and moving up stepwise to a D5. The second system consists of a bass clef staff with a key signature of one flat (B-flat) and a 2/4 time signature. The bass line is written in eighth notes, starting on a G3 and moving up stepwise to a D4. The tempo is marked 'Allegretto' and the meter is '2/4'.

The musical score for "The Rose Tree" is presented in two systems. The first system consists of a treble and bass staff. The treble staff begins with a treble clef, a key signature of one flat (B-flat), and a 2/4 time signature. It contains a melody of eighth notes: G4, A4, Bb4, A4, G4, F4, E4, D4. The bass staff begins with a bass clef and contains a single whole note: G3. The second system also consists of a treble and bass staff. The treble staff contains a melody of eighth notes: E4, D4, C4, Bb3, A3, G3, F3, E3. The bass staff contains a single whole note: G2. Both systems end with a double bar line and a repeat sign. The title "The Rose Tree" is written in a decorative font above the first system.

「ギリシャの古代アゴラ」から

今、ギリシャの「古代アゴラ」に来て  
います。鳥のさえずり、真赤なポピーが  
咲き乱れ、すぐ近くの丘に建つアクロポ  
リスのパルテノン神殿を見ながら、とて  
も幸せな気分です。



B・C（紀元前）時代の多くのものに  
ふれ、つかの間ではありますが、ゆつ  
たりした時に身をまかせています。現実  
の世界から一時的に身をひく勝手を十  
分意識しつつ、時の流れに身をゆだねて  
います。紀元前五、六世紀の哺乳びんや  
チャイルドチェアーなど見つけては喜ん  
でいます。

受験のために暗記した歴史はバラバラ  
のピースで、ちつとも役立ちません。本  
当に歴史を読み直したいナーと思ってい  
ます。  
（札幌市 高橋芳恵）

「249号「周辺事態法」に思う」

六〇年安保改定時以来の大転換なの  
に、運動が盛り上がらない原因の一つに  
は、マスコミで反対運動を取り上げない  
（メーデー以外の大衆集会はほとんど無  
視）。集会も、何百何千というデモをやっ  
てもTVには映らず、それこそ平和ボケ

して、行楽地や連休での渋滞は映しても、  
NATO空爆によるコソボ難民をイメー  
ジさせる切り口は見せてくれない。

井上ひさしさんたち文化人呼びかけ  
の、周辺事態法反対の意見広告は、朝日  
など中央三紙から掲載を拒否されたとい  
う話だから、問題点を書いても、法その  
ものに反対の紙面にはなっていない。だ  
からこそ『あごろ』の価値があるのかも  
しれません……。

後方支援と言えども、「敵国」から見れ  
ば、攻撃の対象となり、仮に原発にでも  
爆撃されたら大変、と、被害者意識から  
の「アメリカの戦争に巻き込まれるのは  
反対」との言い方があります。しかし、  
朝鮮戦争・ベトナム戦争・湾岸戦争と、  
在日米軍の出撃基地として間接的に参戦  
してきたのが、今後は自衛隊はもちろん  
自治体・民間まで総動員されて「戦争の  
加害者の側」に立たされていくことの方



が、より大問題です。

(山形県尾花沢市 菅野真治)

### 「手づくり選挙に挑戦」

「地縁・血縁・カネ」にとらわれない選挙を目指し、今回の統一地方選の市議選に立候補しました。ポランティアによる手づくり選挙で、十万円弱の経費はカンパで十分賄えました。

六人ほどのスタッフとワゴン車一台で、できる限り街頭に出て、私の思いを訴えた一週間でした。市の現状に不安・不満を持つ市民の声や、仲間と共に学び活動してきた環境・福祉問題を議会ですっきりと発言していくこと、さらに、栄養士の仕事をしながら感じてきた食環境問題などを訴えました。

名前の連呼は極力控え、短いフレーズに思いを含めました。畑から土まみれの手で駆けつけ、「あなたの話に感動した。考えが変わりました」と固い握手をしてくださった方など、感動の毎日でした。

立合演説会も選挙公報もなし。有権者は、一体何を基準に選ぶのか疑問だらけです。有権者の心を縛る「自治会推薦」「後援会の名簿集め」に抵抗を感じ、自分の判断で投票してほしいと、あえて地域の習慣を取り入れませんでした。

今も甲州選挙と言われ、「酒」「菓子折り」「カネ」が飛び交う土地柄。結果は、落選でした。しかし、貴重な票をたくさんいただき、心から感謝しています。私に託してくれた一票一票の思いを大切に、今後も「地球を、そして、いのちを守りたい」をテーマに活動を続けるつもりです。若い人たちに對して恥ずかしくない選挙が早く実現するよう祈りつつ。

(山梨県都留市 清水絹代)

「あこら二十五周年にカンパをありがとうございました」

### ◆カンパをくださった方(敬称略)

青木笛美／芦谷美鈴／石井明子／石崎雅子／伊藤誠子／伊藤汎美／糸数京子／

伊良部裕子／宇佐川富子／遠藤むら子／大橋倫子／小野良子／岡田黎子／岡部栄美香／加藤祐子／金住典子／北村三和子／木村兼子／許照美／熊本房江／栗原君子／小島サカエ／斎藤千代／酒井興子／佐藤陽子／重原惇子／しまようこ／白井博子／菅野かつ子／高嶺典子／滝島典子／田栗美穂／田中喬子／田中幹子／辻和子／寺田芳子／殿島三紀／中島克子／中島はるみ／長嶺美奈子／中村道子／中山紀代子／新見麗子／根井はる／野村三恵子／婦人民主クラブ

### 〔お願い〕

◆このままではいけないと、誌面の刷新を毎日考えながら、発行資金の調達に時間とエネルギーの九割を費やし、眠れぬ夜を重ねました。資金問題が解決しないと、理想の実現は難しいのですが、「それほど問題意識のない方も、思わず手にとってみたくなる雑誌」を目指して、刷新の準備をすすめています。

◆それについてお願いがあります。

・芯はきちんとしているけれど、口当たりのよい、味わいのある記事。思わず笑顔になる記事等々をぜひ送ってください。稿料までは難しいのですが、掲載誌を相当数、お贈りします。

・ハガキ一枚、電話一本でも、いつでもご批評を。どんな批判にも耳を傾けるのが、創刊以来の〈あごろ〉の姿勢です。各地で講演会、学習会等、どしどし開いてください。必要なら講師は派遣します。

・カンパ大歓迎。疲労が軽減されます。力と勇気が湧きます。

### 〔編集後記〕

◆今回『女・エロス』と『婦女新聞』を初めて読み、その面白さにすっかりハマッてしまいました。『あごろ』の古い号も読んでみようと思います。二十五周年記念号にご協力いただいた皆様に、改めて御礼申し上げます。

(れ)

◆タイムリーな題材と〈あごろ〉での出会いに、私はいつも力づけられています。

今までの〈あごろ〉にありがたうを、これからの〈あごろ〉によろしくと。(節)

◆〈あごろ〉の泣き所は貧乏、でも、あごろメイトから寄せられた宝の山、なんと豊かなバックで幸せな私たち!!

(オニ)

◆いつも波瀾万丈の〈あごろ〉と出会って、よろけながら十年。でも新宿のオフィスで知り合った女たちの存在は、私にとって宝物。さて十年後、十一歳の娘と私は〈あごろ〉から何を得るだろう。(石)

◆「ご苦労だった」と、たくさんの方が私の名前を挙げて謝意を表してくださいましたが、私は「差別に気がつきながら放置すれば、自分も差別に加担することになると」、「行動せずにはいられなくて」行動しただけのことです。

四半世紀も続くとは、夢にも思っていませんでした。それが思いがけず持続し、「持続は力なり」と、この頃は〈あごろ〉

の評判も非常に良くなって、仕事もしやすく、生きやすくなりました。

個人的に思いがけぬ成果になったのは、人間きらいだった私が、いつのまにか「人間大好き」になり、「自分も大好き」になったことです。これは本当に幸せ、皆様にどんなに感謝しても足りません。

ガウデイのことはありませんが、「一人でつくったものは、あまり意味がない。みんなで作ってこそ」と、思います。ガウデイの作品のように、たとえ未完で終わっても、いつかまたそこに新芽を、と思ってくださいる方も出るかもしれません。あまり意気込まず、それぞれが小さな力を出し合いたい。『あごろ』の編集にも、集会、勉強会その他の企画にも、もつとどしどし参加してください。「自分は拠点には参加してないので」とおっしゃる方もありますが、執筆も、編集も、拠点にかかわりなく、毎号参加できる部分もたくさんあります。毎日、お待ちしています。

(斎藤千代)

へあぐらへは、人と人が出会つひろば——

思い悩んだとき、もつと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……。心おきなく話し合える仲間がいる……。そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌『あぐら』を軸に、よりよい自分と社会を目指す ゆるやかな連帯。「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

会費は月刊『あぐら』の誌代込みで月額七百円。一年分前払いが原則ですが、ご相談に応じます。入会金は二千円。ハガキかFAX、電話を頂ければ、申し込みカードをお送りします。

へBOCCへ の登録も、どつぞ……

一九八〇年に生まれたへBOCCバンク・オブ・クリエイティビティへは、へ創造力の銀行へ。あなたの創造力や特技、希望の報酬をへ連絡ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんなへ創造力へでも歓迎！ ただし、半年以上へあぐらへ会員の方に限ります。

連絡先

どちらも〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4 中公ビル  
TEL 03-3354-3941 FAX 03-3354-9014  
Eメール XLV05467@niftyserve.ne.jp

あぐら 250号 あぐらとエロス——戦後フェミニズム雑誌の流れをみる ●発行1999年6月10日  
(5・6月合併号)

●編集 あぐら新宿

●発行所 あぐら MINI 編集部 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4

●TEL 03-3354-3941 ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@niftyserve.ne.jp.

●定価 本体1143円＋税 ●振替 00100-0-5264



9784893060938



1920036011438

ISBN4-89306-093-7

C0036 ¥1143E

女による女のBOC出版部

〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4

定価 本体1143円+税

この ひろい宇宙に  
たった一つの地球  
その 大きな地球に  
たった一人のわたし  
そして あなた  
かけがえのない地球  
かけがえのないわたし  
かけがえのないあなただから  
たいせつに たいせつに しよう  
あなたも  
わたしも  
地球も

たった一度きりの人生だから  
思いきり  
のびやかに生きよう  
だれもが だれをも  
ふみしだくことなく  
胸の底まで深く息をし  
ああ 生きててよかったねと  
ほほえみあえる地球にしよう  
へあごらへ  
人と人の出会うひろば  
へあごらへ  
人と人の共に生きるひろば

雑誌・書籍の出版

差別・平和・環境 講師派遣

翻訳・速記・調査その他

へあごらへを支える

へBOCへに

ご発注ください

創業 1960 年——  
女性専門職集団

BOC

☎ 03-3354・3941 FAX 9014

E・meil XLV05467@niftyserve.ne.jp.